

S-HTP における現代青年の描画特徴の研究

—新たな描画指標の構築に向けて—

瀨瀨千晶

目 次

第 1 章 問題と目的	1
第 I 節 S-HTP の概要	2
I-1. S-HTP とは	2
I-2. S-HTP の施行方法	2
I-3. S-HTP の使用利点	3
第 II 節 S-HTP の研究史	4
II-1. 海外と本邦における描画テストの開発と発展	8
II-2. S-HTP の開発	8
II-3. 統合失調症に関する研究	9
II-4. S-HTP の体系化	11
II-5. S-HTP 研究の発展	12
II-6. S-HTP における研究テーマの広がり	13
①基礎的研究	13
②青年期研究	15
③パーソナリティ研究	16
④応用研究	17
II-7. まとめと今後の課題	18
第 III 節 現代青年に増加する問題	19
III-1. S-HTP 研究における現代青年像—「統合性」の低下と未熟化—	19
III-2. 学生相談研究における現代青年像—抑うつ傾向の増加—	20
第 IV 節 本論文の目的	22
第 V 節 本論文の構成	23
第 2 章 両親の養育態度と青年の描画特徴の関連	24
第 I 節 問題と目的	25
I-1. 親の養育が子どもに及ぼす影響	25

I-2. 親の養育態度は S-HTP にどう反映されるか	26
第 II 節 方法	26
II-1. 調査対象者	26
II-2. 調査用紙	26
II-3. 実施手続き	27
第 III 節 結果	27
III-1. 有効対象者	27
III-2. S-HTP の評定	28
III-3. 養育態度による対象者の分類	32
III-4. 両親の養育態度と描画特徴の関係	34
III-5. S-HTP の代表例	38
第 IV 節 考察	40
IV-1. 養育態度と S-HTP の描画特徴の関連性	40
IV-2. 動物の出現率の高さと養育態度	41
第 V 節 まとめと今後の研究課題	42
IV-1. 本研究のまとめと問題点	42
IV-1. 今後の研究課題	43
第 3 章 友人との交流態度と青年の描画特徴の関連	44
第 I 節 問題と目的	45
I-1. 青年期の友人関係	45
I-2. 現代に特徴的な青年期の友人関係	46
I-3. 本研究の目的	47
第 II 節 方法	47
II-1. 調査対象者	47
II-2. 調査用紙	47
II-3. 実施手続き	47
第 III 節 結果	48

Ⅲ-1. 有効対象者	48
Ⅲ-2. S-HTP の評定	48
Ⅲ-3. 友人への交流態度による対象者の分類	52
Ⅲ-4. 友人への交流態度と描画特徴の統計的検討	54
Ⅲ-5. S-HTP の代表例	57
第Ⅳ節 考察	60
第Ⅴ節 まとめと今後の研究課題	62
第 4 章 『異質表現カテゴリー』の作成	63
第Ⅰ節 問題と目的	64
Ⅰ-1. 臨床的に有効な評定項目の必要性	64
Ⅰ-2. 本研究の目的	65
第Ⅱ節 方法	65
Ⅱ-1. 調査対象者	65
Ⅱ-2. 調査用紙	65
Ⅱ-3. 実施手続き	66
Ⅱ-4. 『異質表現』の抽出と設定	66
第Ⅲ節 結果	66
Ⅲ-1. 有効対象者	66
Ⅲ-2. 異質表現カテゴリーの評定	67
Ⅲ-3. S-HTP の代表例	71
Ⅲ-4. 異質表現と抑うつ傾向の関係	76
Ⅲ-4-1. 異質表現の有無による BDI-II 得点の比較	76
Ⅲ-4-2. 異質表現 12 下位項目における BDI-II 得点の比較	76
Ⅲ-4-3. 異質表現該当項目数による BDI-II 得点の比較	78
第Ⅳ節 考察	80
Ⅳ-1. 異質表現カテゴリー項目の検討	80
①多視点	80

②透視画	80
③空間の偏り	80
④人の簡略化	81
⑤全体の簡略化	81
⑥強迫的	81
⑦過剰な陰影	81
⑧夜・雨の風景	82
⑨過大な太陽	82
⑩一部の突出	82
⑪アニミズム	82
⑫不安定な描線	82
IV-2. 現代青年を特徴づける項目	83
IV-2-1. 「多視点」	83
IV-2-2. 「人の簡略化」	83
IV-2-3. 「過剰な陰影」	84
IV-3. 異質表現該当項目数と抑うつとの関連性	84
第IV節 本研究の限界と今後の研究課題	86
第5章 事例研究	87
第I節 目的および対象者	88
I-1. 本章の目的	88
I-2. 事例対象者	88
第II節 学生相談事例(事例A~I)	90
事例A	91
事例B	92
事例C	93
事例D	94
事例E	95

事例 F	96
事例 G	97
事例 H	98
事例 I	99
第Ⅲ節 スクールカウンセリング事例(事例 J～P)	100
事例 J	101
事例 K	102
事例 L	103
事例 M	104
事例 N	105
事例 O	106
事例 P	107
第Ⅳ節 考察	108
Ⅳ-1. 異質表現項目の抑うつ指標としての妥当性	109
Ⅳ-2. 児童における抑うつ指標の検討	109
第 6 章 総括的討論	111
第Ⅰ節 第 1 章～第 5 章の総括	112
第Ⅱ節 総合考察	114
Ⅱ-1. S-HTP における現代青年の描画特徴	114
Ⅱ-1-1. 未熟化と抑うつ傾向	114
Ⅱ-1-2. 簡略した人と詳細な動物の組み合わせ	114
Ⅱ-1-3. 全体的陰影の出現	115
Ⅱ-1-4. 陰影表現と内省力の関連性	115
Ⅱ-2. 新たな描画指標の構築	116
第Ⅲ節 今後の研究課題	118
Ⅲ-1. 異質表現カテゴリーの体系化	118
Ⅲ-2. 学校臨床における S-HTP の展開	118

Ⅲ-2-1. アセスメントツールとしての有用性	118
Ⅲ-2-2. 抑うつ指標の子どもへの適用	119
文献	121
初出一覧	131
資料	132
付記	140

第 1 章

問題と目的

第 I 節 S-HTP の概要

I-1. S-HTP とは

『Synthetic House-Tree-Person Technique (以下, S-HTP と略¹⁾』とは, 1 枚の紙に「家」と「木」と「人」を課題として, 他をどのように描くかは対象者の自由に任せる描画テストである。

まったく課題がなく絵を描くことを求められる自由画は, 不安の高い対象者にとっては, 何を描けばよいのか, あまりにも抛り所がなく, 描写の拒否が生じることもある。しかし, S-HTP は 3 つの課題が緩やかな刺激となり, 対象者のさまざまな発想と表現を引き出すことが可能である。対象者が描く S-HTP は, 一見して寂しさや脆弱性が伝わる絵, エネルギーはあるが, やや落ち着きにかける絵, 攻撃性の強い絵等々, 非常に多種多様である。もちろん, このことはバウム・テストなど他の描画テストにおいても同様であるが, SHTP は家, 木, 人をいくつ, 何人, どのように描いてもよく, 付加物をどれだけ描くことも自由なので, 他の描画テストに比べて, より対象者の個性が絵に表れやすく, 1 人 1 人の絵の違いが明瞭である。そして, それぞれの絵から, 対象者の自己像, 家族との関係, 友人や社会との関係に加え, 精神病理や健康的側面などを意識的・無意識的の両側面から捉えることが可能である。

以下に S-HTP の施行方法と, 使用利点について簡潔に述べ, S-HTP が開発されるまでの背景から現在までの S-HTP の研究史を次節で詳しく述べることとする。

I-2. S-HTP の施行方法

使用する用具は A4 の画用紙 1 枚と HB の鉛筆 2~3 本と消しゴム 1 個である。画用紙は必ず横にして使用するよう伝える。

教示は「家と人と木を入れて, 他は自由に自分の思うように 1 枚の絵を描いてください。絵の上手い・下手はまったく気にしないでください。でも, できるだけ丁寧に描いてください。」としている。

小・中学校のクラスでの集団施行においても同様の教示を行うが, 教示を聞き間違えたり, 忘れてしまい 3 つの課題のいずれかが欠けることが時折みられるので, 筆者は黒板に「家・木・人」と課題を書くようにしている。

時間制限は行わないことが望ましいが, 集団施行の場合には 30~40 分程度の時間枠を設ける必要もある。その際, 施行者が時間を計っており, 適当なところで残り時間を知らせていくことを, 教示とともに伝え, 対象者が時間を気にせず絵を描くことに専念できるように考慮する。

個別施行の描画終了後には, 施行者から対象者に対して「Post Drawing Interrogation (描画後質問: 以下, PDI と略)」を行う。基本的な質問内容は「絵全体はどんな場面や状況を描いたものか, 「人は何歳くらいで, どのような人

¹「統合型 HTP」と表記される場合もあるが, 「統合型 HTP」と「S-HTP」は同一のものである。

か」、「家はどんな家で、中に人はいるのか」、「木はどんな木で、大きさはどのくらいか」などである。しかし、対象者によって、自主的に説明を続ける者や、わずかな説明に必死な者など、回答は様々であるので、施行者は決して誘導的や追求的にならず、対象者がイメージを広げやすく、語りやすい姿勢で関わることが肝要である。

また、筆者は集団施行においては、「絵全体」、「人について」、「家について」、「木について」の、それぞれの説明と、「他に説明として加えたいこと」を対象者に記述してもらう『描画後質問用紙』を配布し、回収している。

I -3. S-HTP の使用利点

S-HTP の描画テストとしての使用利点を、以下の 5 点に簡潔にまとめた。

①『House-Tree-Person technique (以下, HTP と略)』(Buck, 1948) は 3 枚、『House-Tree-Person-Person technique (以下, HTPP と略)』(高橋, 1974) は 4 枚描くものに対して、S-HTP は 1 枚なので、対象者に与える負担が軽度で、エネルギー水準が低下した人や描画に抵抗がある人でも、比較的受検しやすい。また、個別施行だけでなく、集団施行も行いやすい。

②家・木・人をどのように描いたかによって得る情報の他に、家と木と人、そして付加物をどのように関連づけて描いたかを見ることによって、集団力動も含めて、自己と外界、意識と無意識などの関連性が投影される。

③家と木と人をいくつ、どのように描くかに加えて、他に何を描くかも対象者に任されているので、非常に自由度が高く、対象者の心の状態が直接的に表現されやすい。検査の構造面から考えるならば、S-HTP は課題画と自由画の中間に位置するものと考えられる。

④描画テストの信頼性・妥当性に関する研究において、描画の部分的特徴よりも、全体的な評価の方が信頼性が高いことが明らかにされており、S-HTP は家と木と人の相互関係において、多様な全体的評価が可能であり、より信頼性の高い判定が可能となる。

⑤絵に興味がない人でも、絵から「寂しい」、「怖い」、「楽しい」など、何らかの印象は必ず受けるものである。そのため、対象者の家族、教師など描画テストの専門家以外の人にも、絵を示して説明することで、対象者が置かれている状況や心理状態の理解が促される。

第Ⅱ節 S-HTP の研究史

S-HTP の先行研究を概観することにより，S-HTP の開発，1970 年代から現代に至るまでの研究，および臨床における用いられ方，その結果，得られた知見や描画指標・解釈仮説などをまとめ，特に 2000 年代からの S-HTP における研究テーマの広がりについて述べていく。

先行研究の検索は，CiNii（NII 論文情報ナビゲータ），国立国会図書館 NDI-OPAC，医中誌 Web，および Google Scholar のデータベースを用いて，「S-HTP」，または「統合型 HTP」のキーワードで検索し，該当した論文を可能な限り収集した。さらに，該当論文や書籍の引用文献を精査して新たな論文を収集した。収集した論文中に S-HTP についての記述があっても，それが参考程度の内容であり，主題として S-HTP を取り上げていない論文は，本研究からは除外した。結果的に，3 冊の著書，それぞれ 5 編以上が掲載されていた『臨床精神医学』，『心理臨床学研究』，『臨床描画学研究』などの 28 編の学術論文，9 編の寄稿論文，および 25 編の紀要論文が認められた。また，13 編の抄録が認められ，先行文献数は全体で 78 編となった。

1971 年から 2013 年 8 月時点までの文献一覧を Table 1-1～Table 1-3 に示し，本文中では主たる研究を取り上げて詳細を述べる。

Table 1-1. S-HTP 文献の一覧 (1971~1999 年)

発表年	著者	概要
1971	細木ら	HTP の変法として、家・木・人を 1 枚の紙に描写させる『多面的 HTP 法』を開発して報告。
1975	丸野ら	『多面的 HTP』の描画による無意識的イメージと、言語説明による意識的世界を探索的に研究。
1979a	三上	統合失調症者と一般成人の描画特徴を統計分析により比較し、統合失調症の指標を報告。
1979b	三上	7 名の統合失調症者の病態変化に応じた、S-HTP の描画特徴の変化を報告。
1981	三上・岩崎	幼稚園児から大学生までの描画発達の流れ・変化を報告。
1985	須賀	統合失調症者の描画パターンと臨床像を比較検討し、「会話の貧困」、「注意の障害」との関連を報告。
1987	須賀	統合失調症者と一般成人の描画形式を数量化Ⅲ類により分析。描画形式の相対的類似度を求めた。
1988	市川	統合失調症者の S-HTP を数量化Ⅲ類で分析し、描画構造を解明した。
1989	森田	全体評定の因子分析を行い、「統合的現実性」「快適感」「空間性」「色彩の豊かさ」の 4 因子を抽出。
1990	越川	統合失調症者、うつ病者、一般成人の S-HTP の描画特徴を比較し、両臨床群の病態像を考察。
1990	三根	S-HTP、バウム・テストの描画表現を拒食症者の事例と過食症者の事例で比較考察した。
1990	高田・近藤	入院中の統合失調症者、通院中の統合失調症者、一般成人の S-HTP を比較検討した。
1992	三上	離婚家庭の母に TEG、子に S-HTP を施行。母子間の検査結果の高い相互関連性を報告。
1993	平川	非行少年の 30%、シンナー吸引少年の 65%に「棒人間」が出現する結果から対人関係の問題を指摘。
1993	藤田	『へび象徴技法』と、S-HTP、風景構成法の成り立ち、内容の違いについての報告。
1994	高良・大森	入院中の統合失調症者の、入院後と退院前の S-HTP の変化を分析し、予後との関連を検討。
1995	三上	S-HTP の施行方法、解釈、事例、統計分析などを体系的にまとめた、S-HTP の入門・解説書。
1996	前川	個人面接で S-HTP を施行し、描画体験過程に影響を与える要因、効果的な援助介入についてを検討。
1997	福西ら	リエゾン精神医学での、情動表現の困難さを伴う小児身体表現性患者への S-HTP の有効性を検討。
1997	平川ら	東京家庭裁判所調査官による研究報告。非行少年の描画特徴と臨床像の関連についての検討。
1998	桑原ら	東京家庭裁判所調査官による、調査官の初心者が S-HTP を使用するための手引としての論文。
1998	三上	16 年前と現代の小学生の S-HTP を比較し、現実感の喪失や無機質など、現代の絵に表れた問題を指摘。
1998	三上ら	非行少年と一般少年の絵を比較し、非行少年の発達が年齢相応の部分と未熟な部分を報告。
1999	平川	非行少年と、その親にも S-HTP を施行し、少年非行の背景にある親子関係の問題について検討。

Table 1-2. S-HTP 文献の一覧(2000~2009年)

発表年	著者	概要
2000	荒川	S-HTP に「枠づけ法」を取り入れ、小学校高学年に集団施行した結果、得られた児童の特徴を報告。
2000	福西・菊池	身体化障害患者の心理やストレスを、S-HTP によつての患者の内的世界を捉えて検討を行った。
2000a	福西ら	統合性を中心に、S-HTP の評価方法を確立し、定量化するための試みと問題、今後の課題を報告。
2000b	福西ら	悪性腫瘍、臓器不全、HIV 感染など危機的状況下の重度身体疾患患者への S-HTP の適用を検討。
2000	福田ら	阪神淡路大震災から3年後に、震災被害が大きかった地域と、小さかった地域の中学生の絵を比較。
2000	平川	非行少年事例に継続的に S-HTP を実施して、少年の心理的变化を捉えながら援助方法を検討。
2000	菊池	統合失調症、双極性障害、境界性人格障害などの事例を紹介し、描画の治療効果にも言及。
2000	小林・村山	強迫性障害、喘息、場面緘黙、不登校など児童精神科を受診した6事例の S-HTP について考察。
2000	桑原・森永	家庭裁判所の家事事件において、問題解決の方向性を探る上での S-HTP の有用性を報告。
2001	一丸ら	通り魔殺人の被害児童が在籍した小学校児童に、S-HTP を3回実施し、時間経過による変化を報告。
2002	三沢	1981年と1997~99年の小学生の絵を比較検討し、後者の児童の攻撃性・衝動性の高まりを指摘。
2003	稲田	学童期から思春期にかけて、心像風景が絵にいかにも表れるかについて、樹木、動物の変化により検討。
2003	海塚	S-HTP を媒介とした物語作成を『描画物語相互吟味法』とし、抑うつ症者への適用と有効性を検討。
2003	諸橋ら	臓器移植に意欲的な女性ドナーに S-HTP を施行し、自分の身体への著しい不安と抑圧を捉えた。
2004	市川	S-HTP とバウム・テストでテストバッテリーを組み、順序効果や両テストの描画法としての違いを検討。
2004	井原	12歳で発症した拒食症の女性事例に、7年間連続で S-HTP を施行し、母親からの分離過程を考察。
2006	青山・市川	青年期のアイデンティティ感覚の様相が、S-HTP にどのように反映するかを検討。
2006	近藤	変法『S-HTPP』を用いて、男性像と女性像の相互作用に投影される対象関係の特徴を検討。
2006	小山内・玉田	施設養育児の「半スティック・フィギュア」現象と、「太陽アイテム」に焦点を定めて検討。
2006	田畑	年齢に伴って「統合性」が向上するという仮説を検討したが、大学生の出現率は中高生よりも低かった。
2007	荒井ら	非行少年の描画特徴と、知能や性格特徴といった属性との関連について検討。
2007	藤原ら	S-HTP の適応指標としての描画特徴を見出すため、Y-G で適応を示す類型や特性との関連を検討。
2007	入吉ら	中学校教諭による論文。Q-U による学級適応感と、S-HTP における課題解決態様の分析を報告。
2007	小山内ら	家、木、人の一つを必ず入れることを条件に、アイテム選択を対象者自身に任せるという変法の試み。
2007	洪川・松下	S-HTP の基礎的研究の中で、「臨床」「発達」「他の検査との関連」「活用法」を中心とした文献展望。
2007	高橋ら	非行少年の S-HTP を集積し、その描画特徴について、一般少年群との比較検討。
2007	田中ら	在日外国人児童と、ポリビア人児童の S-HTP を比較し、移住体験が子どもに与える影響を検討。
2008	近藤	青年期・前成人期における S-HTPP の分析項目ごとの出現頻度を検討。
2008	三沢	小学生における「統合的」な絵が減少から、描画の発達レベルの停滞、心理・行動面の未発達を指摘。
2008	佐野・浦田	北海道と沖縄の大学生の S-HTP、バウム・テストを比較。S-HTP の方が生育環境を反映すると考察。
2009	入江ら	タイ北部・東北部の児童に S-HTP を施行。貧困・HIV 感染等、困難な環境でも、情緒的発達は順調。
2009	伊藤ら	小学生の心理発達について検討。描画発達の停滞は、全般に当てはまる傾向ではないと報告。
2009a	近藤	描画に投影される対象関係の様相を検討。笑顔や対面の人物像には適応的な対象関係が反映される。
2009b	近藤	自己愛を変数として検討。他者注目と自己注目の葛藤が大きい者と、少ない者の描画の違いを報告。
2009	三沢	小学生を対象として、S-HTP における年齢、施行年度による描画特徴の差を統計的に分析。

Table 1-3. S-HTP 文献の一覧(2010~2013年)

発表年	著者	概要
2010	小林・橋本	大学生にS-HTPと、自己記入式抑うつ尺度のDSRS-Cを施行し、描画にみられる抑うつ感について検討。
2010	瀬瀬・森田	大学生を自身が認知する両親の養育態度により4群化し、養育態度と各群の描画特徴の関連を検討。
2010	近藤	青年期のS-HTPPに投影される第2の分離固体化の様相を検討、人物を中心に表現されることを示唆。
2010	田畑	大学生に「枠づけ法」を施行。その効果は「描きやすいものを描ける」、「描画が大きく詳細になる」と報告。
2010	竹山・今田	ニューカマーの子どもへのコミュニティ心理学的アプローチにS-HTPを導入。心の問題を捉えた。
2011	古賀・三沢	教育相談での使用について、実施法、解釈の視点を、小学生の事例を提示して解説。
2011	Kohketsu	家・木・人の塗りつぶしなど、現代青年のS-HTPにみられる「陰影表現」を、特徴により分類して検討。
2011	瀬瀬・森田	青年の友人関係とS-HTPの描画特徴の関連を検討。自己の安定、友人との関係維持の困難さを示唆。
2011	近藤	継続面接での4枚のS-HTPPを、描き手自身が振り返り、描画にどのような意味づけをするかを検討。
2011	森・後藤	資格取得を目指す学生にS-HTP施行。保健体育教員・養護教諭志望の有無と描画特徴に有意差有。
2011	武藤	「無彩色→彩色」と、「彩色→無彩色」の順序でS-HTP施行。施行順序による描画特徴の違いを報告。
2011	田畑	家・木・人の描画順と描画特徴の関連を分析。描画順には、描画課題のもつ意味が反映されると示唆。
2011	高崎	S-HTPの「統合性」と自我の統合機能を分析し、統合機能の高さと「統合性」の高さの関連性を報告。
2012	磯部ら	幼児の心身発達に対する環境教育の効果測定にS-HTPを使用に検討。
2012	近藤	継続面接での4枚のS-HTPPを、描き手自身が振り返り、描画にどのような意味づけをするかを検討。
2012a	瀬瀬	現代青年特有の描画特徴を、従来の指標・仮説を含み13項目に分類。『異質表現カテゴリー』を作成
2012b	瀬瀬	S-HTP開発までの描画研究の背景、S-HTPの体系化から近年の研究テーマの多様化までのレビュー。
2013	武藤	無彩色と彩色のS-HTPをバッテリー施行し、具体的な描画内容の変化を統計的に分析。
2013	山田・葛西	Q-Uで分類した4群間のS-HTPを比較。Q-Uに変化のあった群の描写の縦断的変化について報告。

II-1. 海外と本邦における描画テストの開発と発展

海外における描画テストの研究分野においては、1920～1950年代にかけて、現在に至っても描画テストの中核をなす検査が次々と考案された。

まず、1926年に Goodenough が、対象者に1人の男性を描かせる『Draw-a-Man Test (以下、DAM と略)』を開発した。DAM の測定対象は子どもの知的発達水準であり、描画法ではあるが、知能検査としての側面が強い。しかし、同じ精神年齢でも描画表現が異なることや、暦年齢と知能指数が同程度の児童の間でも異なった表現がなされることから、描画には対象者のパーソナリティが投影されることが着目され、人格検査としての描画研究が始められた。1949年に Machover によって発表された『Draw-a-Person Test (以下、DAP と略)』は、はじめに性別を指定せずに1人の人間を描かせ、次に反対の性の人間を描かせる点で DAM よりも自由度が高く、知能よりも感情や葛藤などを理解しようという人格検査としての目的が明確であった。

さらに、対象者の人格構造や精神病理、および無意識レベルまでを測定する人格検査としての目的で開発された描画法としては Buck (1948) の『HTP』、Koch (1949) の『Baum Test』が代表的である。この2人に共通した点は、クライアントとの治療的な関わりを重視して病理指標や解釈仮説を構築したことである。Buck (1948) が「家」、「木」、「人」を課題に用いたのは、この3つの課題は年齢を問わず、誰にでも親しみがあり、他の課題よりも自由な言語表現を促すことに役立つからである。これらの描画法は現在も心理臨床現場で多く使用され、研究も続けられている。

本邦においては、1974年に高橋により、「家」、「木」、「人」、「人」をそれぞれ1枚ずつの紙に描かせる HTPP が発表された。このテストでは、3枚目に描いた人物と反対の性の人物を4枚目に描かせる。従って、HTP とは異なり、男性・女性の2枚の人物画が描かれる。高橋 (1974) は、同性の人物画には意識された自己像が投影されやすく、異性の人物には対人関係の特徴が投影されやすいと述べている。

その後、しばらくの間は、より科学的であろうとする心理臨床の世界において、描画テストは主観性を払拭しきれないという理由から、やや否定的に捉えられ、活発な描画研究は行われなかったようである三上 (1995)。しかし、実践的利用価値を重視する精神医療の現場において HTP や HTPP などの描画テストは有益であるとして幅広く使用され、精神障害者の人格構造や病理水準、治療経過の指標など、測定を行いたい目的と必要性に応じて変法が開発されていた。本研究の対象である S-HTP も、その変法のひとつである。

II-2. S-HTP の開発

上述したように S-HTP は本邦において開発された描画テストである。細木ら (1971) は HTP の変法として、家・木・人すべてを1枚の紙に描くという方法をはじめて施行し、S-HTP の基礎となった『多面的 HTP 法』を開発した。しかし、多面的 HTP 法は、中井 (1971) の「枠づけ法」を応用しているため、現在

の S-HTP とは施行がかなり異なる。画用紙を 3 枚使用し、1 枚目は画用紙に枠づけした後、さらにその枠内を縦に 3 分割し、それぞれの枠の中に家・木・人を単独で描かせる（非統合型 HTP）。2 枚目は用紙全体に一つの枠を描いた中に家・木・人を自由に描かせる（閉鎖型 HTP）。そして 3 枚目は画用紙には何も加えずに描かせる（開放型 HTP）。この開放型 HTP が現在の S-HTP と同様のものである。細木ら（1971）は各描画空間について、非統合型 HTP は入院や施設への収容時の個人の適応状態を、閉鎖型 HTP は家族内での適応状態を示し、開放型 HTP は社会における適応状態を示すと仮定した。この解釈仮説に基づき、種々の精神障害者に多面的 HTP 法を施行したところ、特に不登校の患者や入退院を繰り返す患者などの適応病理を把握し、入退院の時期、予後の判定の指標として有効であると述べている。

丸野ら（1975）は、多面的 HTP 法の開放型 HTP に、Diamond（1954）の家、木、人について物語化させ、さらに自由連想法によって、描き手の自我の在り方と、家族・社会との関連を捉える技法を融合した描画療法として『統合（Synthetic）House-Tree-Person 法』を開発し、この略記を『Syn. H・T・P』としている。そして、破瓜型統合失調症と診断された 18 歳の女子高校生の精神療法の過程で、Syn. H・T・P を用い、患者の精神病理や自己像、家庭像の変容を適切に捉える技法として、細木ら（1971）の研究結果を支持し、Syn. H・T・P の描画テストとしての側面も高く評価している。

三上（1995）によれば、その後も精神医療の現場においては 1 枚の紙に家と木と人を描くという現在の方式による S-HTP は実践的に広く使用されていた。しかし、初期の頃は検査者や検査環境によって、施行方法に多少の相違があったようである。三上（1979a, 1979b）が、S-HTP を臨床心理学研究の対象としてはじめて取り上げ、統合失調症の患者を対象にした 2 編の研究論文を発表したことを契機として、S-HTP 研究が後続して行われるようになった。尚、この時点での三上（1979a, 1979b）は「S-HTP」ではなく、「統合型 HTP」の名称を用いている。

II-3. 統合失調症に関する研究

1970 年代～1980 年代における S-HTP 研究は、統合失調症者を対象にした内容が中心である（三上, 1979a；三上, 1979b；三上・岩崎, 1981；市川, 1988；森田, 1989；須賀, 1985；須賀, 1987）。

統合失調症者²に対する心理検査としては、ロールシャッハ・テストも施行されたが、言語を媒介とすることや所要時間が長く、施行が困難な場合もあったため、それに代わる検査が求められた。その際、HTP や HTPP ではなく S-HTP が採択されたのは、1 枚の絵を描くことでよいので患者の負担が少なく、抵抗も少ないこと、家と木と人を描くことによって、患者の意識的・無意識的な自己

²本邦においては 2002 年まで『精神分裂病』が診断名として用いられており、参考文献にも『精神分裂病』と表記してあるが、本論文中では『統合失調症』に統一した。

像や外界への興味や関わり方など多面的な情報が得られる有用性があったからである（三上，1979a；森田，1989）。

このように，精神医療の現場での有用性は認められていたが，研究は少なかった。初期の統合失調症者の S-HTP 研究においては，主として形式的な描画特徴，その治療経過に伴う変化などを検討し，統合失調症の病理指標・解釈仮説を定めることが，各研究者に共通した目的であったと考えられる（三上，1979a；三上，1979b；市川，1988；森田，1989；須賀，1985；須賀，1987）。

三上（1979a）と須賀（1985，1987）は，統合失調者と健常者の S-HTP の形式的描画特徴の出現率を比較検討した。その結果，統合失調者は健常者より，「絵全体の統合性の欠如」，「遠近感の欠如」，「人の真正面向き」，「直立不動」，「付加物の欠如」が有意に多く認められた点で一致している。三上（1979a）は「絵全体の統合性」や「遠近感」のような，全体的評定について，「分裂病者の内界をそのまま反映するものであり，全体的評定項目は，診断や予後の判定にも有力な手がかりになる」と述べ，須賀（1985）も，統合失調症者の描画は「内容面には一定の傾向はないが，描画形式には特異的特徴がある」と述べている。

三上・岩崎（1981）は，統合失調症者の描画特徴を読み解く新たな手がかりとして，発達の視点からの研究を行っている。統合失調症者の描画特徴が退行現象を示すものなのか否かを検討するために，幼稚園児から大学生までを対象に S-HTP を施行して描画発達の流れをつかみ，統合失調症者の描画特徴との比較検討を行った。その結果，統合失調症者の描画特徴の中で，幼稚園児や小学生に対応するものは，「人」を中心としたわずかな項目に限られており，統合失調症者の描画特徴は，発達段階における退行現象とは異なるものを表すことが示された。

市川（1988）は，「病者の描画からの情報を臨床に役立てようとする臨床家は，（中略）個々の要素的な描画仮説とは別に，経験的，直感的に得た，より集約的な指標を持ち合わせているものと思われる」と述べ，集約的指標を客観的手続きにより抽出することを目的として，139名の統合失調症者の S-HTP の描画特徴を数量化第Ⅲ類を用いて分析した結果，3つの視点が抽出された。視点1は，「全体の構成力」，「画面使用度」など，描き手の「関係性の考慮」，「統合」といった精神活動のあり方に関連すると考えられた。視点2は「筆圧」，「課題の形態質」など，描き手の「自我境界」や「現実検討力」などに関連すると考えられた。視点3は「人物像の記号化」など，描き手の防衛力や意欲に関連する可能性が伺えた。

統合失調症者の描画特徴としてアイテムの描写特徴以上に，絵の全体的特徴が重要であることに着目した森田（1989）は，統合失調症群と健常群に S-HTP を施行し，絵の全体的評定について因子分析を行った結果，「統合的現実性」，「快適感」，「空間性」，「色彩の豊かさ」の4因子が得られた。統合失調症群と健常群の因子得点の比較では，4因子すべてにおいて有意差が認められた。

また，「色彩の豊かさ」は統合失調症者の色彩特徴を捉え，絵の全体的印象・評定に与える情報量を増やすため，絵に彩色する方法をはじめて用いて得た因

子である。以降、S-HTPに彩色法を用いる研究も行われるようになった。

II-4. S-HTPの体系化

1979年以来、S-HTPにおける統合失調症者の描画特徴について継続した研究を行ってきた三上は、1991年に、離婚家庭13組の母子を対象とした研究で、3歳～12歳の子どもにS-HTPを施行、母親には東大式エゴグラム(TEG)を施行し、母親のCP(Critical Parent)得点が高い場合、その子供の絵はアイテムの描画サイズが全体に小さく萎縮しているなど、母子間の検査結果に高い相互関連性がみられたことを報告している。そのあたりから、三上の研究の関心は精神病理から、描画の発達過程に移行していったようである。

そして、それまでの蓄積された研究データ、および研究結果に基づいて、S-HTPの入門・解説書である『S-HTP法—統合型HTP法の臨床的・発達のアプローチ—』(三上, 1995)を著し、S-HTPを体系的にまとめ上げた。この著書において、三上はそれまでの研究で用いていた「統合型HTP」から「S-HTP」へと名称を改め、確立した。S-HTPの具体的な施行方法、基礎的な解釈を述べた後に、「臨床的研究」として、統合失調症群のサイン(病理指標)を求めるために、人物画、バウム・テスト、およびHTPの先行研究を参考に、S-HTPにおける家と木と人の相互関係を重視して105の評定項目を設定し、一般群との比較検討を行った。次に、「発達の研究」として、評定項目を154に増やし、幼稚園年長児から大学4年生までの男女のS-HTPを比較検討し、発達による描画特徴の変化の分析を行っている。この時点においては、S-HTPの評定項目は、まだ一定には至っていないが、三沢³(2002)は『描画テストに表れた子どもの心の危機—S-HTPにおける1981年と1997～99年の比較—』において、時代背景の変化などによる描画特徴の変化に伴って評定項目の改正を行い、149の評定項目を設定し、現在に至るまで149項目を使用している。その中でも、三沢は知的水準、年齢相応の成熟、社会への適応能力などを1枚の絵全体のまとまりから評定する「統合性」を最も重視している。「統合性」5段階の評定項目をTable 1-4に示す。

³ 三上は2002年以降の著書・論文は、三沢として発表している。

Table 1-4. 三沢 (2002) による「統合性」の評定項目

「統合性」5 項目	内 容
統合的	全体に一つのまとまった場面構成がなされ、不調和な部分がない。
やや統合的	全体的に一つのまとまった場面構成がなされているが、一部に不調和な描写が残る。
媒介による統合	家と木と人自体が羅列的だが、地面・山・草などの媒介によって、一応の統合は図られている。
やや羅列的	一部に関連付けは見られるが、全体的には羅列的に描かれている。
羅列的	家・木・人が無関係に羅列されている。

三沢 (2002) は、1980 年代の小学生の S-HTP と、1990 代後半の小学生の S-HTP を比較検討した研究結果から、1990 代後半の S-HTP には、①攻撃的な絵の増加、②非現実的な表現の増加、③小さく暖かみのない家の増加、④棒人間など簡略化した人の増加、⑤高学年での描画の発達レベルの停滞を指摘し、子どもに情緒的側面の荒廃や空虚化が認められ、今後も、これらの傾向が進んでいくことを危惧している。

また、三沢 (2002) は、こうした情緒的側面の問題には、核家族化や地域コミュニティの減少により、子どもが幼児期から多様な人間関係を経験しないまま成長していること、「お受験」などと言われる早期教育により、情緒的側面を欠いた知的側面の発達のみが促進されていること、および、パソコンや TV ゲームが作り上げるバーチャルな世界が過度に浸透していることなどが影響している可能性を指摘している。以降、三沢 (2008, 2009) は、幼少期からの発達過程において、養育者や周囲の人たちと、直接「話す」、「聞く」、「遊ぶ」など、親密なバーバル・コミュニケーション、およびノンバーバル・コミュニケーションを、どの程度、経験してきたかという視点から、現代の幼稚園児から大学生までの S-HTP における描画特徴の分析・検討を行っている。

II-5. S-HTP 研究の発展

上記したように S-HTP は元来、精神医療の現場における必要性から発展した描画テストである。しかし、現代においては心理臨床の現場も教育・福祉・司法・産業などに広がり、S-HTP も多様化した研究分野で使用されており、その研究数は 2000 年代に入ってから増加がみられる。その背景のひとつとして、一丸ら (2001) の研究の影響が考えられる。一丸らの研究においては、1988 年 1 月に下校途中の小学 6 年生男子が通り魔によって殺される事件が発生し、教育関係者への心理的支援の一環として、当該小学校の全児童を対象に S-HTP を事件後の 1 年間に 3 回継続施行した結果が検討されている。事件に心理的影響を

受けたと認められた生徒の S-HTP は、①攻撃性、混乱などを特徴とする「興奮」と、感情の抑止、非現実感をなど特徴とする「麻痺」の 2 つのタイプに分かれた。②影響がみられた生徒は 1 回目の施行で 40%、2 回目で 26%、3 回目 が 14% と時間経過とともに減少した。③影響を受けた割合は男子 59.6%、女子 20.9% で、男子の方がより影響が大きい。④事件現場にいた児童や被害者の弟妹など、被害者に近い児童には影響がより強烈に現れたことなどが報告された。統計による形式分析と並行して、描画特徴の意味するものを詳細に検討する内容分析が行われ、描画の専門家でなくとも理解がしやすい。また、一丸ら（2001）は、「S-HTP は、適度の自由度をもつ描画法である。家、木、人の三つのアイテムに付加物を自由に追加することにより、多様な表現が可能である。とくに自己と外界との関係や、個人が関心を持っているテーマが表現できるという点で有効である」、「まったくの自由画でないことも、それが一種の枠づけとなって児童の安全感を高め、また評定にあたって個人間の比較をする上でも役立った」と、S-HTP の有用性を非常に的確に述べている。このことにより、S-HTP に対する関心や評定が高まったのではないかと考えられる。

また、教育現場では、公立中学校を中心としたスクールカウンセラーの配置が拡大し、大学においても、抑うつ傾向、身体化や行動化、パニック発作、および広汎性発達障害傾向などがみられる学生が増加したことにより、学生相談室の需要が高まり、創設数が増えるとともに、以前は、ほぼ相談・カウンセリングに限られていた学生相談室カウンセラーの職務内容も、病的傾向のアセスメント、医療機関への紹介や連携など幅広くなった。それに伴い、小・中学校や高校、および大学において心理検査を施行する必要性も高まっている。しかし、医療現場とは異なり、特に小・中学校や高校においては、検査を行うまでに管理職教員や保護者の同意を得る手続きが必要であり、検査時間も限られているなどの様々な制約条件がある。そのような状況で、S-HTP は、絵を描いて、PDI に答えてもらうという、保護者や教職員にも説明がしやすく、理解も得やすい心理検査である。対象となる児童・生徒の抵抗も少ない。また、施行に多くの時間を必要としないにもかかわらず、結果から得られる情報は多様な点が非常に重要である。このように、S-HTP が現代の心理臨床現場に適した心理検査であることも、研究数増加の一因であると考えられる。

II-6. S-HTP における研究テーマの広がり

① 基礎的研究

田畑（2006）は、S-HTP の描画特徴は発達と関連しており、年齢段階により変化するという三上（1995）の指摘を検討するために、大学生 30 名を対象として集団形式で S-HTP を実施し、三上（1995）の評定項目に基づいて、対象者を分類、各評定項目（描画特徴）の出現率について、三上（1995）の結果との比

較を行った。田畑の仮説は、年齢に伴って「絵の統合性」が向上し、適度な遠近感をもった表現になるというものであった。しかし、「統合性」や「遠近感」など、心理的な発達や知性を示すと考えられる項目の数値は、三上（1995）が対象とした大学生だけでなく、中学生や高校生よりも低い値を示した。田畑（2006）は、「家・木・人を1枚の紙に表現するためには、現実検討力が反映し、年齢段階に応じた検討力の変化・向上が描画に反映するはずである」と述べ、これが逆転した転結果が示されたことについて、「今回の対象となった大学生の多くは、描画を自己の精神性と関係づけて表現するよりは、単純に羅列することに主眼があったともいえよう」と理解している。しかし、三沢（2008）は「統合性」や「遠近感」などが認められ、年齢に応じた心理的発達をしている大学生は現代に至るほど減少していると報告しており、大学生の発達の停滞に対する危惧を呈しているので、田畑の対象者が特異であったわけではないと考えてよいであろう。

渋川・松下（2007）は、三上（1979a, 1979b）以降、発表されたS-HTPの基礎的研究を中心に、①臨床研究、②発達研究、③内容研究、④構造研究という4つの側面から概観したうえで、S-HTPの全体的評定項目である「統合性」、「遠近感」、「人と家・木の関係づけ」という3つの観点から考察を行った。その結果、①臨床研究においては、統合失調症者やうつ病患者などの臨床群の弁別や、病態の変化などを反映する多くの項目、特徴が指摘され、全体的に、その有用性を支持するものが多かった。②発達研究においては、調査対象者の年代にかかわらず、描画発達の遅滞や、発達レベルの低下が指摘された。③内容研究においては、人と家・木の関係づけには、描き手自身の行動の基準を内的なもの（木）に求めるか、外的なもの（家）に求めるかといった基本パターンが反映されること明らかになった。④構造研究においては、S-HTPの最大の特徴である「統合性」を定量化するためには、信頼性・妥当性を含めて検討を重ねる必要があることが示された。

伊藤ら（2009）は、現代の小学生にみられる心理発達のな特徴について検討することを目的とし、2006年に、小学校2年生93名と5年生68名を対象にS-HTPを集団形式で施行した。回収したS-HTPについて、三沢（2002）の小学生の描画特徴に関する研究との比較を行っている。「絵の統合性」、「簡略化」、「不安感・感情の未分化傾向」、「特殊な描き方」などの項目に着目したところ、2006年の小学生においては、精神エネルギーが低下し、対人的な関わりや不安から回避しようとする傾向が強く、従来の子どもにみられた健全な依存心が抑制されている一方で、有能感を補償するために過度の自己統制を行う傾向が示された。こうした傾向は2年生でも高まっていることが明らかであった。また、5年生においては、描画発達の停滞傾向がみられた。三沢（2002）が指摘した1990年代後期の小学生の描画発達の停滞という傾向は、2006年においても改善されることなく、続いているものであった。しかし、一方で、「絵の統合性」については、「統合的」な絵を描く群と、「羅列的」な絵を描く群に二極化したこ

とから、三沢（2002）の指摘する小学生における描画発達の停滞は、小学生全般に当てはまる傾向ではない可能性が示唆された。

田畑（2011）は、S-HTPにおける家・木・人の描画順序に着目した研究を行っている。208名の大学生を対象に、集団式でS-HTPを施行し、描画後に画用紙の裏面に家・木・人の描画の順番を記入させた。最初に家を描いた対象者（H群）が80.2%を占め、木を描いた対象者（T群）17.3%、人を描いた対象者（P群）が2.5%であった。統計分析の結果、H群と比較してT群は木が大きく、用紙の下端から描かれる傾向がみられた。P群は描画サイズは小さく、付加物が少なかった。田畑（2011）は「描画順には描画課題のもつ意味性が反映されていることが示唆された」と述べている。

②青年期研究

青年期の対象者の心理的特性を質問紙によって捉え、その特性がS-HTPの描画特徴とどのように関連しているのかを検討した研究として、青山・市川（2006）、瀨瀬・森田（2010, 2011）がある。対象者はいずれも大学生である。

青山・市川（2006）は、青年期のアイデンティティ感覚の様相が、S-HTPにどのように反映するのかを検討している。アイデンティティ感覚の測定には多次元的自我同一性尺度（MEIS）を用いている。S-HTPの評定は三上（1995）、三沢（2002）を参考に、①全体的評定項目、②家に関する評定項目、③木に関する評定項目、④人に関する評定項目の総計101項目を設定した。結果として、青年期のアイデンティティ感覚は、S-HTPの「遠近描写」、「木と人の関連づけ」、「人物表現の明瞭度」、「木と枝と根の描写」の4点との関連が示された。特に、「人物表現の明瞭度」は、S-HTPにおいてアイデンティティ感覚を最も敏感に反映することが指摘される。これは人物像が意識的自己像を象徴するというS-HTPの解釈仮説に合致する結果である。

瀨瀬・森田（2010, 2011）は、現代青年の描画発達停滞の要因として、孤立家族化、地域社会の希薄化、ゲームやネット世界への浸透などが進み、人とのコミュニケーションが乏しく成長したためであるという三沢（2008, 2009）の仮説の検討を目的として研究を行った。2010年では、Parental Bonding Instrument（PBI）で測定した両親の養育態度と、大学生のS-HTPの描画特徴との関連を検討した結果、両親の養育態度により分類された4群の間でS-HTPの「統合性」その他の項目において差がみられ、親の愛情を受け、自立を認められていると思う青年の絵にはまとまりと成熟がみられ、親が自分に無関心であると思う青年の絵は非現実的で未熟さがみられたことを報告した。

2011年では、友人関係を取り上げ、『他者との交流態度』について自由記述式の調査を行い、友人にどの程度、内面開示できる深い関わりがあるのかを基準に、対象者を「社交群」、「信頼群」、「距離群」、「希薄群」に4分類し、 χ^2 検定を行った結果、S-HTPの「人数」（三上, 1995；三沢, 2002）など従来の項目

に加え、「画面全体の塗りつぶし」、「幹・上下開放」という独自の項目においても4群の間で差がみられた。S-HTPは、対象者の社会性や他者への意識などを反映しており、「画面全体の塗りつぶし」は防衛の強さ、内的エネルギーの低下、ひきこもり傾向を示唆し、「幹・上下開放」は感情と理性のバランスが崩れて不安や自信のなさが強く、統制力の低下を表すと考えられた。こうした点から、現代青年の特徴について、不安や自己否定感が強く、感情の安定を保つことが困難である。そのために、他者との適度な関係を形成することにも難しさや疲労を感じる人が多いという示唆が得られた。

③パーソナリティ研究

S-HTPとロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略）の関連から、対象者のパーソナリティや適応を検討した研究が、根本（1998）、武藤（2011）、高崎（2011）によって行われている。

根本（1998）は大学生80名を対象として、S-HTPにおける家・木・人の課題アイテム間の位置関係と、ロ・テストの体験型の関連を検討し、①S-HTPで人を木寄りに描いた群と家の中に人を描いた群はロ・テストの体験型が内向型である。②人を家寄りに描いた群は外向型である。③家と人の中間に人を描いた群は両向型であるという結果を示した。

武藤（2011）は対象者の大学生8名をランダムに2群に分けて、1つの群にはHBの鉛筆で最初に無彩色のS-HTPを描かせ、次に色鉛筆を用いて彩色のS-HTPを描かせた。もう1つの群には最初に彩色のS-HTPを、次に無彩色のS-HTPを描かせて2群の絵の相違を比較検討した。その結果、①無彩色から彩色の施行順序においては、対象者の防衛的態度がとれ、本来備えているパーソナリティや情緒的側面が端的に表現される。そこには対象者のより適応的な面が表れやすい。②彩色から無彩色の施行順序においては、1枚目の絵の構成、ストーリーが2枚目にも継続して表れる。しかし、彩色の効果により精神的な負荷が生じ、2枚目には神経症的な側面が表れやすくなるという傾向がみられた。そして、S-HTPの後日に各群から2名ずつにロ・テストを施行し、S-HTPの描画特徴との関連を事例的に検討した結果、4名全員の現実検討力、知的側面などはS-HTPとロ・テストで概ね一致がみられたが、情緒的側面では検査間で一致していなかった。これにはS-HTPとロ・テストの検査状況の違いや、特に色彩による刺激の影響が考えられた。

高崎（2001）はS-HTPにおける評定項目「統合性」は、パーソナリティの一貫性や連続性を支えるのに働く自我の統合機能を表すのではないかと考え、ロ・テストから自我の統合機能の合成得点を作成して高・低群に分け、「統合性」について検討したところ、自我の統合機能が高ければ、「統合性」も高い可能性を見出した。しかし、「統合性」から自我の統合機能を推測することはできなかった。

パーソナリティ特徴を把握する上で、S-HTPとロ・テストの関連性から見ていくことは、非常に興味深い。しかし、上記の3研究においては、ある程度の関連性は認められたものの、一方の検査結果から、もう一方の検査結果を予測できるような関係は示されていない。難しいテーマではあるが、今後も探索的な研究が続けられていくことを期待したい。

④応用研究

ここでは、S-HTPの変法の使用や、国際研究など、まだ少数ではあるが、新しい視点からの研究について述べる。

稲田（2003）は、Ⅰ群：小学3、4、5年生（学童期・計95名）と、Ⅱ群：中学1年生（青年期前期：123名）を対象として、心像風景がS-HTPの中にかに表れるのかについて検討を行った。その際、「子どもが何らかの内的なイメージを表出するときには動物のモチーフが使われているように感じる。（中略）彼らは無意識のうちに、または直感的に、自分の内的イメージの表現に際してどのような選択をするのだろうか。人は動物を描くとき、動物を使者として使うことで現実に縛られている自我を通過して、こころの深い部分である森の中への探索が可能になるのではないだろうか」と述べ、家・木・人に加えて「動物」を課題とした。結果として、「動物」については、ウサギとネコがⅠ群の女子に有意に多くみられた。これについて、稲田（2003）は、思春期にあたるⅡ群の女子にとって、思春期の心理的な不確かさや、おぼつかなさに対する抵抗として、一般的には少女が好むといわれ、女性性を象徴するネコやウサギを無意識に遠ざけているのではないだろうかと考察している。

次に、近藤（2006, 2008, 2009a, 2009b, 2010, 2011, 2012）が、「特定の場面と他者に制限せず、描き手の対象関係をアセスメントする技法」として発表したものが、S-HTPとHTPPを統合させた『Synthetic House·Tree·Person·Person Technique (S-HTPP)』である。S-HTPPは、S-HTP同様、1枚の画用紙にすべての課題を描く方法であるが、人物は「男性1人」と「女性1人」と決められており、この点ではS-HTPよりも自由度は低いといえる。近藤（2008）は、「自己と他者をアセスメントする上で、同性像と異性像は適切な課題であると考えられる。（中略）それらを一枚の画用紙に描くことで、人物像の関係性、情緒的な距離、雰囲気などが表現され、量的にも質的にも豊かな情報が得られる」、「S-HTPPに描かれる人物像の年齢や関係性、行為、感情は、描き手にとって、日常的で穏やかなものが多く、描き手の現在や体験している内的世界が表現されているようであった」と述べるとともに、さらに取り組むべき課題として、S-HTPPにおける家と木についての知見が得られていないので、今後は家と木を視野に含めて検討することで、多角的な視点からS-HTPPを理解する必要性を述べている。

入江ら（2009）は、国際的に地域社会を研究する専門家であり、長年タイ北部および東北部において、貧困による家庭崩壊、HIV感染によるエイズ遺児の出現などにより、厳しい環境の中で育たざるを得ない多くの子どもたちに接してきた。そのような困難な養育環境や生活状況が子どもたちにどのような心理的影響を与えているのかを明らかにするために、三沢直子に協力と指導を依頼して、2009年にタイ北部・東北部において子どもたちにS-HTPを施行した。その結果、家庭状況に何らかの問題を抱えていると判断される子どもであっても、情緒的な発達に順調であることが明らかになった。この背景には、タイ農村部伝統的コミュニティ、あるいは社会開発によって再構築されたコミュニティの中で、地域住民が日常的に、年代を超えて相互交流を行っていることが関連すると考えられた。三沢（2002, 2008, 2009）は2002年以降、子どもの情緒的側面の豊かな発達には、地域コミュニティにおける世代を超えた人たちとの親密なコミュニケーションが重要であると論じているが、この研究結果は、それを支持するものとなっている。

II-7. まとめと今後の課題

S-HTPの研究論文を概観し、1970年～1980年代における初期の研究では、精神医療の現場において、主に統合失調症者の描画特徴の形式的な分析・検討に基づいて病理指標が構築され、2000年頃から、心理臨床家の活動領域の拡大とともに、S-HTPの対象者や研究目的も多様化し始めたことが示された。本章においては研究目的や検討内容によって、①基礎的研究、②青年期研究、③パーソナリティ研究、④応用研究に分類し、各研究の主要な部分を簡潔にまとめて述べてきた。

現代のS-HTP研究において、研究者の関心やテーマは広がりを見せており、対象者も児童から青年までに至っている。しかし、研究目的によって使用する評定項目数の違いはみられるものの、いずれの研究においてもS-HTPの評定方法は、三上（1995）、三沢（2002）が1970年代以降の研究データから設定した①絵全体、②家、③木、④人、各々の描写の形式的側面から評定する149項目に基づいて行われている。この149の評定項目は非常に詳細であり、絵を統計的に分析する上でも有効である。しかし、現代における描画表現は、次節で述べるように時代背景とともに大きな変化を見せている。そのため、現代的な描画特徴を反映する新たな評定項目の作成を目指すことが、S-HTPの有用性を高める上でも、筆者らS-HTPの研究者に課せられた重要な課題であると考えられる。

第Ⅲ節 現代青年に増加する問題

本論文は現代青年（大学生・大学院生）を対象とするものである。本節においては、先行研究において述べられた現代青年像を、S-HTP 研究における「統合性」の低下と未熟化の関連について述べた三沢（2008）の指摘、および、学生相談研究における抑うつ傾向の増加という、近年、注目されている2つの問題点に着目して以下にまとめた。また、筆者が、大学生・大学院生を対象としてS-HTPを施行した経験からは、遠景や立体描写の減少、スティック・フィギュアの増加などがみられた。さらに、アイテムの塗りつぶし、視点の混在など、かつてはあまりみられなかった表現や、抑うつ傾向を示す特徴が多数出現し、青年の描画は、時代背景とともに大きく変化している。従って、現代青年の描画特徴と心理的特徴の関連についての検討・論述を行うことは、S-HTP 研究において意義があることと考えられる。

Ⅲ-1. S-HTP 研究における現代青年像 —「統合性」の低下と未熟化—

三上（1995）はS-HTPを体系的にまとめ、①絵全体、②家、③木、④人、それぞれの描写の評定・分析を行った。これに基づいて、三沢（2002）は総計149の評定項目を設定した。その中で、三上（1995）は、絵全体の「統合性」を最も重視し、「統合的な絵を描くためには、大きさのバランスや、遠近感、家と木と人の関連付けや、それらをつなぐ付加物など、いろいろな要素を考慮する必要があるので、確かな現実検討力や、課題に取り組む集中力、持続性、積極性、柔軟性、創造性などさまざまな能力が要求される。それゆえ、S-HTPがどの程度「統合的」に描かれているかということは、パーソナリティを総合的に評価するうえで、最も重要な判断基準となる」と述べている。

従来の研究（三上，1979；三上・岩崎，1981）においては、一般青年（大学生）におけるS-HTPは80～90%が「統合的」と評定されていた。しかし、1980年代の半ば頃から、一流大学から一流企業に入社した一般青年のS-HTPに家と木と人を羅列しただけの絵が増加し始めた（三沢，2008）。これは、1970年代には統合失調症患者や重篤なうつ病患者のみに出現した表現であった。青年たちは身体的不調を訴えて内科を受診したが、異常がみられないため神経科に紹介された人たちであり、ロールシャッハ・テスト等、他の心理検査を実施しても現実検討力の低下がみられないことを検討した結果、三沢（2008）は、青年たちの問題は「精神障害と言うよりも、豊かな感情や社会性などが育ち損ねたまま大人になってしまった人たち」と述べ、その要因として、核家族化、地域社会における関わりの希薄化、および、ゲームやインターネットなどバーチャルな世界への浸透が進み、様々な世代の多くの人と直接コミュニケーションをもつ経験が乏しいまま成長したためであろうという仮説に基づいて、現代青年における「統合性」の低下を指摘し、その低下は現代青年の心理的発達の未熟化に起因すると述べている。

Ⅲ-2. 学生相談研究における現代青年像 —抑うつ傾向の増加—

一般青年の抑うつ傾向については、青年心理学、臨床心理学、精神医学、教育学など、多くの研究領域において論じられているが、本節では、健康な学生と抑うつ傾向を有する学生双方と幅広く関わりをもつ学生相談における研究で述べられた特徴から、現代青年像の概観を以下にまとめた。

平木（1993）は、学生相談室に来談した学生の時代的变化を「1970年代までの学生たちの悩みや症状は『自分探し』に関わるものが多く、『同一性拡散』状態を示すものであったが、1980年代に入ってから、それをはるかに逸脱し、境界性人格障害、いわば『未熟な人格の発達』を示すものが多くなった」と述べている。

これに補足して苦米地（2006）は「バブル経済崩壊後の1990年代半ば以降は「抑うつ感」が広がっている」とし、学生相談室の来談学生について「心理的な訴えとして最も多いのは抑うつ感であり来談学生368名中111名（30%）に見られる。この中には、入学時の不適応感や失恋等による「落ち込む」という程度のものから、抗うつ剤を服用している抑うつ状態の学生まで含まれる。」と、一般学生における抑うつ傾向が、一過性で軽度な抑うつ状態から重度のうつ病まで広がりを見せていることを述べ、この背景として、「悩むというレベルを乗り越えて、すぐに「落ち込む」あるいは「身体化する」傾向が強くなっている。悩むことの積極的な意味や価値が失われ、悩むことが新たな発展へのバネになりにくい。（中略）つまり葛藤を抱えたり、自分の感情と向き合うことができなくなっている」と、現代青年の内省力や自分自身を客観的に捉える力の乏しさを指摘している。

上田（2002）は、「大学の相談室においても、「気分が落ち込む」「意欲がわからない」等々、自分から抑うつ感を訴えて相談に訪れる学生は増えてきている」と述べ、その背景として「現在の学生の置かれている状況は、近年大きく変化してきている。核家族化と少子化、地域社会において子どもや若者を育てる機能の弱体化、不況など、学生を取り巻く今日の社会的状況の変動は激しい」と現代青年の養育環境や社会環境の影響に言及している。

また、桐山（2010）は、「IT技術が進んだ現在では、知識や情報を自分の頭の中に取り入れる必要はなく、コンピュータや携帯電話といった外部機器に入れ込み、必要に応じて取り出すことも可能である。（中略）ゲームの世界ではバーチャルなリアリティを生きることができる」と述べている。

苦米地（2006）は、以前に比べ、学生相談で対人関係の問題を主訴とする学生が減っていることについて、「対人関係の持ち方が上手になったわけではない。インターネットや携帯電話の普及によって、人と深く関わらないでもいられるからであろう。対人場面では緊張して自己表現できないのに、Eメールでは雄弁になり、ときには攻撃的にすらなる学生もいる。（中略）携帯談話はいつも人とつながっている感覚をもたらし、孤独感を癒してくれる。そのために友だちがいらないという感覚は生まれにくいのではないか。（中略）ブログという新しい形の表現の場も生まれた。自分の安全な場所にいながら人との交流ができる便

利さは革命的であり、今後ますます普及するであろう。しかし、反面そこに固着し、生身の人間関係の発達を阻害するおそれもある」とネットワーク社会の弊害として、現代青年の人間関係の希薄化を論じている。

上田（2002）が指摘する現代青年を取り巻く環境や、桐山（2010）が指摘するバーチャルな世界との関係性は、三沢（2008）が、現代青年の未熟化の要因として挙げた内容と重なる部分が多い。さらに、苫米地（2006）のネットワーク社会の進展による人間関係の希薄化を含めた視点からみれば、核家族化、地域社会の希薄化や機能の弱体化、およびバーチャル世界・ネットワーク社会への浸透等々は、青年の心理的発達に限らず、抑うつ傾向の増加にも影響を及ぼしていると考えられる。

学生相談研究ではないが、横山（2012）は、単科クリニックにおける15年の心理臨床経験から、青年期の心の問題の変化として、以前は稀であった自傷行為の一般化、および、かつての摂食障害やうつ病患者の背景や特徴が浅く、広く、一般青年にも日常的にみられるようになったことを指摘している。そして「この変化をもたらした要因に社会・文化的な変化があることは言うまでもあるまい。それは、（中略）家族関係や教育環境の変化であり、高度情報社会であり、また子どもに対する社会の態度等々であることも、確かなことではあろう」と述べている。そして、現代青年の抑うつ傾向の増加について、かつてのメラニコリー親和型性格の内面の倫理である「勤勉・節約・服従」などに価値を置く文化が失われ、青年が物質的繁栄のもとに、困難を体験せずに育ち、理想がないままに安易な道を選ぶ社会背景との関連を挙げている。さらに、現代の社会病理として、「他者との競争と成功を強いる文化」から「高度メディア化」への変化に言及し、「インターネットの普及により、（中略）莫大な情報空間に誰もが容易に、双方向からアクセスできるようになった。（中略）青年期の患者たちが、時に思いもよらぬ形で見せてくれる情報空間との関わり方には、驚かされることばかりである」と述べている。

桐山（2010）、苫米地（2006）、横山（2012）が述べる、現代社会の急激な高度メディア化やネットワーク化に対する危惧をまとめると、現代青年は生まれた時から膨大な情報に囲まれて成長し、彼らにとってバーチャル世界は、現実世界と同等以上にリアルなものである。巨大なネットワーク社会では、自ら「考えること」、「悩むこと」をしなくとも、秒速で世界中の人々から無数の答えを受け取れる。そのため、主体性に乏しく、対人場面や現実社会に適応できないことから抑うつ傾向が生じるのではないだろうか。従って、S-HTPの描画特徴から現代青年の心理的特徴を捉えるためには、抑うつ傾向との関連から分析・検討を行うことが必要かつ有効であると考えられる。

第IV節 本論文の目的

筆者は大学生・大学院生を対象として S-HTP を施行し、検討を行う過程において、現代青年の S-HTP には遠景や立体描写の減少、スティック・フィギュアの増加などが顕著にみられ、複数の視点の混在、年齢不相応に幼い表現、およびアイテムの塗りつぶしなど、かつてはあまりみられなかった特徴や、抑うつ傾向を示す特徴が多数出現し、青年の描画が時代背景とともに大きく変化していることに着目した。これらの描画特徴を検討することにより、現代青年の心理的特徴を捉えることが可能であると考えられる。

現在、S-HTP の評定は、いずれの研究においても三沢（2002）の 149 項目に基づいて行われている。しかし、その内容について「項目数が多いため、個別アイテムの分析にとどまり、絵全体を捉えた解釈が困難である」（高橋ら、2007）という指摘もなされているように、本来、描画研究において重視される“絵全体の印象や特徴”を捉えるために有効とはいえない。また三上（1979a, 1979b, 1995）、三沢（2002, 2008, 2009）の研究は統合失調症を主とする精神障害者と小学生のデータに基づいており、一般青年の心理的特徴を捉えるための基礎的研究が必要である。

そこで、本論文においては、現代青年の S-HTP にみられる描画特徴を抽出することを第一の目的とし、その上で、現代青年の心性や病理傾向を捉えるために、「全体、または一部にみられる、1 枚の絵としての調和を欠き、違和感を感じる描画特徴」を『異質表現』として定義し、従来の描画研究において蓄積された指標や仮説に留意した上で、S-HTP の新たな評定項目や描画指標を作成することを第二の目的とする。

第V節 本論文の構成

本論文は、以下の6つの章から構成される。

第1章・問題と目的

第2章・両親の養育態度と青年の描画特徴の関連

第3章・友人との交流態度と青年の描画特徴の関連

第4章・『異質表現カテゴリー』の作成

第5章・事例研究

第6章・総括的討論

第1章では、S-HTPの概要と研究史を述べ、その描画特徴に表れる現代青年の未熟化と抑うつ傾向という問題提起を行った。そして、現代青年を対象として実施したS-HTPから、独自の項目を作成することを目的とした。

第2章、第3章では、現代青年の描画特徴を捉えるために、三沢(2008)の、S-HTPにおける現代青年の心理発達の「未熟化」という示唆を参考に、両親、および友人との関わりに着目した。第2章では「両親の養育対度」、第3章では「友人との交流態度」を取り上げ、それぞれとS-HTPの既存項目により評定した描画特徴の関連性を検討した。この第2章、第3章の結果から、現代青年の描画特徴を捉えるためには、既存項目に限界があることが示され、新たな項目を作成する必要性が示唆された。

第4章では、新しい視点からS-HTPを評定することを目的とした研究を行った。新たな項目を『異質表現カテゴリー』と名付けて、その作成過程を描画特徴の抽出の段階から詳細に述べた。12下位項目がそれぞれ、どの程度、抑うつ傾向を反映するのかを統計的に検討し、一般青年の抑うつ指標となる項目を見出した。

第5章では、抑うつ症状を呈する大学学生相談室の事例を臨床群として、一般青年の抑うつ指標と成り得ると考えられる異質表現カテゴリーの下位項目が、どの程度、臨床群にみられるかの検討を行った。それにより、抑うつ指標としての有用性を有するかの検討を行った。また、小学校のスクール・カウンセリング事例も提示し、児童期における抑うつ傾向にも言及した。

第6章では、本論文全体を総括し、S-HTPの有用性と限界を論じ、第4章で作成した異質表現カテゴリーの体系化を目指すことを中心に今後の課題を述べた。

第 2 章

両親の養育態度と青年の描画特徴の関連

第1章のⅢ-1で述べたように、三沢（2008）は現代青年のS-HTPにおける「統合性」の低下を指摘し、それは現代青年の心理的発達の未熟化に起因すると論じている。そして、この未熟化の要因として、核家族化、地域コミュニティの希薄化、バーチャル世界やネットワーク社会への急速かつ過度な浸透により、様々な世代の多くの人たちと直接のコミュニケーションをもつ経験が乏しいまま成長したためであろうと仮定している。しかし、この仮説についてのS-HTP研究は行われておらず、「統合性」の低下が、青年の心理的発達の未熟化に起因するものであるのかは明らかではない。

そこで、本論文の第2章と第3章においては、上記の三沢（2008）の仮説を検討する意味も含めて、現代青年の対人経験と、S-HTPの描画特徴との関連性を取り上げた研究を行う。

第I節 問題と目的

I-1. 親の養育が子どもに及ぼす影響

現代青年の対人経験といっても、それは多種多様であり、発達段階や個人の環境によっても異なる。しかし、人が誕生して、はじめて心理的・身体的に関わり、最初の対人関係を形成する対象はほとんどの場合、養育者である父親と母親である。乳幼児期の子どもは、生活の大部分を親に依存しており、パーソナリティの形成や行動の基盤には、養育環境や親の養育態度が大きな影響を及ぼすと考えられている。

Bowlby（1969）がアタッチメント理論を提唱した背景には、1940～1950年代に行われた劣悪な施設で生活する子どもたちへの臨床的介入や、第二次世界大戦での戦災孤児たちに対する調査から明らかにされた、親子関係を阻害され、十分な保護や愛情を剥奪された子どもは、その後の発達に長期的かつ重大な影響を受けるという事実が存在する。また、一般的な親子関係も含めた研究により、乳幼児期に受けた養育は、「安定型」、「回避型」、「アンビバレント型」の3種類のアタッチメント・タイプとして児童期にも影響を及ぼすことが示された（Bowlby, 1973; Main&George, 1985; LaFreniere&Sroufe, 1985）。さらに、George et al（1985）、Hess（1999）による、青年がもつ親に対するイメージと自立との関連についての研究においては、青年期に至ってもアタッチメント・タイプによる依存や葛藤の問題が存在することが明らかにされた。もちろん、乳幼児期に形成されたアタッチメント・タイプが生涯、不変的なものではないこと、親の養育態度のみでアタッチメント・タイプが決定するわけでないことは十分に考慮しなければならないが、養育環境や養育態度は長期にわたって、直接的・間接的に人の発達に関与するといえる。

I-2. 親の養育態度は S-HTP にどう反映されるか

1971年に Baumrind が述べた、子どもへの「親の応答性と要求性」という 2 つの次元を組み合わせて、Maccoby&Martin (1983) は、「甘やかした養育」、「無関心な養育」、「権威主義的な養育」、および「権威ある教育」の 4 種類の親の養育態度を示した。「甘やかした養育」とは、子どもを温かく受容するが、けじめがなく、社会的に必要な躰がなされていないものである。「無関心な養育」は、子どもへの関心が低く、子どもの発達に適切な養育を行わない、「権威主義的な養育」は叱責したり罰を与えることが多く、子どもが従順であることを重視することである。「権威ある教育」は、子どもを温かく受容するとともに、けじめがあり、叱責や罰よりも説明によって子どもの行動を正すものを指す。

こうした親の養育態度には、その時代時代による傾向がみられるといわれ(福田, 2009), 三沢(2002)は、現代の大学生たちが生まれた 1990 年代前後になって急に養育能力が低下した親が目立つようになったと指摘している。その具体的な例を考えれば、少子化による溺愛、幼児期からの受験戦争への加熱、無計画な多子多産、ネグレクト等々の増加が挙げられるであろう。また、同時期から養育環境も変化し始め、家庭内別居、離婚、再婚、単親家庭等も増加がみられている。上記したように現代の大学生は、こうした親世代の子どもに該当する。そのため、様々な養育環境の中で成長し、様々な親の養育態度に接してきたと考えられる。

I-1 で述べたように、養育環境や養育態度は長期にわたって、人の発達に影響を与えるものである。従って、本研究は大学生を対象として、質問紙によって捉えた現代青年が認知する親の養育態度と、青年の S-HTP の描画特徴に、どのような関連性がみられるかを検討することを目的として行った。

第 II 節 方 法

II-1. 調査対象者

2010 年 5 月～6 月に、2 校の共学・4 年制大学の大学生 93 名を対象として、S-HTP と親の養育態度に関する質問紙による調査を実施した。

II-2. 調査用紙

① S-HTP 描画後質問用紙

S-HTP の描画後質問は個別施行であれば、施行者と対象者が絵を見ながら質疑応答の形式で行うものであるが、今回は集団施行であったため、筆者が作成した質問用紙への記述方式を用いた。自分が描いた S-HTP に対して、「I. 全体にどのような場面を描いているか」、「II. 家はどのような家で中に人がいるか」、「III. 木の大きさや種類、特徴はどのようなものか」、「IV. 人は誰でどのような人物で、何をしているところか」、「V. その他付け加えたいこと」を自由記述してもらうものであり、対象者の「生年」、「年齢」、「性別」、「家族構成」

の記入欄を付した。

② Parental Bonding Instrument (PBI)

成長過程において、父親また母親からどのような養育態度を受けたのかが、成人後の心理・行動面に影響を与えるという仮説を検討するために Parker et al (1979) が作成した尺度である。日本語版も作成されており、信頼性・妥当性に関しては肯定的な評価を得ている(小川, 1991; 及川, 2005; 鈴木ら, 2002)。

PBI は、高得点であるほど対象者が親から愛情や共感を受けたと感じているとする Care 尺度 13 項目と、低得点であるほど対象者が親から過干渉を受けず、自律を認められたと感じているとする Over-Protection 尺度 12 項目の計 25 項目で構成されており、各質問項目に対して 4 件法で回答する。

II-3. 実施手続き

本調査の実施は 2009 年 5 月～6 月に各大学において、調査実施の承認を得られた担当教員の講義時間内に、調査の主旨を説明して、同意が得られた学生に対して行った。調査は匿名で行うため、A4 サイズの画用紙、調査用紙のセット(描画後質問用紙、PBI の Father's Version, PBI の Mother's Version をまとめたもの)に通し番号を付け、同じ通し番号を付けた封筒に入れて対象者に配布した。HB の鉛筆と消しゴムも同時に配布した。質問紙からの S-HTP の描画内容への影響を避けるために、まず A4 画用紙のみを封筒から取り出してもらい、S-HTP を実施した。画用紙を横にして使用するよう伝えた後、「家と人と木を入れて、他は自由に自分の思うように 1 枚の絵を描いてください。絵の上手い・下手はまったく気にしないでください。でも、できるだけ丁寧に描いてください。」と教示し、必ず絵を描き終えてから、調査用紙への記入を行うよう伝えた。

第Ⅲ節 結 果

Ⅲ-1. 有効対象者

上記したように、S-HTP、調査用紙セットの回収数は 2 校の大学全体で 93 名であった。しかし、結果処理の段階で、S-HTP で家・木・人の欠如した絵を描いた者、家・木・人は描いているが、S-HTP としての評定が不可能な絵を描いた者は除外した。調査用紙に回答漏れや年齢、性別の未記入のみられた者も含めて 13 名を分析対象からは除外したため有効対象者数は 80 名で、有効回答率は 86.02%であった。

80 名の対象者全体の平均年齢は 20.10 歳、標準偏差は 0.94 であった。性別は男性が 19 名 (23.8%) で平均年齢は 19.90 歳、標準偏差は 0.88、女性が 61 名 (76.3%) で、平均年齢は 20.16 歳、標準偏差は 0.95 であった。

Ⅲ-2. S-HTP の評定

先行研究における S-HTP の評定項目の設定は、①全体的評定項目、②家に関する評定項目、③木に関する評定項目、④人に関する評定項目の総計で 149 項目（三沢，2002），104 項目（稲田，2003），101 項目（青山・市川，2006）など、各研究の目的において様々である。本研究では当初 102 項目を設定していたが、評定していく段階で、ある程度の出現数が認められ、追加の必要性があるものは新たに評定項目として分類する作業を行い、最終的に全評定項目は 111 となった。全評定項目を Table 2-1～Table 2-3 に示す。

対象者 80 名の S-HTP に対する評定は三上（1995），三沢（2002）を参考に、筆者と描画研究に熟練した臨床心理学者の 2 名で協議して決定した。

Table 2-1. S-HTP における全体的評定項目

統合性	統合的	全体にまとまりがあり、不調和な部分がない。	動物	野生	馬、魚、虫、鳥、蝶など
	やや統合	ある程度まとまりはあるが、一部が不調和。		ペット	犬、猫、鳥など
	媒介で統合	全体は羅列的だが、山・草等の媒介で統合。		混合	野生動物とペットが混在。
	やや羅列	全体は羅列だが、一部にやや関連がある。	地面の描写	全体	線や黒塗りによる描写が全体にある。
	羅列的	家・木・人が無関係に羅列されている。		部分	線や黒塗りによる描写が一部にある。
遠近感	大	遠くまで細かく描き、遠近感が大きい。	現実的・非現実的描写	なし	
	中	家・木・人付近にのみ遠近感がある。		現実的	描画内容が現実的。
	ややあり	家・木・人が上下に描かれ、やや遠近感がある。		非現実的	描画内容が非現実的。
	直線(重なりあり)	家と木、家と人等に前後の重なりあり。	混合	現実・非現実的内容の混在。	
	直線(重なりなし)	家・木・人が直線上に並んでいる。	用紙の縁での切断	家	家が用紙の縁で切れている。
	ばらばら	家と木と人がばらばらに描かれている。		木	木が用紙の縁で切れている
描線	途切れなし	1本の線で描かれ、途切れていない。	人	人が用紙の縁で切れている	
	途切れあり	途切れがちな線で描かれている。	家と人の関連	家の中のみ	人を家の中のみ描写
	その他の線	デッサン風等、多様な線で描かれている。		家の中と外	人を家の内外に描写。
陰影付け	陰影なし	日のあたる部分のみを描いている。	木と人の関連	関連あり	家に向かう・寄りかかるなど。
	陰影あり	日のあたらない部分を描いている。		関連あり	木に触る・寄りかかるなど。
	影の描写	家・木・人の影を描いている。	塗りつぶし*	人	人物全体を黒く塗りつぶす。
自然物(大)	山、道、雲、太陽、月、川、海、など	木		木の全体、または一部を黒く塗りつぶす。	
自然物(中)	田畑、池、湖、花壇など	家		家の全体、または一部を黒く塗りつぶす。	
付加物*	自然物(小)	草、花、石など	特殊な描き方	文字	文字による説明や台詞がある。
	人工物	橋、門、柵、囲い、ベンチ、家具など			
	乗り物	車、船、飛行機など			
	食べ物	食品、飲み物、食事など			

*「付加物」、「塗りつぶし」に含まれるアイテムは重複スコア可。

Table 2-2. S-HTP における家・木の評定項目

家		木	
家の軒数	1 軒	木の本数	1 本
	2 軒		2 本
	3 軒以上		3 本以上
壁の面数	1 面(平面的)	幹	単線の幹
	2 面(立体的)		樹皮の模様を描写。
特殊な家	ログハウス・山小屋等	枝	描写なし。
	ビル・マンション・学校等		単線の枝
	お菓子の家・おもちゃの家等	葉	樹冠に葉が描かれている。
ドアと窓	ドア・窓あり		枝に葉が描かれている。
	ドアなし	実	樹冠に実が描かれている。
	窓なし		枝に実が描かれている。
	ドア・窓なし	根	
各部の描写*	屋根に瓦や模様あり	うず	
	ベランダ	鳥・動物・虫の巣	
	アンテナ	切りかぶ	
	煙突(煙あり)	枯れ木	
	煙突(煙なし)		
	カーテン		

*「各部の描写」に含まれるアイテムのみ重複スコア可。

Table 2-3. S-HTP における人の評定項目

人数	1人		簡略化	棒人間	
	2人			シルエット	体の輪郭のみ描写。
	3人以上		各部の描写	顔の省略	顔を描いていない。
性別	同性	描き手と同性を描いている。		手なし	手を描いていない。
	異性	描き手と異性を描いている。		手首先なし	手首から先がない。
	両性	男女を描いている。		足なし	足が描いていない。
	性別不明	簡略化などで性別不明。		足首先なし	足首から先がない。
人の向き	正面向き			首なし	
	横向き			人物内容	自分(描き手)
	斜め向き		特定人物		性別・年齢が明確。
	後ろ向き		自分(描き手)と特定人物		
	混合	複数が様々な向きに描かれている。	不特定人物		性別・年齢が不明。
	向き不明	記号化等で顔の描写がなく判別不能。	非現実的	キャラクター	アニメ・ゲームのキャラクター。
バランス	明らかに過大	家・木と比べて過大。		擬人化	動物や物などの擬人化。
	明らかに過小	家・木と比べて過小。		それ以外	空想の世界を描いたもの。
運動描写	直立不動	動きがない。			
	簡単な運動	立つ, 座る, 寝る等。			
	明瞭な運動	歩く, 走る, 遊ぶ等。			
	判別不能	記号化等のため判別不能。			

Ⅲ-3. 養育態度による対象者の分類

成長過程において、両親からどのような養育態度を受けたと対象者が捉えているのかを父親・母親別に測定した。先行研究（小川，1991；及川，2005；鈴木ら，2002）に従って、各尺度得点の中央値により、対象者を高得点群と低得点群に分類した。

父親の養育態度の Care 尺度得点は 19.00～49.00 まで分布しており、中央値は 38.00 であった。得点が 38.00～49.00 の高得点群は 42 名、19.00～37.00 の低得点群は 38 名であった。Over-Protection 尺度得点は 15.00～45.00 まで分布しており、中央値は 22.00 であった。得点が 22.00～45.00 の高得点群は 41 名、15.00～21.00 の低得点群は 39 名であった。先行研究（小川，1991；及川，2005；鈴木ら，2002）に従い、Care 尺度の高低と Over-Protection 尺度の高低で組み合わせる 4 分類した結果を Figure 2-1 に示す。

母親の養育態度の Care 尺度得点は 22.00～49.00 まで分布しており、中央値は 42.00 であった。得点が 42.00～49.00 までの高得点群は 42 名、22.00～41.00 までの低得点群は 38 名であった。Over-Protection 尺度得点は 13.00～43.00 まで分布しており、中央値は 23.00 であった。得点が 23.00～43.00 までの高得点群は 41 名、13.00～22.00 までの低得点群は 39 名であった。ここでも Care 尺度の高低と Over-Protection 尺度の高低で組み合わせる 4 分類した結果を Figure 2-2 に示す。

4 分類の内容は、親の愛情を十分に受けた上で自主性を尊重された、愛情と自律承認群（以下、Fa（父親）I 群と Mo（母親）I 群）、親の愛情も強いが干渉や甘やかしも強い、愛情と過保護群（以下、FaII 群と MoII 群）、愛情の強さはあまり感じていないが、干渉が大きかったとする、冷淡と干渉群（以下 FaIII 群と MoIII 群）、親の愛情も干渉も強くなかったとする、無関心群（以下、FaIV 群と MoIV 群）である。

この 4 分類は、I-2 で述べた Maccoby&Martin（1983）の示した 4 種類の親の養育態度と概ね一致した内容である。すなわち、PBI における愛情と自律承認は Maccoby&Martin の「権威ある教育」に該当する。以下、愛情と過保護は「甘やかした養育」、冷淡と干渉は「権威主義的な養育」、および無関心は「無関心な養育」に、それぞれ該当するものである。

各群の対象者数は、Fa I 群が 22 名（27.5%）、Fa II 群 19 名（23.8%）、Fa III 群 22 名（27.5%）、Fa IV 群 17 名（21.3%）であり、Mo I 群が 25 名（31.3%）、Mo II 群 15 名（18.8%）、Mo III 群 27 名（33.8%）、Mo IV 群 13 名（16.3%）であった。

尚、本研究の分析には使用しなかったが、父親の養育態度の Care 尺度得点の平均値は 37.39、標準偏差は 6.21 であり、Over-Protection 尺度得点の平均値は 23.34、標準偏差は 6.28 であった。同様に、母親の養育態度の Care 尺度得点の平均値は 40.69、標準偏差は 5.58 であり、Over-Protection 尺度得点の平均値は 23.79、標準偏差は 6.51 であった。

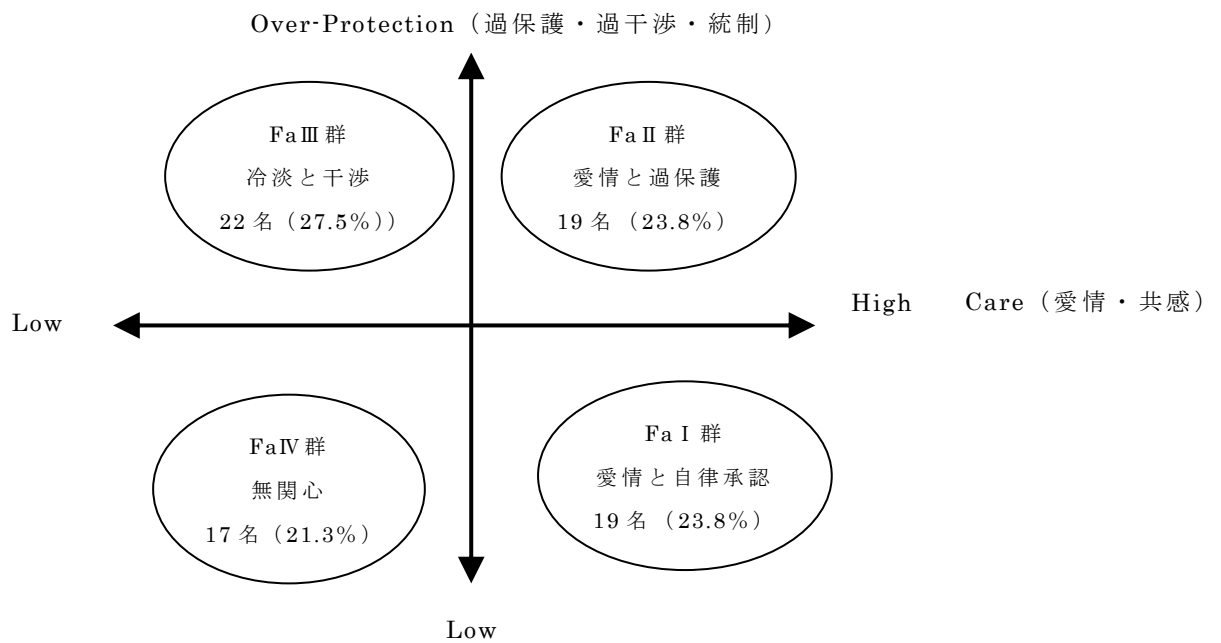


Figure 2-1. PBI による父親の養育態度の 4 分類

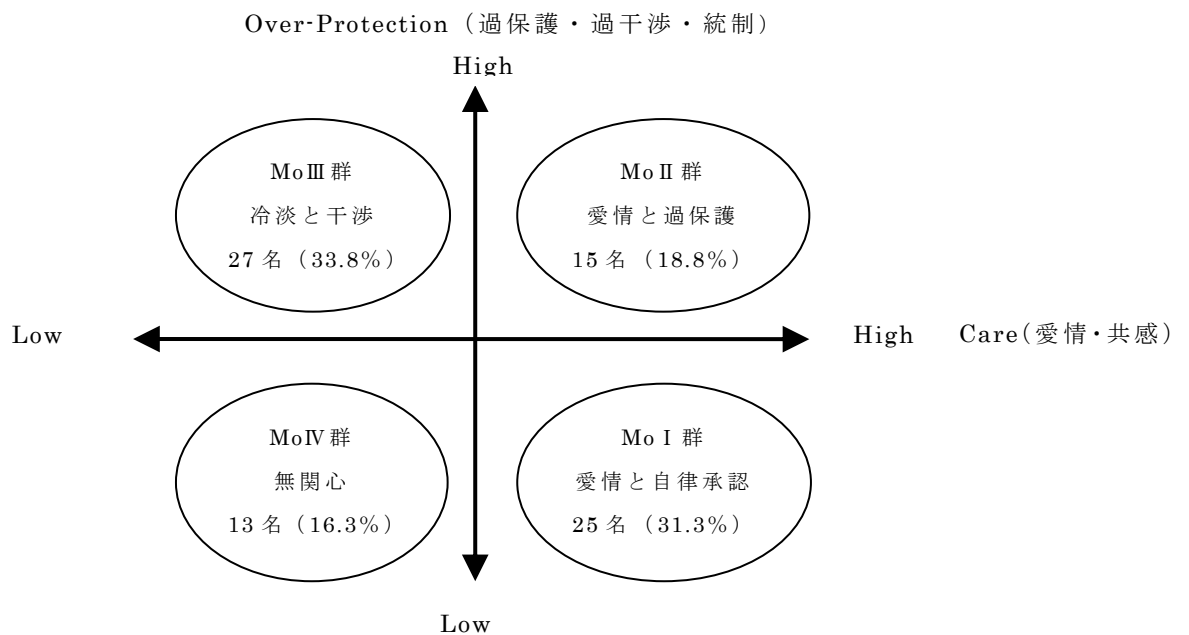


Figure 2-2. PBI による母親の養育態度の 4 分類

Ⅲ-4. 両親の養育態度と描画特徴の関係

S-HTP の全評定項目について、父親の養育態度における Fa I 群から FaIV 群の該当者数の差、および母親の養育態度における Mo I 群から MoIV 群の該当者数に違いがあるかどうかについて χ^2 検定を行った。該当者数が 5 名以下の場合には直接確率検定を行った。

残差分析の結果、「全体的項目」の 11 項目、「家に関する項目」の 4 項目、および「人に関する項目」の 2 項目において、いずれかの群で有意差、および有意傾向がみられた。しかし、「木に関する項目」では有意差はみられなかった。各評定項目における 4 群の該当者数と χ^2 検定の結果を Table 2-4~Table 2-6 に示す。

父親の養育態度では、「遠近感」、「現実的・非現実的描写」、「ドアと窓」、「人物」、および「動物」の 5 項目において有意差がみられた。母親の養育態度では、「統合性」、「壁の面数」の 2 項目において有意差がみられた。

父親の養育態度における「遠近感」では、Fa I（愛情と自律承認）群の「遠近感（大）」（ $\chi^2=2.33$, $p<.05$ ）と「遠近感（ばらばら）」（ $\chi^2=2.33$, $p<.05$ ）の出現が期待値に比べて有意に多く、FaIV（無関心）群の「直線（重なり無）」（ $\chi^2=3.95$, $p<.01$ ）の出現も期待値に比べて有意に多かった。また、FaIII（冷淡と干渉）群の「遠近感（ややあり）」（ $\chi^2=1.89$, $p<.10$ ）が期待値に比べて多い傾向がみられた。

「動物」では、Fa I 群の「（野生とペットの）混合」（ $\chi^2=3.16$, $p<.01$ ）の出現が期待値に比べて有意に多かった。FaII 群の「野生」（ $\chi^2=1.79$, $p<.10$ ）の出現が多い傾向と、「混合」（ $\chi^2=-1.79$, $p<.10$ ）の出現が少ない傾向がみられた。

「現実的・非現実的描写」では、FaII（愛情と過保護）群の「混合」（ $\chi^2=2.57$, $p<.05$ ）の出現が有意に多く、FaIV 群の「非現実的描写」（ $\chi^2=3.40$, $p<.01$ ）も出現も有意に多かった。FaIV 群の「現実的描写」（ $\chi^2=-2.19$, $p<.05$ ）が有意に少なかった。

「ドアと窓」では、FaIV 群の「窓の描写なし」（ $\chi^2=2.70$, $p<.01$ ）の出現が期待値に比べて有意に多かった。FaIII 群の「ドアも窓もなし」（ $\chi^2=1.68$, $p<.10$ ）の出現が多い傾向がみられた。

「人物」では、Fa I 群の「人物 1 人」（ $\chi^2=-2.50$, $p<.05$ ）の出現が少なく、FaIII 群の「人物 1 人」（ $\chi^2=2.50$, $p<.05$ ）の出現が多かった。また、Fa I 群の「人物 2 人」（ $\chi^2=2.33$, $p<.05$ ）の出現が多かった。FaIII 群の「人物 2 人」（ $\chi^2=-1.75$, $p<.10$ ）の出現は少ない傾向がみられた。

次に母親の養育態度における「統合性」では、MoIII（冷淡と干渉）群の「統合的」（ $\chi^2=3.14$, $p<.01$ ）の出現が期待値に比べて有意に多く、「やや統合的」（ $\chi^2=-3.66$, $p<.01$ ）の出現が期待値に比べて有意に少なかった。Mo I（愛情と自律承認）群の「やや統合的」（ $\chi^2=1.83$, $p<.10$ ）の出現が多い傾向がみられた。

「壁の面数」では、MoIII 群の「2 面（立体的）」（ $\chi^2=2.64$, $p<.01$ ）の出

現が多く、「1面（平面的）」（ $\chi^2 = -2.64$, $p < .01$ ）の出現は少なかった。

尚、MoII（愛情と過保護）群と MoIV（無関心）群では、いずれの項目においても有意差がみられなかった。

また、養育態度の検討においては、父親と母親のそれぞれの養育態度だけでなく、両親の養育態度の組み合わせを考慮することも非常に重要である。しかし、組み合わせてみたところ 25 パターンとなり、各該当者が少人数になってしまうため、今回は父親・母親それぞれに分析した。

統計的な有意差は認められなかったが、各項目の出現数から、養育態度 4 分類の描画特徴をみてみると、FaI 群は、人が「過大」「過小」でなく、各部の描写の欠落も「首なし」の 1 名を除いてなく、バランスの良い人を全身像で描いている。反対に FaII 群は、各部の描写いずれにも欠落がみられ、人の描き方はバランスが良くないが、「窓なしの家」「ドア・窓なしの家」は皆無である。「窓なしの家」「ドア・窓なしの家」の皆無は MaII 群でも同様であり、父親でも母親でも II 群に共通している。また、II 群は「自分」を描いた対象者がみられない。III 群、IV 群での特徴については、考察において詳しく述べる。

Table 2-4. 養育態度 4 群間における全体的評定項目の比較

全体的評定項目		Fa I (N=22)	Fa II (N=19)	Fa III (N=22)	Fa IV (N=17)	Mo I (N=25)	Mo II (N=15)	Mo III (N=27)	Mo IV (N=13)
統合性	統合的	5	6	9	6	5	3	15 **	3
	やや統合的	15	13	10	11	19 †	11	9 **	10
	媒介による統合	1	0	0	0	0	0	1	0
	やや羅列的	0	0	3	0	0	1	2	0
	羅列的	1	0	0	0	1	0	0	0
遠近感	大	2 *	0	0	0	1	0	1	0
	中	13	13	15	9	12	8	20	10
	ややあり	2	2	6 †	2	3	4	3	2
	直線・重なり有	3	4	1	2	3	3	3	1
	直線・重なり無	0	0	0	4 **	4	0	0	0
	ばらばら	2 *	0	0	0	2	0	0	0
動物	野生	3	7 *	5	2	4	4	6	3
	ペット	1	3	6	3	5	1	4	3
	混合	5 **	0 †	1	1	3	1	2	1
現実・非現実	現実的	22	17	22	14 *	21	15	26	13
	混合	0	2 *	0	0	2	0	0	0
	非現実的	0	0	0	3 **	2	0	1	0

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

※Fa, MoともにI群(愛情と自立承認), II群(愛情と過保護), III群(冷淡と過干渉), IV群(無関心)

※※残差分析で有意差がみられた項目のみ, ()内に調整された残差を示す。

残差の+値は期待度数以上, -値は期待度数以下。

Table 2-5. 養育態度 4 群間における家に関する評定項目の比較

家に関する評定項目		Fa I (N=22)	Fa II (N=19)	Fa III (N=22)	Fa IV (N=17)	Mo I (N=25)	Mo II (N=15)	Mo III (N=27)	Mo IV (N=13)
壁	1 面(平面的)	13	13	14	14	20	12	13 **	9
								(-2.64)	
	2 面(立体的)	9	6	8	3	5	3	14 **	4
								(+2.64)	
ドアと窓	ドア・窓あり	18	13	14	10	18	12	17	8
	ドアなし	3	6	5	2	3	3	7	3
	窓なし	1	0	0	3 **	1	0	1	2
					(+2.70)				
	ドア・窓なし	0	0	3 †	2	3	0	2	0
				(+1.68)					

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

※Fa, MoともにI群(愛情と自立承認), II群(愛情と過保護), III群(冷淡と過干渉), IV群(無関心)

※※残差分析で有意差がみられた項目のみ, ()内に調整された残差を示す。

残差の+値は期待度数以上, -値は期待度数以下。

Table 2-6. 養育態度 4 群間における人に関する評定項目の比較

人に関する評定項目		Fa I (N=22)	Fa II (N=19)	Fa III (N=22)	Fa IV (N=17)	Mo I (N=25)	Mo II (N=15)	Mo III (N=27)	Mo IV (N=13)
人物	1 人	6 *	8	16 *	10	13	4	15	8
		(-2.50)		(+2.50)					
	2 人	7 *	3	1 †	2	3	4	5	1
	(+2.36)		(-1.75)						
	3 人以上	9	8	5	5	9	7	7	4

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

※Fa, MoともにI群(愛情と自立承認), II群(愛情と過保護), III群(冷淡と過干渉), IV群(無関心)

※※残差分析で有意差がみられた項目のみ, ()内に調整された残差を示す。

残差の+値は期待度数以上, -値は期待度数以下。

Ⅲ-5. S-HTP の代表例

養育態度の 4 群における S-HTP の各描画特徴について χ^2 検定を行った結果から、Fa I 群、FaIV 群、および MoIII 群においては特徴的な傾向がみられた。その S-HTP の代表例を Figure 2-3～Figure 2-6 に提示する。

Fa I 群の描画特徴に多い「遠近感 (大)」, 「人物 2 人」に該当する S-HTP を Figure 2-3 に示す。この絵は、遠景として海とヨットを描いており、2 人の子どもの関係について、描き手は、描画後質問用紙に「2 人で遊んでいて今から帰ろうかなと思っているところ」, 「家は 1 軒しか描いていないが、もっとある設定で、この地域の住人はみんな仲良しである」と説明を述べている。



Figure 2-3. 「遠近感 (大)」・「人物 2 人」

FaIV 群に多い、「遠近感・直線 (重なり無)」, 「非現実的描写」, 「窓のない家」に該当する S-HTP を Figure 2-4 に示す。この絵の描き手は「知らないところの日常」, 「性別なし」, 「お菓子を食べて生きている」, および「大きすぎる木が崩れると家も危ないかもしれない」と述べている。

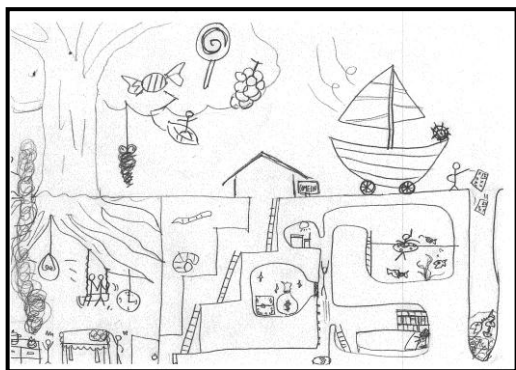


Figure 2-4. 「直線 (重なりなし)」,
「非現実的描写」, 「窓のない家」

FaIV群における「窓のない家」を、もう1枚 Figure 2-5 に示す。この絵は、従来の描画研究で精神病理傾向を示すとされる「窓の欠如」「筆圧の弱さ」、「途切れがちの描線」、「棒人間」、および、「枯れ木」によって表現されている。



Figure 2-5. 「窓のない家」

MoIII群の描画特徴に多い「統合的」、「壁2面（立体的）」に該当する S-HTP を Figure 2-6 に示す。この絵の描き手は「休日に家族で食事をする前の様子」、「家族は仲良し。お父さんは休日の家族サービスは欠かさない。お母さんは料理上手で、息子も夫も彼女が大好き」と述べている。

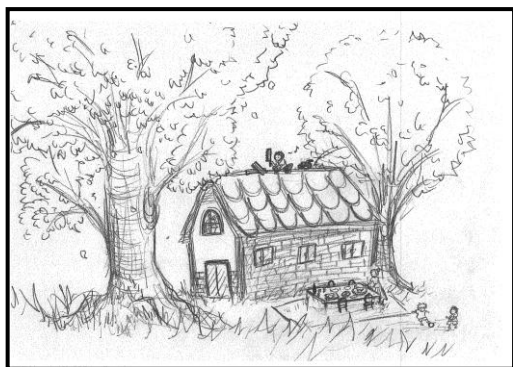


Figure 2-6. 「統合的」・「壁2面（立体的）」

本研究においては、先行研究に比べて「動物」の出現率が高く、全体の 35.9%（37名）の対象者にみられた。中でも、Figure2-7 に示すような動物は動物らしく描いているが、人物は「スティック・フィギュア」で描いた絵は本研究に特徴的な表現である。

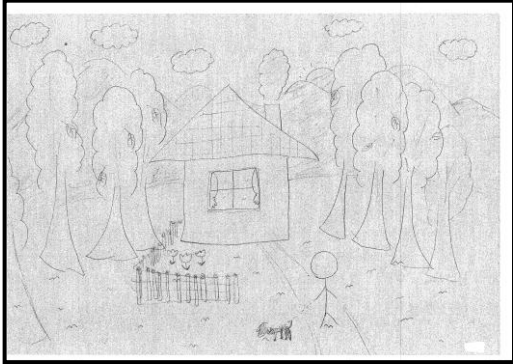


Figure 2-7. 「棒人間」と「自然な動物」

第IV節 考 察

S-HTP の描画特徴には、対象者の心理的な発達が発映される側面があり、三上（1995）、三沢（2002, 2008）によれば、家と木と人が自然に関連づけられており、適度な遠近感をもち、付加物によって、より詳細にまとめられた「統合的」な絵は対象者の心理的な成熟を示す。反対に、付加物がなく、家と木と人に何の関連性もない「羅列的」な絵や、あまりにも非現実的な絵は心理的に未熟な傾向を示すと考えられる。

第1章の第III節で述べたように、三沢（2008）は、現代青年の S-HTP における「統合性」の低下の要因として現代青年の心理的発達の未熟化を指摘している。本節では、養育態度の異なる4群間における S-HTP の描画特徴と両親の養育態度、および未熟化との関連について考察する。また、本研究に顕著な「動物」の出現率の高さと養育態度の関連についても考察を行う。

IV-1. 養育態度と S-HTP の描画特徴の関連性

Figure 2-3 の S-HTP の描写と、描き手である Fa I 群の対象者の説明からは良好な社交性が示される。三上（1995）の「1人だけしか描かないことが、すぐに孤立的であるとか、社会性がないことに結び付くとは言えない」としながらも、「人を複数描いている被検者は、社交性があると言えるかもしれない」という解釈にも一致する。また、三上（1995）は「遠近描写は、（中略）情緒的な成熟や、心の柔軟性を伴ってはじめて表現される」と述べており、この対象者には心の柔軟性は認められる。しかし、幼児期から児童期の絵に多くみられる大きな太陽や平面的な家の描写からは成熟より、むしろ幼児性が伺える。絵の中に描いた人が子どもであることも、未熟化を示唆すると考えられる。

FaIV群の対象者が描いた Figure 2-4 の S-HTP は絵、説明ともに掴みどころがなく、非常に主観的な表現である。「木が崩れると家も危ない」と不安も含んでいる。幼児が自由な発想で描くような、適度に空想力に富んだ表現は内面エネルギーの豊かさを示すが、Figure 2-4 の絵は、空想が広がりすぎて、他者には理解しづらい自己完結した世界となっている。したがって、内的エネルギーの低下や社会性の乏しさが伺える。地上と地下を同時に描いた「透視画」という描写からも精神病理傾向が示唆される。

Figure 2-5 の S-HTP も、FaIV群の対象者が描いた絵である。紙面中央に描かれた「窓のない家」と「枯れ木」によって、閉塞感や寂しさを捉えることができる。他にも病理指標である「筆圧の弱さ」、「途切れがちの描線」、および「棒人間」で構成されており、絵の全体から抑うつ傾向が伺える。

三上（1995）は、「窓の欠如」は、「ドアの欠如」と同様に「人を遠ざけて、周囲からひきこもる傾向を示し、（中略）窓は人間の目のようであることから、その窓の欠如は、自ら外を眺めることを犠牲にしながら、中を見せないことを意味する」と述べている。また、高橋（2011）はドアと窓のいずれかを描かない人について「窓を描かない人は、扉を描かない人よりも適応が悪く、外界への関心が欠如し、外界との関係を受動的であってももてず、外界への敵意や、ひきこもりの強さを表しがちである」と述べている。外界との交流が閉ざされた S-HTP が FaIV群に多いことは、子どもに対する愛情や関わりが乏しい父親の無関心な養育態度が影響を及ぼし、対象者に不適応傾向や抑うつ傾向が生じている可能性を示唆する。

次に、Figure 2-6 の SHTP について、描き手である MoIII群の対象者は、非常に理想的な家族の風景を説明している。S-HTP には、現実とは異なる理想が表現されることもある。この描き手が認知する母親の養育態度は「冷淡と干渉」であるが、絵に理想の母親像を投影したとも考えられる。この対象者に限らず、MoIII群の S-HTP には、統合的で立体的な描写が多く、心理的な成熟が伺える。それは何故であろうか。ここで、冷淡と干渉という定義を広げて、躰の厳しさと解釈するならば、MoIII群の対象者は幼い頃から、“良い子であること”や“周囲に対する気遣い”を母親から要求されていたと考えられないだろうか。そうであれば、客観的に物事を見つめる力が養われ、成熟した心性であることは不自然ではないと考えられる。

IV-2. 動物の出現率の高さと養育態度

これまでの S-HTP の研究において、動物は「付加物」の下位項目として取り上げられている論文（三上，1995；三沢，2002；田畑，2006）と、取り上げられていない論文（青山・市川，2006）がある。項目として取り上げられている研究においても出現率が多いわけではなく、特に目立った言及や考察はなされていない。また、稲田（2003）の研究は、小学 3～5 年生と中学 1 年生を対象に、樹木・動物の描き方がどのように変化するかを比較検討するため、家、木、人に加え、動物を課題として行ったものなので、全対象者が動物を描くことに

なり、自発的な動物の出現数とは比較できない。

これらの先行研究に対して、本研究において特徴的であるのは、動物が多くの対象者によって描かれていることである。動物を描いた対象者は、「野生」16名、「ペット」14名、「野生」と「ペット」の両方を描いた「混合」が7名で、計37名であり、付加物の出現率全体の20.4%を占める。これは、「自然物(大)」の28.2%、「自然物(小)」の23.2%に次ぐ出現率である。「自然物(大)」は山や川や道などを指し、「自然物(小)」は草や花などである。これらはS-HTPの性質上、家、木、人を統合させたり、描画内容を豊かにするために必要な項目であるため出現率は高くても当然なのだが、そうした必用性のない動物が付加物の3番目を占めるのはどのような理由からであろうか。本研究では、描画後質問用紙の「家族構成欄」にペットまで描いた対象者もみられ、動物が家族として位置づけられていることが推察できる。統計分析の結果においてもFa I（愛情と自律承認）群のS-HTPに「野生」も「ペット」も出現する特徴がみられること、Fa II（愛情と過保護）群では小鳥や猫などを敢えて「ペット」と定義しなくとも、ごく身近な存在として描いており、動物への愛着や関わりが大きいことが伺える。この2群には父親の愛情を十分に受けたと認知している共通点がある。父親に守られ、愛されたことで、対象者自身の他に向ける愛情も豊かに育まれたのではないかと考えられる。

第V節 まとめと今後の研究課題

V-1. 本研究のまとめと問題点

本研究では、三沢（2008）が述べた、現代青年のS-HTPにおける「統合性」の低下は、幼少期からの対人経験の乏しさによる心理的発達の未熟化に起因するという仮説に基づき、大学生によるS-HTPの描画特徴と、彼らが認知する両親の養育態度との関連性の検討を行った。

養育態度により分類した4群においては、親の十分な愛情を受け、自律を支持されたと認知する「愛情と自律承認」群の対象者は心理的に成熟しており、「統合的」なS-HTPが多く、親の愛情も関わりも乏しかったと認知する「無関心」群の対象者は未熟化傾向にあり、統合性の低いS-HTPが多いと考えられた。結果として、無関心群に未熟化を示す「非現実的描写」が有意に多い点は、この予測を、一応は支持するものである。しかし、無関心群における非現実的描写の多くは、幼児が描くように自由な発想が大きく、内省力が不十分なために生じる表現ではなく、不安や内的エネルギーの低下、社交性の乏しさなど精神病傾向を示す表現であった。

上記した、自由な発想が大きく内省力が不十分なために生じる幼児的な未熟さを示す描画特徴は4群を問わず、多くの対象者に認められた。しかし、その描画特徴を数量的に評定するだけでは、対象者の描画特徴、およびそこに投影される対象者の心性を十分に捉えたとはいえないであろう。

また、両親の養育態度の調査方法についても、さらなる検討が必要である。本研究で捉えた両親の養育態度は、子どもである大学生が生育過程を振り返り、PBIによって測定したものである。従って、第1節で述べた Bowlby(1969, 1973), Main&George (1985), LaFreniere&Sroufe (1985) などの、乳幼児期からの養育環境と子どもの発達、アタッチメント・タイプへの影響を縦断的に調査し、客観的に捉えた養育態度に比べて、対象者個々の認知や親への好悪感情など主観性を払拭しきれない面がある。

これまでの養育態度研究のほとんどは、本研究と同様に成長した子どもが過去を振り返り、質問紙法によって親の養育態度を測定する方法で行われている。養育態度測定のための質問紙は、PBI(山形・日高, 2008; 大和・吉岡, 2011 他)の他に、辻岡・山本(1976)が開発した『親子関係診断尺度 EICA』(佐藤, 2001; 山口, 2006 他)と、Perris et al(1980)の『Egna Minnen av Barndoms Uppfostran』を染谷ら(1996)が邦訳した日本語版 EMBU(野添ら, 2005; 李・下山, 2008 他)が主に使用されている。これらの質問紙は、すべて標準化がなされており、信頼性・妥当性も認められている。しかし、小川(1991)は質問紙法の限界として、「両親と子の関係という、家族内環境の核となる部分だけを単純化してとりだして解釈していることである」と指摘し、「家族成員のなかに、祖父母、同胞などで、家族に非常に影響力をもつものがある場合は、あらためて考慮しなければならないであろう」と述べている。

これに補足することとして、対象者にとって父親と母親から影響を受けたと考えられる領域は異なっており、その組み合わせ(夫婦仲、力関係など)がどうであったのか、対象者にとって、一方の親の欠点を、他方の親がどのように補っていたのかなど、夫婦間、親子間の相互作用についても検討を行っていくことが、今後の研究において重要な課題であると考えられる。

V-2. 今後の研究課題

本研究における80名のS-HTPには、先行研究では言及されていない描画表現が複数出現し、それは現代青年に特徴的であると考えられた。統計的分析によって、有意差を示す特徴もあったが、111の評定項目を用いた中で、有意差、あるいは有意傾向がみられたのは17項目とわずかであった。従って、現代青年のS-HTPには既存の評定項目では捉え難い描画特徴がみられると考えられる。本研究では不適応傾向や抑うつ傾向を示す特徴がみられ、今後の検討が必要である。

S-HTPの大きな利点は、描かれた家、木、人、および付加物の関連を検討することにより、対象者の自己像から家族・社会との関わり方までを捉えられることである。そのためには統計分析による数量的アプローチに限らず、絵全体の描画特徴から、その意味するものを解釈していく内容分析的アプローチも併せて行っていくことが重要である。

第 3 章

友人との交流態度と青年の描画特徴の関連

第2章では、現代青年の対人経験とS-HTPの描画特徴の関連性を検討する上で、人が最初に関わる対象である父親・母親それぞれの養育態度を取り上げて論じた。続いて、第3章においては、現代青年における友人との交流の仕方（会話、遊び、行動など）と、友人に対して抱いている気持ちに焦点を当てる。

第I節 問題と目的

I-1. 青年期の友人関係

青年期の友人関係は、児童期の「ギャング・エイジ」に代表されるような「仲間」ではなく、「友人」としての結びつきが急増し、それは自己開示による思想や感情の共有と、友人についての親密な知識を重視する点に示される（井上、1992）。自己開示について、井上（1992）は、「人に相談するという行為は、解決のための情報が欲しい場合もあるが、ただ話を聞いてもらうだけでも当人にとっては気が休まるということがある。これは親密な友人関係のもつもっとも重要な機能（相互の自己開示）」と述べ、児童期に比べて青年期で大きく増すことを指摘している。Atwater（1992）は、青年期では他の年代以上に友人との関わりを求め、おたがいの違いを受容しつつ、相手との信頼・自己開示・忠誠に基づいた親密で有意義な友人関係が維持されるとし、遠藤（1997）も、児童期に比べ、青年期における交友関係は価値観を共有できる少数の特定の者との精神的結びつきを重視する深い関係であり、自分の内面的なことは親に対してではなく、特定の友人に対して話し、共有したいと思うようになっていくと述べており、相手が自分の内面を、より理解してくれるように心を開く自己開示が、児童期から心理的に発達した青年期の特徴であることを示している。

青年期における友人関係の特徴として、親友の出現を挙げた難波（2004）は、親友の定義として、「児童期までの遊びを中心とした仲間関係から、個人的で限定的な意味を持つ特定の友人が生まれる。そのような友人でも特に精神的に深いつながりを持つことができる対象が、いわゆる親友となる」と述べている。遠藤（2000）も、青年期の親友関係について、自己開示による個人的な感情や考えの共有が特徴であり、「相手の個人的なことをどのくらい知り理解しているかが親密性の指標とされる」としている。

このように、従来の青年期における友人関係では、児童から青年への心理的発達とともに、同年齢やクラスが一緒、近所に住んでいるなど、特に選択することなく、自然に集まり形成された仲間集団から、思考や価値観が共通している、おたがいに自己開示できるなどの理由によって自ら選択した友人との交流の深まりが特徴とされる。西平（1973）は、こうした関係性によって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されると述べている。また、自己開示を行うためには、まず自分の内面と向き合うことが必要であり、青年として相応の内省力が形成されると考えられる。このような健康的な成熟な過程は、現在も多くの青年たちが経験しているものであろうと考えられる。しかし、一

方で、1980年代半ばから、青年期の友人関係における様々な変化を指摘する報告がみられるようになった。そこで述べられている友人関係や青年像は、研究者の視点や考察の違いはあっても、その根本的な特徴は共通しているといえる。これらの特徴を中心に、1980年代半ばから現代に至る青年期の友人関係について以下に述べる。

I-2. 現代に特徴的な青年期の友人関係

上述したように、1980年代以前の青年期の友人関係は、親密でおたがいに自分の内面を開くことができる関係であり、これによって年齢相応の成熟が促進されるとされてきた。しかし、1980年代半ば以降、自己開示することを避けて、表面的に円滑な関係を求める特徴をもつ「希薄な」友人関係の増加が指摘されている（栗原，1989；松永・岩元，2008；岡田，1993；岡田，1995；大平，1995；千石，1991；東京都生活文化局，1985；上野ら，1994他）。

また、橋本（2000）は、一部の青年においては内省力の低さとともに、友人への気遣いや配慮も低いという特徴を指摘し、中園・野島（2003）は、友人からの評価を気にすることなく、一方的で自己中心的な関わりをする青年の存在を指摘している。すなわち、2000年以降、現代青年における友人関係は希薄化傾向に加え、他者の目を気にしない、友人の気持ちや状況に対する想像力の乏しさ、および関係をもととする意識の低さなど、友人関係そのものに対して「無関心」な傾向がみられるようになったのである。

このように、現代青年の友人関係を「表面的かつ希薄であり、関係をもつこと自体に関心が低い」と指摘した研究は多く、それらは現代青年の友人関係の一側面を適確に捉えていると考えられる。しかし、藤井（2001）は、「山アラシ・ジレンマ」という視点から現代青年の友人関係に対する別の側面を指摘している。

山アラシ・ジレンマとは、本来は、Schopenhauer（1851）の寓話であり、「山アラシの一群が冬の寒さで凍えることを防ぐために、おたがいの体温で温め合おうと、ぴったりとくっつき合った。しかし、おたがいの棘が痛い分かれた。温まる必要からまたくっつくと、痛みが生じる。山アラシは寒さと痛みという2つの困難を繰り返すうちに、程々の間隔を置いて身を寄せ合うことを見出した」という内容である。この寓話を基にして、アメリカの精神分析医 Bellak（1974）が、対人関係において「近づきたいが、離れたい」という葛藤を意味する言葉として「山アラシ・ジレンマ（porcupine dilemma）」と命名した。

藤井（2001）の研究における山アラシ・ジレンマは、従来の「近づきたいが、離れたい」という極端なものではなく、「近づきたいが、近づきすぎたくない」、「離れたいが、離れすぎたくない」という、より微妙な葛藤であった。藤井（2001）は、この葛藤を「相手との適度な心理的距離を自分のなかで模索して生じる現代の「山アラシ・ジレンマ」といえるのではないだろうか。（中略）浅く表面的なつきあい方をする青年の内面には、非常に複雑な葛藤が生じていることがうかがえる。そこに現れているのは、意図せぬ形で互いを傷つけあうことを恐れ

ながら、「個」としてのあり方が確立できずに相手と離れられないという、複雑な心性である」と述べ、現代青年の友人関係を論じる際には、希薄さ・無関心という特徴に加え、その内面に含まれた多様な特徴を捉え、理解していくことの重要性を示唆している。

I-3. 本研究の目的

青年期の友人関係に関する研究数は膨大であるが、友人関係と描画表現との関連性を取り上げた研究は、筆者が知る限り、これまでにみられない。S-HTPは、描き手の意識・無意識両面の自己イメージに加え、社会との関わり方、および人間関係も捉えることが可能な描画テストである。従って、本研究は、現代青年の友人に対する意識、友人との関わり方が、S-HTPの描画特徴にどのように反映され、どのような関連性をもつのかを検討することを目的として行った。

第Ⅱ節 方 法

Ⅱ-1. 調査対象者

2010年5月～7月に、4校の共学・4年制大学の大学生・大学院生113名を対象として、S-HTPと友人を中心とする他者との交流に関するアンケート、およびPBIによる調査を実施した。

Ⅱ-2. 調査用紙

①描画後質問用紙

第2章と同様の描画後質問用紙を使用した。

②他者との交流に関するアンケート

対象者が現在、および子どもの頃、他者とどのように交流しているのか・していたのかを自由記述してもらい、筆者が作成した質問用紙である。現在の記述欄にはI「学校や地域で、友達や周囲の人とどのような『つきあい（接し方・遊び方など）』をしていますか?」、II「その『つきあい』をしている友達や周囲の人に対して、どのような『気持ち』を抱いていますか?」という質問への回答を求めた。子どもの頃についても同様の質問をしたが、本研究においては、「現在の他者との交流」についてのみ分析を行った。

尚、調査時点においては、第2章の研究に使用したPBIも同時に配布して回答を得ている。しかし、そのデータは本研究の分析には用いなかった。

Ⅱ-3. 実施手続き

本調査の実施は、調査実施の承認を得られた担当教員の講義時間内に、調査の主旨を説明して、同意が得られた学生に対して行った。調査は匿名で行うため、A4サイズの画用紙、調査用紙のセット（描画後質問用紙、他者との交流に

関するアンケート、PBI) に通し番号を付け、同じ通し番号を付けた封筒に入れて対象者に配布した。HB の鉛筆と消しゴムも同時に配布した。質問紙からの S-HTP の描画内容への影響を避けるために、まず A4 画用紙のみを封筒から取り出してもらい、S-HTP を実施した。画用紙を横にして使用するよう伝えた後、「家と人と木を入れて、他は自由に自分の思うように 1 枚の絵を描いてください。絵の上手い・下手はまったく気にしないでください。でも、できるだけ丁寧に描いてください。」と教示し、必ず絵を描き終えてから、調査用紙への記入を行うよう伝えた。

尚、調査実施に当たっては名古屋大学大学院教育発達科学研究科倫理委員会に研究計画書を提出して承認を得た。

第Ⅲ節 結 果

Ⅲ-1. 有効対象者

上記したように、S-HTP、調査用紙セットの回収数は 4 校の大学全体で 113 名であった。しかし、結果処理の段階で、家・木・人のいずれかが欠如した絵を描いた者、家・木・人は描いているが、S-HTP としての評定が不可能な絵を描いた者は除外した。調査用紙に回答漏れや年齢、性別の未記入のみられた者も含めて 10 名を分析対象から除外したため、有効回答数は 103 名で、有効回答率は 91.15% であった。

103 名の有効対象者全体の平均年齢は 21.04 歳、標準偏差は 1.53 であった。性別は男性が 37 名 (35.92%) で平均年齢 21.14 歳、標準偏差は 1.86、女性は 66 名 (64.08) で平均年齢 20.56 歳、標準偏差は 1.28 であった。

Ⅲ-2. S-HTP の評定

S-HTP の評定項目は、第 2 章で用いた全体的項目、家の項目、木の項目、人の項目の総計 111 項目について再検討を行った。出現数がみられない項目や出現がわずかな項目を削除し、ある程度の出現数がみられる項目を追加して 110 項目を設定した。これを Table 3-1~3-3 に示す。S-HTP の評定は客観性を保つために、筆者と S-HTP 研究に熟練した臨床心理学者の協議・合意によって決定した。

Table 3-1. S-HTP の全体的評定項目

評定項目		内 容	評定項目		内 容	
統合性	統合的	全体にまとまりがあり不調和な部分がない。	付加物*	自然物大)	山、道、雲、太陽、月、川、海、など	
	やや統合	ある程度まとまりはあるが、一部が不調和。		自然物中)	田畑、池、湖、花壇など	
	媒介で統合	全体は羅列だが、山・草等の媒介で統合。		自然物小)	草、花、石など	
	やや羅列	全体は羅列だが、一部にやや関連がある。		人工物	橋、門、柵、囲い、ベンチ、家具など	
	羅列的	家・木・人が無関係に羅列されている。		乗り物	車、船、飛行機など	
遠近感	大	遠くまで細かく描き、遠近感が大きい。		食べ物	食品、飲み物、食事など	
	中	家・木・人付近にのみ遠近感がある。		動物	犬、猫、鳥、魚、虫など	
	ややあり	家・木・人を上下に描いている。		その他		
	直線 (重なり有)	直線上で家と木、家と人等に重なりあり。		地面の描写	全体	線や黒塗りによる描写が全体に描写あり。
	直線 (重なり無)	家・木・人が直線上に並び、重なりがない。		部分		線や黒塗絵意義による描写が一部に描写あり。
	ばらばら	家と木と人がばらばらに描かれている。	なし			
描線	途切れなし	1本の線で描かれ、途切れていない。	現実的・非現実的描写	現実的	描画内容が現実的。	
	途切れあり	途切れがちな線で描かれている。		非現実的	描画内容が非現実的。	
	その他の線	デッサン風、スケッチ風など多様な線。	全体的陰影	あり	絵全体を暗幕のように塗りつぶす。	
陰影	陰影なし	日のあたる部分のみを描いている。	なし			
	陰影あり	日のあたらない部分を描いている。				

*「付加物」に含まれるアイテムのみ重複スコア可。

Table 3-2. S-HTP の家・木に関する評定項目

家		木	
評定項目	内 容	評定項目	内 容
家の軒数	1 軒	木の本数	1 本
	2 軒		2 本
	3 軒以上		3 本以上
壁の面数(立体感)	1 面(平面的)	幹	上下開放(樹冠の有無に関らず)(型)
	2 面(立体的)		上下閉鎖
	不自然な面数(形)		上部開放・下部閉鎖
ドアと窓	ドア・窓あり		上部閉鎖・下部開放
	ドアなし	上下用紙の縁で切断(はみ出し)	
	窓なし	枝	描写あり
	ドア・窓なし		描写なし
各部の描写*	屋根に模様あり	葉	描写あり
	煙突		描写なし
	ポスト	実	描写あり
	家具		描写なし
	カーテン	根	描写あり
	その他		描写なし
家の塗りつぶし	あり	樹皮の模様・傷	描写あり
	なし		描写なし
用紙の縁での切断 (紙面からはみ出し)	あり	木の塗りつぶし	あり
	なし		なし
家と人の関連	家の中のみ	用紙の縁での切断 (紙面からはみ出し)	あり
	家の中と外		なし
	何らかの関連あり	木と人の関連	あり
	関連なし		なし

*「各部の描写」に含まれるアイテムのみ重複スコア可。

Table 3-3. S-HTP の人に関する評価項目

評価項目	内 容		評価項目	内 容	
人数	1 人		人物内容	自分	
	2 人			特定人物	性別・年齢等を明確に設定。
	3 人以上			自分と特定人物	
		不特定人物		性別・年齢等が不明。	
性別	同性	描き手と同性を描いている。	各部の描写	顔の省略	顔を描いていない。
	異性	描き手とは異性を描いている。		上半身のみ	下半身を描いていない
	両性	男女を描いている。		手または手首先なし	手首から先がない。
	性別不明	簡略化などで性別不明。		足または足首先なし	足が描いていない。
				足首先なし	足首から先がない。
人の向き	正面向き		棒人間・輪郭線のみ	あり	
	横向き			なし	
	斜め向き		用紙の縁での切断(はみ出し)	あり	
	後ろ向き			なし	
	向き不明	記号化等で顔の描写がなく判別不能。			
運動描写	直立不動	動きがない。			
	簡単な運動	立つ, 座る, 寝る等。			
	明瞭な運動	歩く, 走る, 遊ぶ等。			
	判別不能	記号化等のため判別不能。			

Ⅲ-3. 友人への交流態度による対象者の分類

『友人への交流態度』の分類は筆者と臨床心理学者の2名の合議により行った。「現在の他者との交流」について、質問Ⅰ「学校や地域で、友達や周囲の人とどのような『つきあい（接し方・遊び方など）』をしていますか?」、および質問Ⅱ「その『つきあい』をしている友達や周囲の人に対して、どのような『気持ち』を抱いていますか?」への回答において、すべての対象者が、「他者」として友人を念頭に置いた内容を記述し、その他の人々との交流に関する記述はわずかであった。従って、「友人」に関する記述に限定して分類の対象とした。また、質問Ⅰへの回答は具体的な遊びや行動のみの記述が大半を占めていたため、分類には原則として質問Ⅱへの回答を用いたが、判断に迷う場合は質問Ⅰを参考に『友人への交流態度』として一括し、検討を行った。

まず、記述内容が同様・類似したものを7群にまとめた。「相手とのつきあいの程度により、接し方や話す内容を変える」という記述が多く、その中でも自分の内面を見せる深い関係を述べる者と、内面は見せない浅い関係を述べる者に分かれたことが特徴的であった。「相手に安心していても信頼までは至らない」など、相手を信頼できるかどうかを重要と考えられた。従って、分類の基準を「自分の内面を見せられる、信頼する友人がいるかどうか」として、さらにまとめて4群に分類した。客観性を期すために、アンケートの作成、記述内容の整理に関わりのない臨床心理学者に評定を依頼し、筆者の評定との合議により最終決定を行った。

4群の名称と人数は、「社交群」38名（36.9%）、「信頼群」22名（21.4%）、「距離群」15名（14.6%）」、および「希薄群」28名（27.2%）である。4群の分類基準と記述内容をTable 3-4に示す。

Table 3-4. 『友人への交流態度』における 4 分類

4 群	N (%)	分類基準	記述内容
社交群	38 (36.9)	友人に全体的に親しみや安心を抱いているが、内面や本音をさらけ出すまでには至らない。小人数とじっくりと関わるよりも、大勢で楽しく過ごすことを好む。	<ul style="list-style-type: none"> ■大抵の友人に安心できる。勉強や将来のことを話す ■みんなに助けられている。賑やかで楽しくできて安心。 ■大勢の友達ができる楽しい。安心できる。1人は寂しい。
信頼群	22 (21.4)	交友の多い・少ないに関らず、特定の友人には強い信頼があり、内面を見せることができる。浅い関係から深い関係まで友人の段階を分けている。	<ul style="list-style-type: none"> ■友人は多くないが深いつきあい。信頼し何でも話せる。 ■深くつきあう人は安心。「明」しか見せない人もいる。 ■信頼しているので、自分の嫌な部分もさらけ出す。
距離群	15 (14.6)	交友の幅が狭いわけではなく、ある程度安心のある関わりだが、信頼までは至らず、友人と一定の距離を保つことを必要とし、内面を見せることはしない。	<ul style="list-style-type: none"> ■求められると安心だが、完全にわかりあえないとも思う。 ■安心できるが、どの程度信頼していいのかわからない。 ■親しみを抱きつつ、一定の距離感を保っている。
希薄群	28 (27.2)	表面的関係であり、安心や信頼は抱いていない。広く浅く友人と関わっている。あるいは、あまり友人と関わらないなど、いずれにしても交流に対しては消極的。	<ul style="list-style-type: none"> ■人間関係は広いが浅くなった。淡白な関係。 ■親しみを感しない。裏がある。不安。緊張。 ■気を使う。人と一緒に疲れる。面倒くさい関わりはしない。

N= 103

Ⅲ-4. 友人への交流態度と描画特徴の統計的検討

S-HTP の 110 項目について、『友人への交流態度』における 4 群間の該当者数の差を χ^2 検定により検討した。該当者数が 5 名以下の場合は直接確率検定を行った。

残差分析により、いずれかの群で有意差、および有意傾向がみられたのは、「全体的陰影」、「家」、「木の本数」、「幹」、「葉」、「根」、「切りかぶ」、「人数」における 11 項目であった。有意差のみられた評定項目の各群における出現数と χ^2 検定の結果を Table 3-5 に示す。

「全体的陰影あり」は社交群 ($\chi^2 = -2.10, p < .05$) での出現が期待値に比べて有意に少なく、希薄群 ($\chi^2 = 1.85, p < .10$) では期待値に比べて出現が多い傾向がみられた。

「家・用紙の縁での切断」は距離群 ($\chi^2 = 2.30, p < .05$) での出現が期待値に比べて有意に多く、信頼群 ($\chi^2 = -1.76, p < .10$) では期待値に比べて出現が少ない傾向がみられた。

「木の本数・2 本」は信頼群 ($\chi^2 = 2.11, p < .05$) での出現が有意に多く、社交群 ($\chi^2 = -1.89, p < .10$) では出現が少ない傾向がみられた。「木の本数・3 本以上」は信頼群 ($\chi^2 = -2.24, p < .05$) での出現が有意に少なく、社交群 ($\chi^2 = 1.95, p < .10$) では出現が多い傾向がみられた。

「幹・上下開放」は社交群 ($\chi^2 = 3.20, p < .01$) での出現が有意に多く、希薄群 ($\chi^2 = -2.36, p < .05$) での出現は有意に少なかった。

「幹・上下用紙の縁での切断」は距離群 ($\chi^2 = 2.33, p < .05$) での出現が有意に多く、信頼群 ($\chi^2 = -1.90, p < .10$) では出現が少ない傾向がみられた。

「葉・描写あり」は社交群 ($\chi^2 = 3.20, p < .01$) での出現が有意に多く、信頼群 ($\chi^2 = -2.01, p < .05$) では出現が有意に少なかった。また、希薄群 ($\chi^2 = -1.69, p < .10$) では出現が少ない傾向がみられた。

「根・描写あり」は希薄群 ($\chi^2 = 2.47, p < .05$) での出現が有意に多く、距離群 ($\chi^2 = -2.12, p < .05$) では出現が有意に少なかった。

「切りかぶ・描写あり」は信頼群 ($\chi^2 = 2.74, p < .01$) での出現が期待値に比べて有意に多かった。

「人数・2 人」は、信頼群 ($\chi^2 = 2.55, p < .05$) での出現が有意に多く、距離群 ($\chi^2 = -1.68, p < .10$) では出現が少ない傾向がみられた。「人数・3 人以上」は距離群 ($\chi^2 = 2.18, p < .05$) での出現が期待値に比べて有意に多かった。

尚、三上 (1995)、三沢 (2002, 2008) が S-HTP で最も重視する「統合性」では、交流態度の 4 群間に有意差はみられなかった。しかし、有意差がみられないことにも現代青年の描画特徴を示唆する側面があると考えられたので、4 群における「統合性」の出現数と出現率を Table 3-6 に示す。

Table 3-5. 交流態度 4 群間における評定項目の比較

評定項目	社交群 N=38	信頼群 N=22	距離群 N=15	希薄群 N=28
全体的陰影あり	0* (-2.10)	1	2	4 † (+1.85)
家・用紙の縁での切断	12	4 † (-1.76)	9* (+2.30)	10
木の本数・2本	2 † (-1.89)	6* (+2.11)	1	5
木の本数・3本以上	15 † (+1.95)	2* (-2.24)	6	6
幹・上下開放	10** (+3.20)	1	2	0* (-2.36)
幹・上下用紙の縁での切断	5	1 † (-1.90)	6* (+2.33)	7
葉・描写あり	10** (+3.20)	0* (-2.01)	2	1 † (-1.69)
根・描写あり	13	8	2* (-2.12)	16* (+2.47)
切りかぶ・描写あり	0	2** (+2.74)	0	0
人数・2人	11	12* (+2.55)	2 † (-1.68)	8
人数・3人以上	9	2	6* (+2.18)	3

N=103 ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

※残差分析で有意差がみられた項目のみ、()内に調整された残差を示す。
残差の+値は期待度数以上、-値は期待度数以下。

Table 3-6 交流態度 4 群における「統合性」の出現数と出現率

「統合性」の評定項目	社交群 N=38	信頼群 N=22	距離群 N=15	希薄群 N=28
統合的	9 (23.7)	9 (40.9)	6 (40.0)	8 (28.6)
やや統合的	25 (65.9)	12 (54.5)	9 (60.0)	19 (67.9)
媒介による統合	3 (7.9)	1 (4.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
やや羅列的	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
羅列的	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.6)

※()内は出現率。

Ⅲ-5. S-HTP の代表例

各群に多くみられた項目，すなわち描画特徴に該当する S-HTP の代表例を Figure 3-1～Figure 3-16 に示す。次節では，これらの描画特徴についての解釈を述べて，交流態度 4 群の心性がどのように絵に表れているのかの考察を行う。



Figure 3-1. 希薄群「全体的陰影あり」①

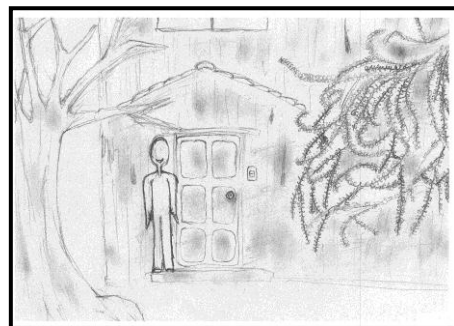


Figure 3-2. 希薄群「全体的陰影あり」②

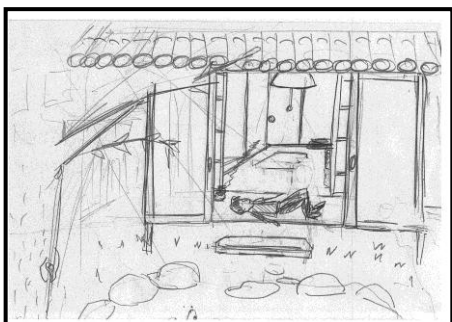


Figure 3-3. 距離群「家・幹の切断」①

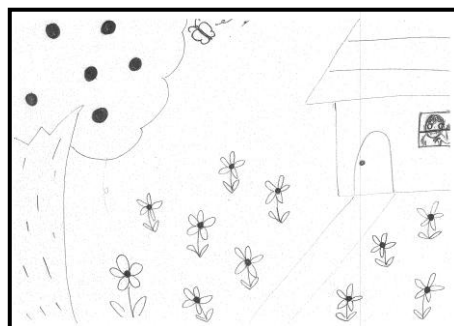


Figure 3-4. 距離群「家・幹の切断」②



Figure 3-5. 信頼群「人 2 人・木 2 本」①

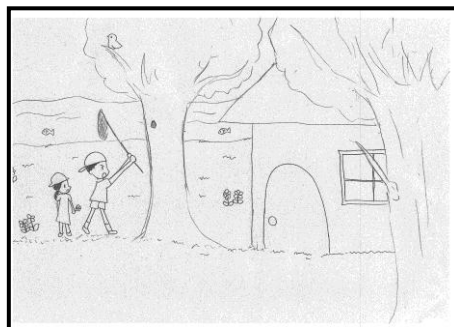


Figure 3-6. 信頼群「人 2 人・木 2 本」②



Figure 3-7.

距離群「木 3 本以上・人 3 人以上」①



Figure 3-8.

距離群「木 3 本以上・人 3 人以上」②



Figure 3-9. 社交群「幹・上下開放」①

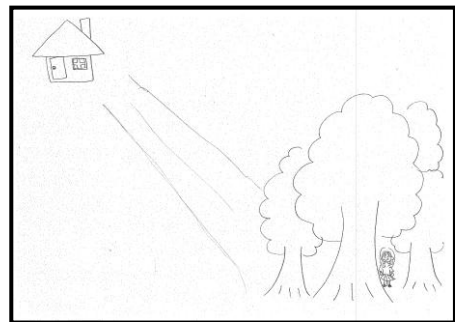


Figure 3-10. 社交群「幹・上下開放」②



Figure 3-11. 社交群「葉・描写あり」①

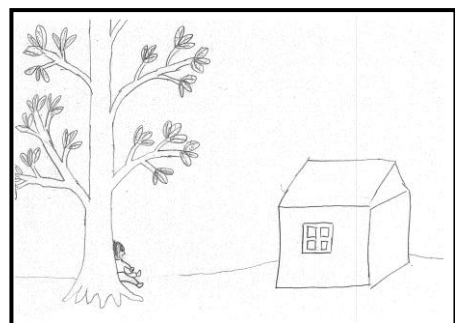


Figure 3-12. 社交群「葉・描写あり」②



Figure 3-13. 希薄群「根・描写あり」①



Figure 3-14. 希薄群「根・描写あり」②

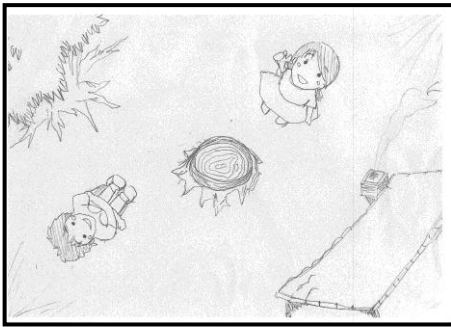


Figure 3-15.
信頼群「切りかぶ・描写あり」①



Figure 3-16.
信頼群「切りかぶ・描写あり」②

第Ⅳ節 考 察

統計的に有意差がみられた項目は、110項目の中で11項目と少なく、「統合性」をはじめとする全体的評定項目には明確な有意差がみられないため、各群の違いを絵の全体から述べることは難しい。しかし、あらためて絵を見直すと、有意差がみられた項目が同時に1枚の絵に含まれていることが認められた。そこで、本章では、各項目が示す特徴を包括して絵を全体的に捉えながら、4群の傾向を述べる。

信頼群では、「人数・2人」が多く、2人の関係が、一緒に本を読んでいる、手をつないでいる、兄妹が遊んでいるなど親密で良好なものである絵が多い。「木の本数・2本」も多く、1枚を除いて「人数・2人」の絵と「木の本数・2本」の絵が一致している点が興味深い。また、「木の本数・3本以上」は、この群において少なかった。これまでの多くの描画研究から、人間は意識に近い部分での自己像を反映し、木はより無意識的な深い層の自己像を表すといわれる。これらのことから、特定の友人には内面を見せられる信頼群では、1対1の関わりが特に安定できると、意識下においても、無意識下においても捉えている可能性が示唆される。

距離群では「人数・3人以上」が多く、複数の人物がピクニック、バーベキュー、野球などをしている関係性がみられるが、棒人間の絵が多く、人物間に身体的触れ合いはなく、ある程度の距離を置いて描かれていることが特徴的である。交流は大切であるが、近づき過ぎず、一定の距離感を保つことが、距離群にとっては自分が意識している以上に重要なことであると考えられる。また、距離群は他の群に比べて、家と幹が画用紙の縁で切断された絵が多い。S-HTPでは切断がHTPよりも起こりやすいので深読みは避け、切断されたものに問題や葛藤が残されている可能性を考える(三上, 1995)。人間の切断はないので不適応状態ではないが、家と幹の切断からは家族との関わりをうまく取れない、強い内的エネルギーを十分に統制できないなど、外界・内界いずれにも、やはり距離の置き方に苦慮している面が伺える。

葉は外界と直接接する部分あり、外界への好奇心と外向性を象徴する(高橋・高橋, 1986)。従って、幅広い友人と多様な付き合いをしている社交群においては、「葉・描写あり」が多く、内面的関係を重視する信頼群においては「葉・描写あり」が少ないことは妥当な結果であろう。信頼群のみにみられた「切りかぶ」については、ひこばえが描かれたものもあり、高橋(2011)が「心的外傷によって自我が傷つけられたと感じながら、無意識のうちに再出発しようと望んでいる」と述べているように、何らかの心的外傷体験を経験し、再生する過程であると考えられる人も信頼群には含まれることが示唆される。そこには、自分の内面を開き、信頼できる友人を得たことも関与しているのではないだろうか。

「全体的陰影あり」は、先行研究には言及がない本研究独自の項目である。これには、夜や暗闇を表現した絵(Figure 3-1)と、特定の意味はなく紙面全体

に陰影を施した絵 (Figure 3-2) がみられた。高橋 (2011) は濃い陰影について、自己防衛の強さ、緊張感、攻撃傾向を示し、行動化を示唆すると述べ、薄い陰影は不安、自信欠如、抑うつ気分などを表すと述べている。「全体的陰影あり」に該当する S-HTP に描かれた人間は、いずれも顔の省略、棒人間、および後ろ向きであり、防衛の強さ、人間関係への不安などを示している。従って、「全体的陰影あり」は、他者への強い不安や緊張とともに敵意をもっているため、過度に防衛的であるが、何かのきっかけで攻撃性や行動化を生じてしまう傾向を示唆すると考えられる。4 群間の比較では、交友関係が円滑な社交群には出現がなく、交流に消極的な希薄群に多い傾向がみられた。

本研究では、樹冠の有無に関らず、「幹」を上下の開閉の組み合わせで分類した。社交群には、樹冠内部で幹上部が開き、下部も開いたまま直接外界と接している「幹・上下開放」が多くみられた。高橋・高橋 (1986) は、幹の開放について「感情と理性が円滑に交流している」と述べる一方で、幹の根元が不明確で根も地面のラインも描かれていない樹木画は、不安定感、自信の欠如を表すとしている。「幹・上下開放」は、感情と理性のバランスが崩れて不安や自信のなさが強い状態と考えられる。社交群は幅広い交流関係を維持しているが、より深い関係に至らないのは、内面を見せることにより不安が高まり、自己のバランスが崩れることを無意識に避けているのではないかと考えられる。

希薄群では「幹・上下開放」は描かれず、「根・描写あり」が多い。高橋・高橋 (1986) は、根を描く対象者は、抛り所を失うのではないかという不安を抱いていたり、衝動や攻撃性を抑圧しようとしていると述べている。希薄群は帰属感や安全感が非常に低いため、何とか安定を得たいと「根」を描くのではないだろうか。また、友人に安心や信頼を抱けないのは、それを裏切られるかもしれないという不安が大きく存在しており、関わり自体に消極的なのは、自らの衝動や攻撃性が表出しないように抑圧しているのではないかと考えられる。距離群も人との一定距離を必要とするが、「根・描写あり」が少ないことから希薄群のように人との関わり自体が不安や衝動を高めてしまうことは少ないと考えられる。

第V節 まとめと今後の研究課題

本研究では、現代青年の未熟化の要因として「様々な世代の多くの人たちと直接のコミュニケーションをもつ経験が乏しいまま成長したためであろう」という三沢（2008）の仮説を検討する意味も含めて、現代青年における、友人との交流態度と S-HTP の描画特徴との関連についての研究を行った。その結果として、子どものように自分の思ったまま絵を描いていくため、三沢（2008）が指摘したように全体のまとまりに欠け、年齢に不相応な未熟さを示す S-HTP が多くの対象者に認められた。しかし、交流態度の異なる群間で統計分析を行っても差はみられなかった。本来、S-HTP で最も重視される「統合性」にも各群の特徴は反映されなかった。これは、従来の研究（三上，1979a；三上，1979b；三沢，1995；三沢，2002 他）に比べて、現代青年の S-HTP の多くに、少ない付加物しか描かない、立体感がなく平面的な絵が多い、家・木・人の大きさのバランスの悪さなど、共通した特徴がみられ、絵の全体的な描き方そのものが大きく変化したためと考えられる。そして、未熟化は対人経験の豊富さ・乏しさに関らず、現代青年を特徴づける心性であると考えられる。この結果は、対象者が認知する両親の養育態度と S-HTP の描画特徴の関連について検討を行った第 2 章においても同様であった。

また、本研究、および第 2 章においては、現代青年の S-HTP の多くに共通する、もう一つの描画特徴がみられた。それは、不安の高さや、内的エネルギーの低下、および社交性の欠如などを伴う抑うつ傾向である。従って、今後、現代青年を特徴づける未熟化と抑うつ傾向について、S-HTP の描画特徴から検討を行っていくことは心理臨床に寄与する上でも重要である。しかし、第 III 節で述べたように、時代背景とともに大きく変化した現代青年の描画特徴、および心理的特徴を従来の S-HTP 評定項目によって捉えることには限界があると考えられる。従って、今後の研究においては、三沢（2002，2008）が提唱する発達心理学的視点に加えて、精神病理学的視点を踏まえ、現代青年の描画特徴を捉え得る S-HTP 独自の描画指標を作成することが必要である。

第 4 章

『異質表現カテゴリー』の作成

第 I 節 問題と目的

I-1. 臨床的に有効な評定項目の必要性

第 1 章・第 II 節の研究史で述べたように、精神医療現場において始まった S-HTP 研究は、近年、教育現場、地域比較研究など幅広い領域での広がりを見せており、対象者や研究目的によって変法も開発されている（武藤，2011，2013；近藤，2006，2008，2009a，2009b，2010，2011，2012 他）。しかし、いずれの研究においても S-HTP の評定は三沢（2002）の 149 の評定項目に基づいている。対象者や研究目的により使用する項目の選択はみられるが、評定項目自体についての検討を行った研究はみられない。三沢（2002）の項目は精神科臨床での豊富な経験に基づいて分類された詳細なものであり、絵の「全体」、「家」、「木」、「人」について、統計的に分析する上で有効である。しかし、その内容について問題点を指摘する研究もみられる。

高橋ら（2007）は「現状では、S-HTP の特徴である各アイテムの統合性や関連性等を評定するための基準が十分に確立されているとは言えない」、「解釈にあたっては、ともすると、バウムテスト、家族画、HTP テスト等の既存の知見を採用し、個別アイテムの分析・解釈するにとどまり、S-HTP の特徴を十分に活かしきれていない」と、149 に細分化された項目を総合的に分析する難しさを述べている。

市川（2011）は、S-HTP の利点について「統合性・遠近感など独自の視点を含み、被検者の内界に関する豊富な情報をもたらす」と述べる一方で、「統合性・遠近感などの評定の難しさに加えて、自由度の高さゆえに描画側面が複雑に関連することに起因する解釈の難しさがある。」としている。

渋川・松下（2007）は、「パーソナリティを総合的に判断する上で、最も重要な判断基準」（三上，1995）とされる統合性について、「三上（1995）は、この「統合性」に関して、「統合的に描かれているか、羅列的に描かれているか」という説明にとどまり、詳細な定義を行っていない」と述べている。

三上（1995）、三沢（2002，2008，2009）、三沢・河津（2012）は S-HTP の大きな使用利点として、絵の全体的評価が可能であることを述べ、それに該当する評定項目として統合性を重視している。しかし、統合性 5 項目についての明確な基準や定義が示されていないため、他の研究者や心理臨床家が用いる場合には評定が困難である。三沢（2002）の 149 項目は詳細であるが、細分化されすぎて絵の全体を捉えることに適しているとはいえない。

例えば、スクールカウンセリングや学生相談においては、児童生徒・学生の問題が学内のみで援助が可能なのか、学外との連携が必要なのかのアセスメントを求められるケースが増加している。そして、あまり時間を要せずに、パーソナリティや病理傾向の有無を捉えなければならない。従って、S-HTP を活用するためには、絵の全体を捉えられる臨床的に有効な評定項目が必要と考えられる。

I-2. 本研究の目的

第2章、第3章で述べたように、筆者は2009年以降、大学生・大学院生を対象としてS-HTPを施行し、分析・検討を行う過程において、現代青年のS-HTPには既存の評定項目では捉えきれない描画特徴が複数みられることに着目した。これらは、HTPやバウム・テスト等、多くの描画テストの先行研究(Bolander, 1977; Buck, 1948; Koch, 1949; 高橋, 1974; 高橋・高橋, 2010; 高橋, 2011他)において、精神病理や逸脱を示す指標として述べられてきた描画特徴(スティック・フィギュア, 透視画, 陰影など)に加えて、複数の視点の混在, 年齢不相応に幼い表現等, 病理を示すとは限らないが, 違和感がみられ, 何らかの問題を示唆すると考えられる描画特徴である。

そこで、本研究においては、「全体、または一部にみられる、1枚の絵としての調和を欠き、違和感を感じる描画特徴」を『異質表現』として定義し、その多様な特徴(視点の混在, 簡略した表現, 用紙の一部しか使用しないなど)を複数の下位項目としてまとめ、S-HTPにおける新たなカテゴリーを作成するための基礎的研究を行うことを第一の目的とする。

また、第1章・第III節でも述べたように、近年、大学生における抑うつ傾向に関して多側面からの報告がみられる(湯川・横田, 2012; 上田, 2002; 横山, 2012他)。筆者は学生相談に従事しており、心理面接を行う学生の大半から何らかの抑うつ症状の訴えがなされ、スクリーニング・テストを施行すると専門的な治療が必要であるレベルに該当する学生が増加しており、医療機関への紹介を行うケースや、既に通院・服薬しているケースも少なくない。筆者がこれまでに収集したすべてのS-HTPの中にも、抑うつ傾向が示唆される描画特徴が多くみられたため、異質表現と抑うつ傾向の間に、どのような関連性がみられるのか、および、『異質表現カテゴリー』は抑うつ傾向を弁別する指標としての可能性を有するかの検討を行うことを第二の目的とする。

第II節 方 法

II-1. 調査用対象者

①2012年1月～2012年7月に、3校の共学・4年制大学の大学生239名を対象として、S-HTPと抑うつ症状のスクリーニング・テストであるBDI-II(Beck Depression Inventory-Second edition)、および他者との交流に関するアンケートを実施した。

②異質表現の抽出と設定、および評定においては、上記の対象者のS-HTPに加えて、第2章・第3章の対象者のS-HTPも用いた。

II-2. 調査用紙

①描画後質問用紙

第2章、第3章と同様の描画後質問用紙を使用した。

②日本語版ベック抑うつ質問票・第2版 (BDI-II)

Beck et al (1996) の原版を、小嶋・古川 (2003) が翻訳・標準化した自己記入式質問紙である。全 21 項目であり、各カットオフポイントにより、極軽症 (0-13 点)、軽症 (14-19 点)、中等症 (20-28 点)、重症 (29-63 点) に分類される。臨床集団における抑うつ症状の重症度の判定の他、一般集団でのうつ病のスクリーニングにも有用である。

尚、調査時点においては、第 3 章の研究に使用した他者との交流に関するアンケートも同時に配布して回答を得ている。しかし、そのデータは本研究の分析には用いなかった。

II-3. 実施手続き

本調査の実施は、調査実施の承認を得られた担当教員の講義時間内に、調査の主旨を説明して、同意が得られた学生に対して行った。調査は匿名で行うため、A4 サイズの画用紙、調査用紙のセット (描画後質問用紙、BDI-II、他者との交流に関するアンケート) に通し番号を付け、同じ通し番号を付けた封筒に入れて対象者に配布した。HB の鉛筆と消しゴムも同時に配布した。質問紙からの S-HTP の描画内容への影響を避けるために、まず A4 画用紙のみを封筒から取り出してもらい、S-HTP を実施した。画用紙を横にして使用するよう伝えた後、「家と人と木を入れて、他は自由に自分の思うように 1 枚の絵を描いてください。絵の上手い・下手はまったく気にしないでください。でも、できるだけ丁寧に描いてください。」と教示し、必ず絵を描き終えてから、調査用紙への記入を行うように伝えた。

尚、調査実施に当たっては名古屋大学大学院教育発達科学研究科倫理委員会に研究計画書を提出して承認を得た。

II-4. 異質表現の抽出と設定

2011 年～2012 年間に、筆者と描画研究に熟知した 2 名の臨床心理学者の協議により、412 名の S-HTP において異質表現と認められる描画特徴を抽出し、異質表現カテゴリーの下位項目を設定した。

第 III 節 結 果

III-1. 有効対象者

①上記したように、S-HTP、調査用紙セットの回収数は 3 校の大学全体で 239 名であった。しかし、結果処理の段階で、三上 (1995) に従い、家・木・人いずれかが欠如した絵を描いた者、S-HTP としての評定が不可能である絵を描いた者、および質問紙に記入漏れや、年齢や性別の未記入があった者、計 14 名を除外した。そのため有効回答者数は 225 名で、有効回答率は 94.1%であった。有効対象者の平均年齢は 20.42 歳 ($SD=1.20$) であり、性別は男性が 57 名

(25.3%) で、平均年齢は 20.77 歳 ($SD=1.48$)、女性が 168 名 (74.7%) で、平均年齢は 20.30 歳 ($SD=1.07$) である。

②異質表現抽出のための有効対象者数は 412 名である。平均年齢は 20.53 歳 ($SD=1.31$) であり、性別は男性が 116 名 (28.2%) で、平均年齢は 20.82 歳 ($SD=1.59$)、女性が 296 名 (71.8%) で、平均年齢は 20.42 歳 ($SD=1.17$) である。

III-2. 異質表現カテゴリーの評定

異質表現の評定は、できる限り主観性を排除するために、筆者と臨床心理学者で 412 枚すべての S-HTP について協議を行い、2 名が合意する 33 の異質表現を抽出した。さらに検討を重ねて、出現頻度の高い特徴、少数であっても描画指標として有効と考えられる特徴などを 20 の暫定項目として設定した。より客観性を期するために、もう 1 名の臨床心理学者を加えて協議を行い、13 項目を経て、共通した特徴を一つの項目にまとめ、反対に一つの項目の中で出現頻度の高い特徴は独立した項目として、最終的に 12 項目に集約した。また、抽象的などで、他者に伝わりにくい項目名についても検討し、明確な項目名への変更を行った。

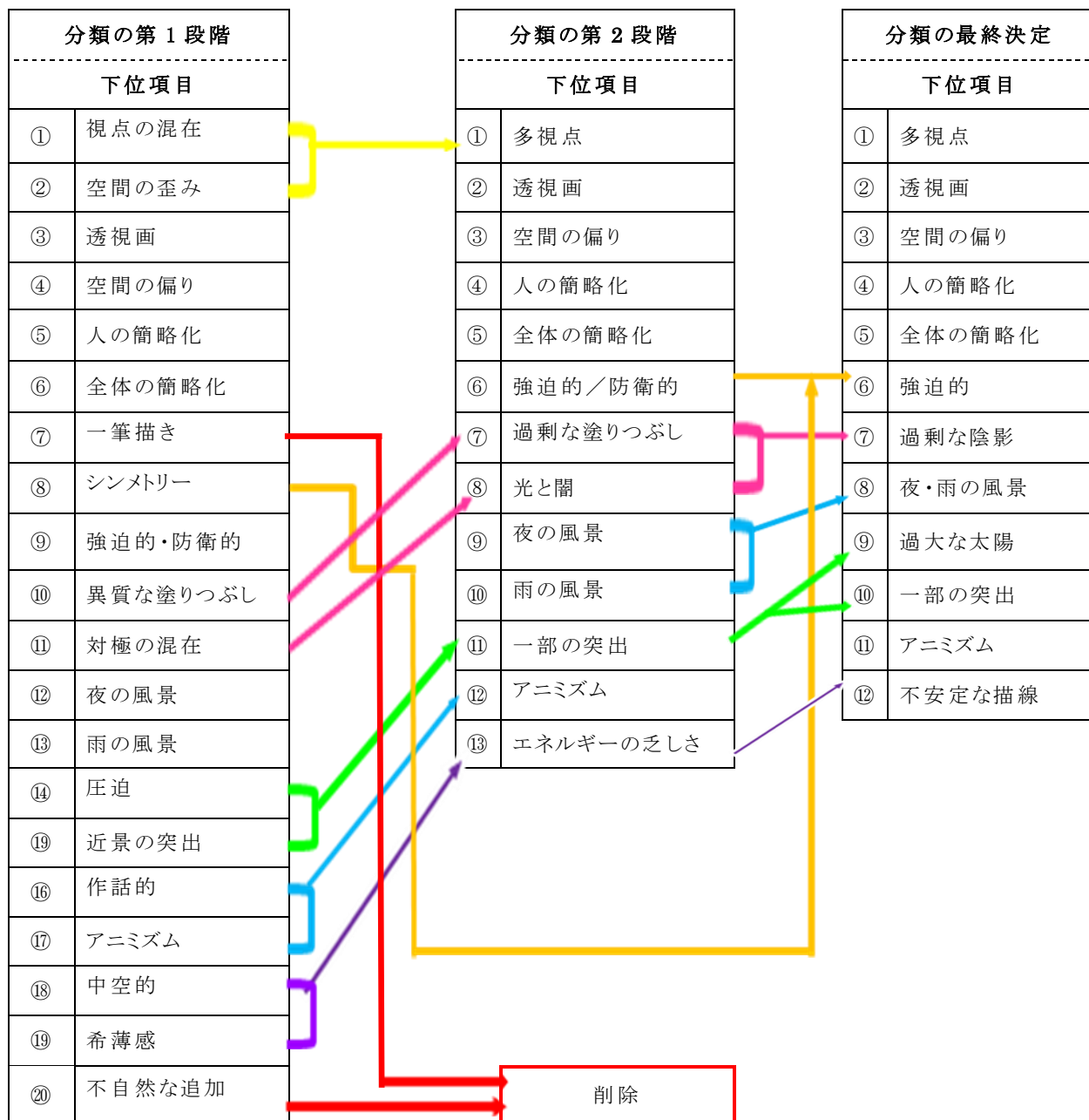
20 項目から 13 項目、および 13 項目から 12 項目への分類過程を Table 4-1 に示す。分類の第 2 段階において、「視点の混在」と「空間の歪み」を「多視点」として一括した。また「圧迫」と「近景の突出」を「一部の突出」として一括した。「中空的」と「希薄感」は「エネルギーの乏しさ」として一括した。「作話的」は「アニミズム」に包含した。また、「異質な塗りつぶし」を過剰な塗りつぶしに、「対極の混在」を「光と闇」に項目名を変更した。出現数が非常にわずかであった「一筆描き」と、評定が主観的になる可能性が高い「不自然な追加」を項目から削除した。

分類の最終決定においては、「過剰な塗りつぶし」と「光と闇」を「過剰な陰影」として一括、「夜の風景」と「雨の風景」を「夜・雨の風景」として一括した。「一部の突出」において、大きな太陽の出現数が多かったので、独立項目の「過大な太陽」とした。また、「強迫的／防衛的」と第 1 段階の「シンメトリー」を一括して「強迫的」とした。「エネルギーの乏しさ」を「不安定な描線」に項目名を変更した。

最終決定した 12 項目の名称と定義、該当者数、および出現率を Table 4-2 に示す。また、12 項目の出現率を Figure 4-1 に示す。

全対象者 412 名において、異質表現がみられる S-HTP を描いた者は 319 名 (77.4%) であり、異質表現がみられない S-HTP を描いた 93 名 (22.6%) の 3 倍以上という高い出現数 (出現率) を示した。また、1 名の対象者に複数の下位項目がみられることが多かった。該当数が 1 項目と 2 項目の対象者が各 126 名 (各 30.6%)、該当 3 項目が 51 名 (12.4%)、4 項目が 16 名 (3.9%)、および 5 項目では 3 名 (0.7%) であった。6 項目以上の異質表現がみられる S-HTP はなかった。

Table 4-1. 異質表現カテゴリーの分類過程



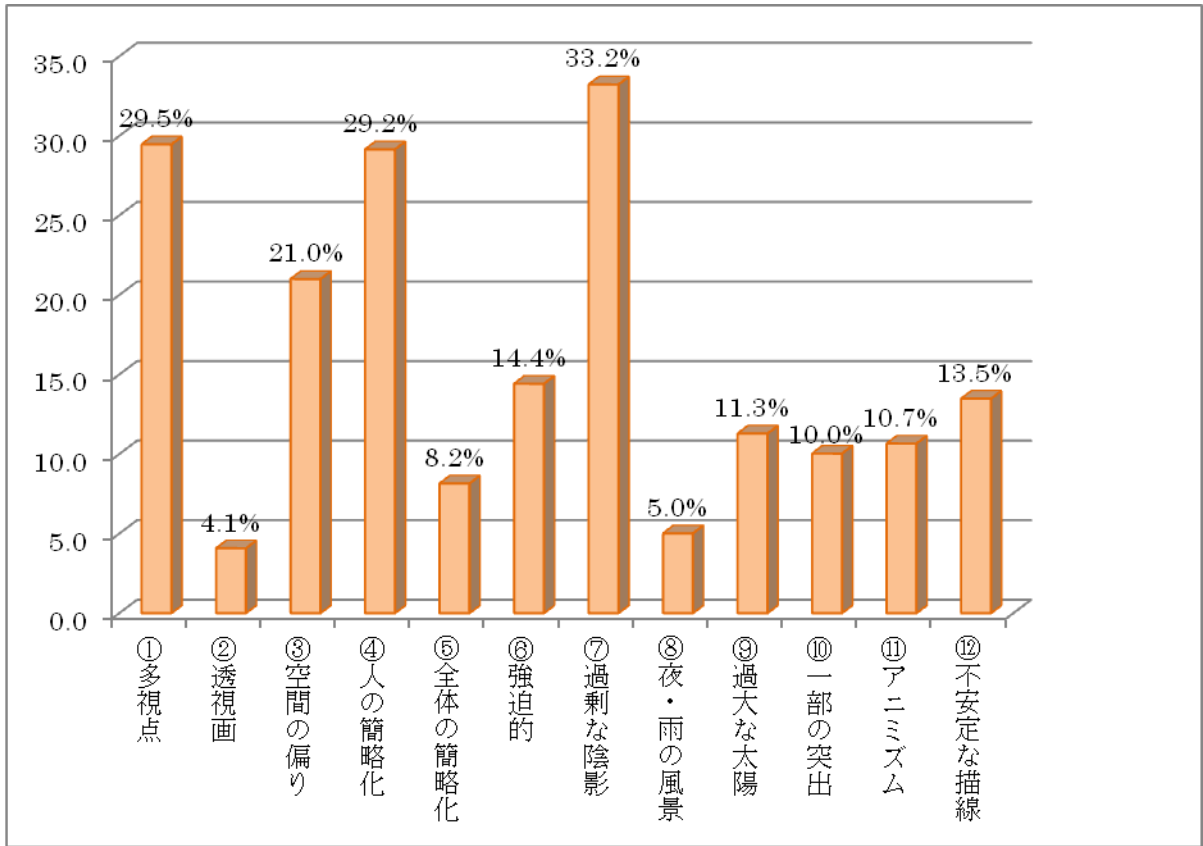
N= 412

Table 4-2. 異質表現カテゴリーの下位項目

下位項目		定義	N	%
		異質表現なし	93	22.6
①	多視点	平面的描写と立体的描写の混合など、複数の視点からの描写。	94	22.8
②	透視画	地上と地下などを同時に描写。アイテムが透けるように重なった描写。	13	3.2
③	空間の偏り	画面の一部のみを使用。全体を使用しても空白が目立つ。	67	16.3
④	人の簡略化	人はスティック・フィギュアだが、他のアイテムは比較的、詳細に描写。	93	22.6
⑤	全体の簡略化	家・木・人いずれも図式化・記号化した描写。	26	6.3
⑥	強迫的	全体、または一部分を非常に規則的・詳細に描写。	46	11.2
⑦	過剰な陰影	全体や一部を過度に陰影づける。アイテムを黒く塗りつぶす。	106	25.7
⑧	夜・雨の風景	夜の場面、あるいは雨の場面を描いている。	16	3.9
⑨	過大な太陽	太陽を他のアイテムよりも過剰に大きく描いている。	36	8.7
⑩	一部の突出	あるアイテムが他に比べて、非常に大きく画面を占める。	32	7.8
⑪	アニミズム	擬人化・非現実的描写。作話的な内容。	34	8.3
⑫	不安定な描線	波線や途切れた線、あるいは筆圧の薄い線での描写。	43	10.4

N=412

※1人の対象者に複数の『異質表現』がみられるため、各下位項目該当者の総数は412にならない。



N=319 (全対象者 412 名から、異質表現がみられない 93 名を除外)

Figure 4-1. 異質表現カテゴリー下位項目の出現率

Ⅲ-3. S-HTP の代表例

異質表現カテゴリー12項目に該当する S-HTP, および異質表現がみられない S-HTP を Figure 4-2-1~4-16-3 に示す。



Figure 4-2-1. 異質表現なし①

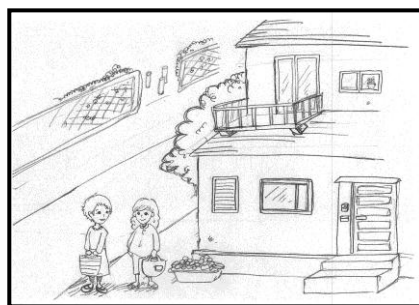


Figure 4-2-2. 異質表現なし②

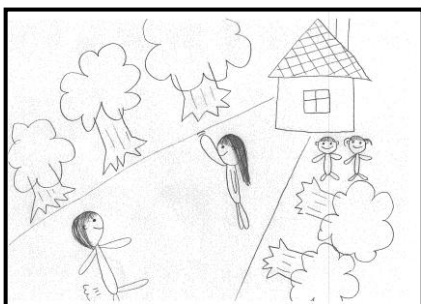


Figure 4-3-1. 「多視点」①

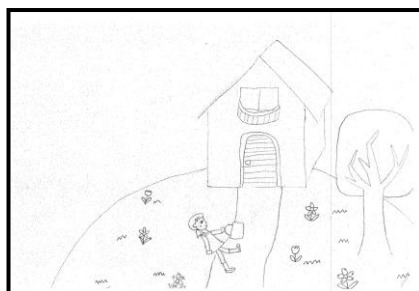


Figure 4-3-2. 「多視点」②

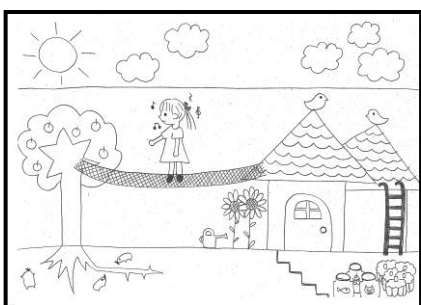


Figure 4-4-1. 「透視画」①

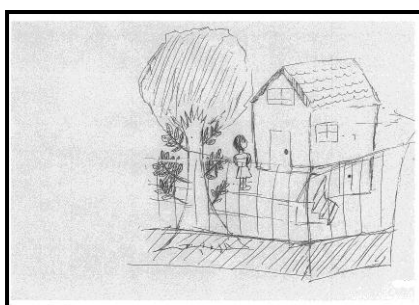


Figure 4-4-2. 「透視画」②

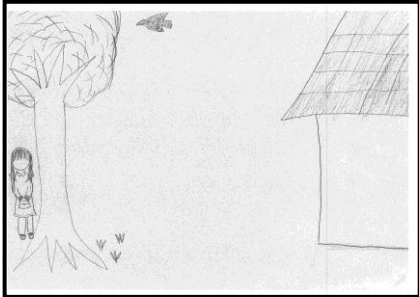


Figure 4-5-1. 「空間の偏り」①

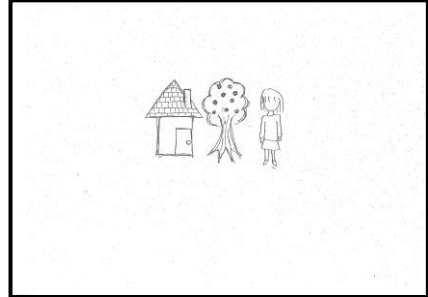


Figure 4-5-2. 「空間の偏り」②



Figure 4-6-1. 「人の簡略化」①



Figure 4-6-2. 「人の簡略化」②

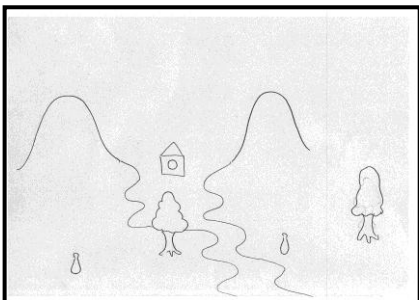


Figure 4-7-1. 「全体の簡略化」①

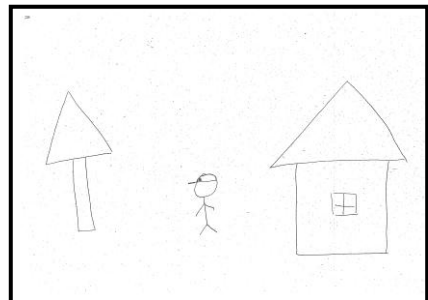


Figure 4-7-2. 「全体の簡略化」②



Figure 4-8-1. 「強迫的」①



Figure 4-8-2. 「強迫的」②

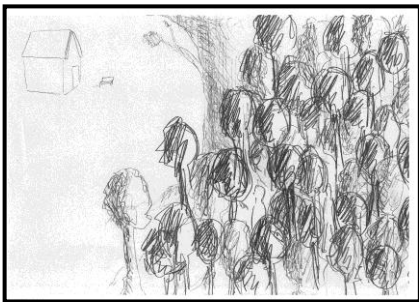


Figure 4-9-1. 「過剰な陰影」①

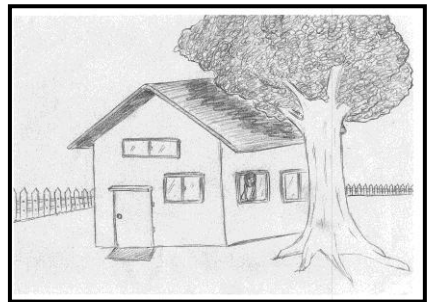


Figure 4-9-2. 「過剰な陰影」②

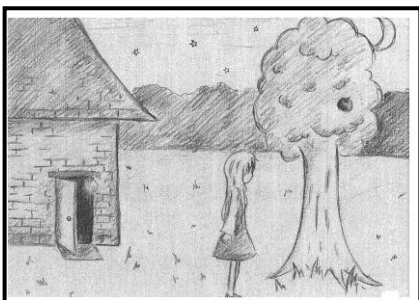


Figure 4-10-1.
「夜・雨の風景(夜)」①



Figure 4-10-2.
「夜・雨の風景(夜)」②



Figure 4-10-3.
「夜・雨の風景(雨)」①



Figure 4-10-4.
「夜・雨の風景(雨)」②



Figure 4-11-1. 「過大な太陽」①

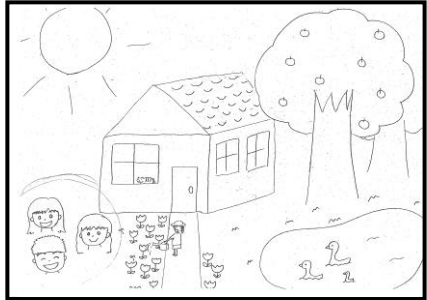


Figure 4-11-2. 「過大な太陽」②

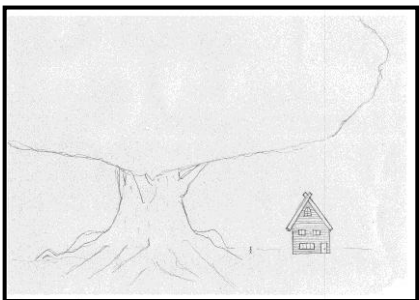


Figure 4-12-1. 「一部の突出」①



Figure 4-12-2. 「一部の突出」②



Figure 4-13-1. 「アニミズム」①



Figure 4-13-2. 「アニミズム」②

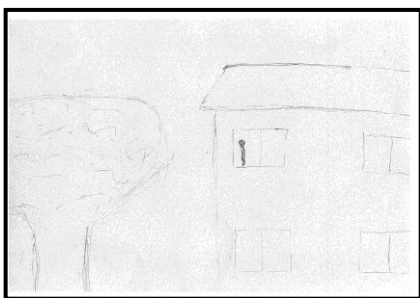


Figure 4-14-1. 「不安定な描線」①

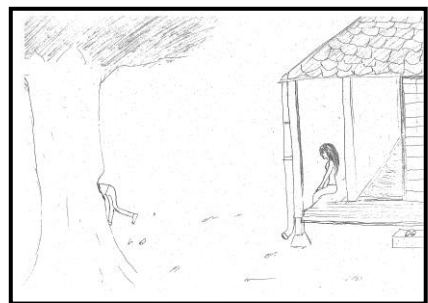


Figure 4-14-2. 「不安定な描線」②

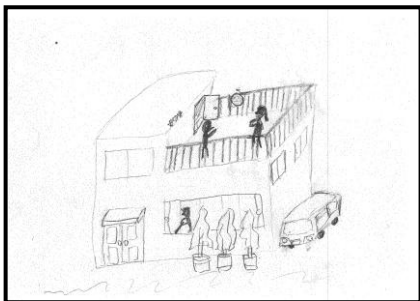


Figure 4-15-1.
「アイテムの塗りつぶし(人)」①

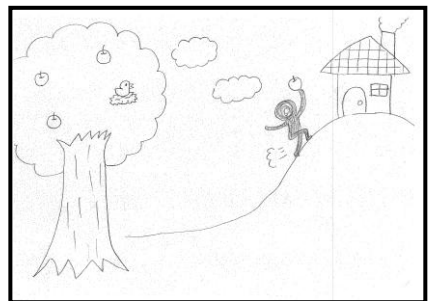


Figure 4-15-2.
「アイテムの塗りつぶし(人)」②

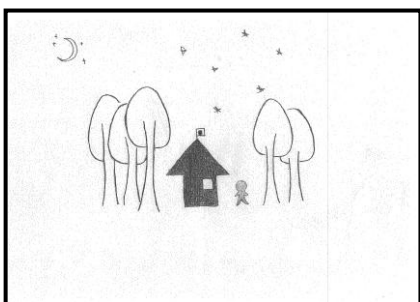


Figure 4-15-3.
「アイテムの塗りつぶし(家と人)」

Ⅲ-4. 異質表現と抑うつ傾向の関係

Ⅲ-4-1. 異質表現の有無による BDI-II 得点の比較

BDI-II への有効回答を得られた 225 名の中で、S-HTP に何らかの異質表現がみられる対象者 166 名（以下、異質あり群）と、異質表現がみられない対象者 59 名（以下、異質なし群）それぞれの BDI-II 平均得点による t 検定を行った。その結果、有意差 ($t(223) = -4.98, p < .001$) が認められ、異質なし群の BDI-II 得点が、異質あり群に比べて有意に低かった。この結果を Table 4-3 に示す。異質なし群の BDI-II 得点は一般レベルであり、異質あり群の BDI-II 得点は軽症レベルである。従って、異質表現は抑うつ傾向が高い対象者にみられることが多いと考えられ、異質表現と抑うつ傾向の関連性を示すものである。

Ⅲ-4-2. 異質表現 12 項目における BDI-II 得点の比較

次に、異質表現カテゴリーの 12 項目について、各項目が示す描画特徴がみられる対象者（以下、有り群）と、みられない対象者（以下、無し群）の BDI-II 平均得点による t 検定を行った。その結果、12 項目の中で「全体の簡略化」，「過剰な陰影」，および「夜と雨の風景」の 3 項目において有意差が認められた。また、「透視画」，「空間の偏り」，「強迫的」の 3 項目においては有意な傾向が認められた。この結果を Table 4-4 に示す。

「全体の簡略化」 ($t(223) = 2.71, p < .01$)，「過剰な陰影」 ($t(74) = 2.69, p < .01$)，「夜と雨の風景」 ($t(233) = 3.92, p < .001$) においては、有り群の得点が、無し群に比べて有意に高かった。また、「透視画」 ($t(233) = -1.76, p < .10$) においては、有り群の得点が、無し群に比べて低い傾向が示された。「空間の偏り」 ($t(223) = 1.67, p < .10$)，「強迫的」 ($t(223) = 1.78, p < .10$) においては、有り群の得点が、無し群に比べて高い傾向が示された。

Table 4-3. 異質表現の有無による BDI-II 得点の比較

異質なし			異質あり			t 値
N	M	SD	N	M	SD	
59	9.63	6.57	166	15.33	9.83	-4.98***

$N=225$ *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

※BDI-II における抑うつの重症度

極軽症 (0-13 点)，軽症 (14-19 点)，中等症 (20-28 点)，(29-63 点)

Table 4-4. 異質表現 12 項目における BDI-II 得点の比較

下位項目	有り群			無し群			t 値
	N	M	SD	N	M	SD	
①多視点	50	14.96	9.60	175	13.51	9.36	0.96 <i>n.s.</i>
②透視画	9	8.44	6.91	216	14.06	9.45	-1.76†
③空間の偏り	31	16.45	10.24	194	13.42	9.24	1.67†
④人の簡略化	44	13.30	9.12	181	13.97	9.51	-0.42 <i>n.s.</i>
⑤全体の簡略化	13	20.62	10.93	212	13.42	9.18	2.71**
⑥強迫的	29	16.72	10.73	196	13.41	9.16	1.78†
⑦過剰な陰影	54	17.19	11.04	171	12.78	8.61	2.69**
⑧夜・雨の風景	8	26.25	5.70	217	13.38	9.22	3.92***
⑨過大な太陽	25	11.60	7.31	200	14.12	9.63	-1.26 <i>n.s.</i>
⑩一部の突出	17	15.41	9.26	208	13.71	9.44	0.72 <i>n.s.</i>
⑪アニミズム	20	16.60	11.51	205	13.57	9.17	1.14 <i>n.s.</i>
⑫不安定な描線	22	16.59	9.00	203	13.54	9.43	1.45 <i>n.s.</i>

N=225 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

※BDI-II における抑うつの重症度

極軽症 (0-13 点), 軽症 (14-19 点), 中等症 (20-28 点), (29-63 点)

III-4-3. 異質表現該当項目数による BDI-II 得点の比較

本研究の対象者には、異質表現カテゴリーの 12 下位項目の中で、複数の項目に該当する対象者がみられた。「該当項目なし」から最大の「該当 5 項目」までを 6 群として、該当項目数により、対象者の BDI-II の平均得点に有意差が認められるかを検討するために、一要因の分散分析を行った結果、有意差 ($F(5, 219) = 4.324, p < .001$) が認められた。6 群の各対象者数と BDI-II 平均得点、出現率を Table 4-5、および分散分析の結果を Table 4-6 に示す。また、6 群の BDI-II 平均得点のプロットを Figure 4-16 に示す。

Table 4-5. 異質表現の該当項目数による対象者の分類

該当項目数	<i>N</i>	M(BDI-II 得点)	<i>SD</i>	%
該当なし	59	9.63	6.57	26.2
1 項目	63	14.44	9.60	28.0
2 項目	64	15.00	9.11	28.4
3 項目	28	18.11	11.53	12.4
4 項目	8	16.13	11.12	3.6
5 項目	3	12.67	11.15	1.3

N=225

Table 4-6. 該当項目数による BDI-II 得点の比較

変動因	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i> 値
群	1714.36	5	342.87	4.14***
誤差	18142.58	219	82.84	
全体	19856.92	224		

N=225 *** $p < .001$

どの群間に有意差が認められるのかを Tukey の *HSD* 検定により多重比較を行った結果、「該当 1 項目」群の BDI-II 得点は「該当項目なし」群に比べて有意に高かった ($p < .05$)。「該当 2 項目」の BDI-II 得点も「該当項目なし」群に比べて有意に高く ($p < .01$)、「該当 3 項目」群の BDI-II 得点も「該当項目なし」群に比べて有意に高かった ($p < .001$)。

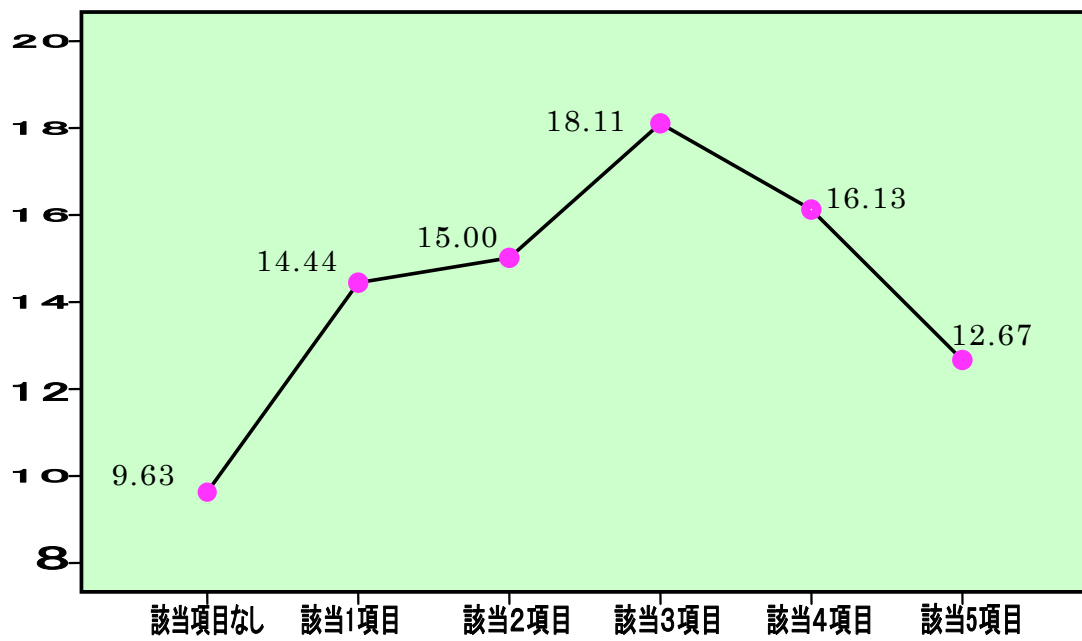


Figure 4-16. 異質項目該当数 6 群の BDI-II 平均得点

第Ⅳ節 考 察

Ⅲ-4-1 で述べたように、 t 検定の結果 (Table 4-3) から、異質表現がみられない対象者は、異質表現がみられる対象者よりも BDI-II 得点が有意に低く、抑うつ傾向はみられないことが示された。このことは、異質表現項目が抑うつと関連することを示すものである。

本節では、はじめに本研究で作成した異質表現カテゴリー12項目についての検討を行う。各項目について、従来の仮説や指標、および実際の S-HTP から捉えた特徴を述べる。次に、出現率が顕著な「多視点」、「人の簡略化」、および「過剰な陰影」を取り上げて、現代青年にみられる特徴との関連性を考察する。最後に、異質表現項目該当数と抑うつの関連性についての検討を行う。

尚、抑うつ指標とされる項目は、「空間の偏り」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、および「夜・雨の風景」である。

Ⅳ-1. 異質表現カテゴリー項目の検討

①多視点 (Figure 4-3-1, Figure 4-3-2)

この項目は、12項目で2番目に多い出現率(29.5%)がみられる (Figure 4-1)。本研究の対象者に限らず、現代青年に多くみられる描画特徴であり、多視点が生じる要因を検討することは、現代青年の描画特徴を理解する上でも重要と考えられる。本研究では、抑うつ傾向とは異なる側面を反映することが示唆された。筆者は多視点が生じる要因として、学童期に受けた美術教育に着目している。本研究の対象者全員が「ゆとり教育」中心の1990~2002年に小学生であり、絵画でも自由な表現が推奨され、写実描写や遠近法等は、やや軽視されていた (井上, 2005)。これらの技術の習得が不十分であれば、多視点の一因となることが考えられる。また、自分の絵の不調和を捉え、何らかの修正を行うという年齢相応の客観性や内省力に欠け、未熟であることも示唆される。

②透視画 (Figure 4-4-1, Figure 4-4-2)

従来の研究では、青年にみられる場合は病理傾向、現実検討力の低下、自己と外界の境界のあいまいさなどを示唆する (高橋, 2011)。しかし、本研究における「透視画」は、自分の思うまま自由に描こうとする子どもの表現に近く、抑うつ傾向とは負の関係が示され、BDI-IIの平均得点の比較 (Table 4-4) では、「透視画」がみられる群よりもみられない群の方が高値であり、軽症レベルであった。現実検討力が不十分なことは明らかであり、青年として適度な内省力が乏しいと考えられる。抑うつは内省が過剰になり、不安や自己否定感が増して生じるものなので、内省力が乏しい対象者の抑うつ傾向が低いことは妥当である。しかし、Figure 4-4-2のように不安や不適応感の高さを示す絵もみられるので、描き手により、未熟化と病理傾向という異なる側面が表現されると考えられる。

③空間の偏り (Figure 4-5-1, Figure 4-5-2)

紙面の一部しか使用しない小さなサイズの絵は抑うつ、自己否定感を示すと

される。本研究では紙面の使い方に関らず、大きな空白に着目した。代表例の 2 枚は、どちらも人の顔を描いていないが、他は丁寧に描いている。描ける部分と描けない部分のバランスの悪さは紙面の使い方にも通じる。BDI-II 得点による比較においても「空間の偏り」がみられる群は、みられない群に比べて抑うつが強い傾向が示された (Table 4-4)。抑うつとともに内的エネルギーの低さや不安、および不適応感を示すと考えられる。

④人の簡略化 (Figure 4-6-1, Figure 4-6-2)

12 項目で 3 番目に出現率が高い項目 (29.2%) である。三上 (1995) は、男女大学生におけるスティック・フィギュアの出現率を 3.5% と報告しており、約 20 年を経た本研究では 10 倍近い値となった。従来、スティック・フィギュアは病理指標とされてきた (石川, 1997)。しかし、本研究では抑うつとの関連がみられないことを考慮すると、現代青年の描くスティック・フィギュアは別の意味をもつと考えられる。現代青年は幼少期からメディアに登場する記号化されたキャラクターに親しみ、一般的な表現として使用しており、人を簡略して描くことに抵抗がないためと考えられる。人以外は簡略した描写がない点に健康度がみられる。しかし、個人の事例的・臨床的な解釈を行う際には、人のみの簡略化であっても病理傾向を考慮する必要がある。

⑤全体の簡略化 (Figure 4-7-1, Figure 4-7-2)

出現がみられた対象者の BDI-II 平均得点は 20.62 で中等症レベルである (Table 4-4)。Gotlib et al (1995) は、うつ病の診断基準は満たさないが、抑うつの自己記入式質問紙で高得点となる成人は臨床的に障害があることを指摘している。従って、「全体の簡略化」は臨床的援助が必要な抑うつ状態を示すといえる。

⑥強迫的 (Figure 4-8-1, Figure 4-8-2)

この項目は、描画研究における病理指標として留意すべき表現である「シンメトリー」を包含する。左右対称の規則性へのこだわりを強迫的心性と理解している。強迫性も抑うつ傾向との関連が認められる (Table 4-4)。「強迫的」に該当する S-HTP には、同時に「過剰な陰影」がみられることが多い。

⑦過剰な陰影 (Figure 4-9-1, Figure 4-9-2)

12 項目で最も出現率が高い項目 (33.2%) である。描画研究では、陰影は不安や抑うつを示すとされてきた (Bolander, 1977; Buck, 1966; Koch, 1949; 高橋, 2011 他)。しかし、その関連を明確に示した研究がないため、否定的な意見も多い。本研究では BDI-II を外的基準として、過剰な陰影と抑うつとの関連が強いことが明らかになった (Table 4-4)。出現率の高さは現代青年における抑うつ傾向の広がりを示唆すると考えられる。上記したように「強迫的」とともに出現することが多く、過剰な陰影づけ自体が強迫性を示すものである。

近年の S-HTP には、Figure 4-15-1~Figure 4-15-3 に示した「アイテムの塗りつぶし」が多くみられ、この表現も「過剰な陰影」に含まれる。塗りつぶすアイテムに過剰なエネルギーを注いでいるようであり、そのアイテムは対象者にとって重要な意味をもつと考えられるが、それが肯定的であるのか、否

定的であるのかは簡単には判断できず、今後の検討が必要である。

⑧夜・雨の風景 (Figure 4-10-1～Figure 4-10-4)

Andrews&Janzen (1988) は、うつ病者の描画には水に関連する表現が多くみられると述べ、中でも雨の表現を病理指標としている。本研究においても「夜・雨の風景」がみられた対象者の BDI-II 平均得点は 26.25 で、中等症レベルである (Table 4-4)。出現率 (5.0%) は少ないが、それゆえに一般成人にはあまりみられず、抑うつ指標として有用であるといえる。

夜の風景は「過剰な陰影」とともに出現することがほとんどである。ごく稀に 4-15-3 のように図と地を反転させ、家や人を塗りつぶすことで夜の表現がみられる。雨の風景では、雨や傘の描写によって人物が隠されてしまう描写がみられ、他者や環境に対する恐怖や脅威が示唆される。

⑨過大な太陽 (Figure 4-11-1, Figure 4-11-2)

子どもの絵には太陽の出現が多くみられるが、成人には少なく、描かれた場合には心理的未成熟を表している (高橋, 2011) とされる。本研究では多くの絵に太陽がみられた。その中で、家・人・木、付加物よりも太陽が明らかに大きく描かれた絵がある程度的人数に達したので、これを独立項目とした。「過大な太陽」は「多視点」や「アニミズム」と評定される絵にも出現することが多い。また、描かれる人物は子どもが多い。BDI-II 得点の比較では有意差はみられなかったが、「過大な太陽」がみられる群よりもみられない群の方が高値で軽症レベルであった (Table 4-4)。従って、「過大な太陽」は抑うつとの関連はみられず、青年として相応な内省力、客観性が乏しいと考えられ、未熟化を示すといえる。

⑩一部の突出 (Figure 4-12-1, Figure 4-12-2)

抑うつとの関連は明確にはみられない。三沢 (2009) は、自己像を大きく描いた絵は自己顕示欲の強さを示すと述べており、人物が突出して大きい場合は妥当であると考えられる。本研究では木や枝の突出が多くみられる。過大な木と過小な自己像と一緒に描かれた場合は、自我肥大と考えられる。

⑪アニミズム (Figure 4-13-1, Figure 4-13-2)

動物の擬人化、非現実的な内容など、子どもの表現に近い描画特徴である。自由な発想で描かれるため独創的な絵もみられる。描き手によっては発想が広がりすぎて、まとまりのない絵となる。この場合には「多視点」がみられることが多い。抑うつとの関連がみられないこと、子どもに近い描写であることから未熟なパーソナリティが示唆される。

⑫不安定な描線 (Figure 4-14-1, Figure 4-14-2)

抑うつとの関連はみられない。しかし、顔のない人物やシルエット像 (輪郭線のみ人間) が描かれることが多く、人に対する共感性の乏しさ、エネルギーの低下や脆弱性が伺えるので、何らかの病理傾向を示す可能性が考えられる。従来の研究 (Andrews&Janzen, 1988 ; 高橋, 2011) においても、波線や破線は不安や無力感を示すとされている。「不安定な描線」がどのような病理と関連するのかを明らかにすることは今後の研究課題の一つである。

IV-2. 現代青年を特徴づける項目

異質表現 12 項目の中で、「多視点」(29.5%)、「人の簡略化」(29.2%)、および「過剰な陰影」(33.2%)は、現代青年において顕著な出現率を示す項目である (Figure 4-1)。そのため、この 3 項目が示す特徴や病理傾向は、現代青年に広くみられると考えられるので、ここに取り上げて考察する。

IV-2-1. 「多視点」

筆者は異質表現の研究を始めた当初、「多視点」について認知的側面との関連がみられると考えていた。Figure 4-3-1, Figure 4-3-2 に示したように、「多視点」における絵の歪みは明らかである。大学生である描き手が完成した絵を見て違和感をもたないのなら視覚認知に問題があるのではないかと考えたのである。しかし、その後、400 枚以上の大学生の S-HTP を見ていく中で、「多視点」と評定される絵は、実に多く存在することを知り、視覚認知の問題を有する青年がそれほど多いとは考えにくく、他の側面からの検討を模索した。

その一つは、描写技術の習得の有無である。上述したように、本研究の対象者は「ゆとり教育」が重視された 1990~2002 年に小学生であり、絵画でも個人の発想による自由な表現が推奨され、写実や遠近法などの基礎的な描写技術は、軽視されたり否定的に捉えられる傾向もみられた (井上, 2005)。写実も遠近法も一定の視点から描くことを基本とするので、これらの技術の習得が不十分であれば、多視点の一因となることが考えられる。

もう一つは、子どものように自分が思いつくままに描いていき、全体を見て不調和を修正するという段階を経ないという傾向である。言い換えれば、「多視点」の描き手は、紙面の一部に、自分の描きたいものを描ける視点で描写するのではないだろうか。そして、次は違う部分に同じように描いていく。この過程で部分と全体を照合することがないので、視点が混在し、不調和な絵が完成することになる。これは筆者の仮説であるので、今後の研究において検討していかねばならない課題である。しかし、この仮説が妥当であるのなら、「多視点」は客観化や内省をするまでに至らない子どもの特徴を示すものであり、現代青年の年齢に不相応な幼児性や未熟化を示唆することが考えられる。

IV-2-2. 「人の簡略化」

石川 (1997) に詳しく述べられているように、従来の描画研究において棒人間やシルエット像は病理指標とされている。しかし、本研究においては「人の簡略化」は抑うつとは関連を示さなかった。これは、現代青年が幼少期からメディアに登場する記号化されたキャラクターを目にしており、自身が人を簡略して描くことに抵抗がないためと考えられる。本研究の対象者における「人の簡略化」の出現率は 29.2% であり、三上 (1995) が報告した大学生におけるスティック・フィギュアの出現率 3.5% の約 10 倍であることも、「人の簡略化」が精神病理を示すとは限らず、現代青年にとっての一般的表現であることを示すと考えられる。しかし、一方で、筆者の臨床経験においては、抑うつの強いクライアントがスティック・フィギュアを描くことは多い。そのため、「人の簡略化」については時代による変化を反映する指標と、抑うつを含めた病理傾向を

示す指標という二つの側面に注意しながら検討を進めていく必要がある。

IV-2-3. 「過剰な陰影」

「過剰な陰影」は本研究の対象者となった現代青年に最も多くみられる描画特徴である。本来、陰影表現には段階があり (Buck, 1966 ; Bolander, 1977), 適度な陰影は立体感や影を表し、絵に調和をもたせる。しかし、それが過剰になって、濃すぎる陰影や黒く塗りつぶす表現は強い不安や抑うつ、および攻撃性などを示す (高橋, 2011)。本研究における「過剰な陰影」は、後者を包含したものである。また、筆者が収集した S-HTP には、Figure 4-15-1~Figure 4-15-3 に示した「アイテムの塗りつぶし」がみられた。この塗りつぶしも「過剰な陰影」に含まれる描画特徴である。高橋 (2011) は「黒色といえるような絵は、(中略) 緊張感、敵意、攻撃傾向を表し、行動化を示唆したりもする」と述べている。

質問紙を用いた抑うつ研究 (坂井・山崎, 2004 ; 鈴木・安齋, 1999 ; 上野ら, 2009) においては、大学生の抑うつ傾向の高さと攻撃性の強さとの関連が明らかにされており、攻撃性は抑うつ状態において高まると考えられている。従って、本研究における「アイテムの塗りつぶし」も対象者の攻撃性を示す可能性が考えられる。家、木、人の中でどれを塗りつぶすかによって、対象者の攻撃性や敵意が何に向けられているかを示唆するのではないだろうか。S-HTP の基本的な象徴に基づけば、家は家庭や家族成員、木は無意識下の自分、そして人は意識下の自分に対しての攻撃性や否定的感情を意味するといえる。もちろん、このような単純な理解に留まるものではないが、“塗りつぶし”という行為自体が、無力感や自責感などを含む葛藤を適切に処理できない対象者の心理状態を表していることは十分に考えられる。

本研究において、塗りつぶしがみられる絵は、他の描写部分からは比較的明るい印象を受ける。しかし、そうした明と暗を併せもつような表現が、表面的には明るくしながら抑うつ感を抱いていることが多い現代青年を特徴づけるとも考えられる。

IV-3. 異質表現項目該当数と抑うつの関連性

III-4-3 で述べたように、1 枚の絵にみられる異質表現の該当項目数 0~5 までの 6 群に分類した対象者の BDI-II 平均得点は、有意差はみられないものの「該当 3 項目」群で最も高かった (Table. 4-5, Figure. 4-16)。また、「該当なし」群~「該当 2 項目」群における対象者の出現率はそれぞれ 30% 近く、「該当 3 項目」群で出現率が低下し、「該当 4 項目」群と「該当 5 項目」群では、さらに低くなっている (Table. 4-5)。このことから 1~2 項目の異質表現がみられることは一般的であると考えられる。

BDI-II 得点が最も高い「該当 3 項目」群の S-HTP (Figure 4-17-1, Figure 4-17-2) では、細部へのこだわりや紙面を十分に使いきれない点から、抑うつに特徴的な“思考の硬さ”が伺えるが、視点は定まったものが多く、他者の目にどのように映るかを意識して描かれていることが理解できる。

しかし、「該当 4 項目」と「該当 5 項目」の S-HTP には、すべて「多視点」が認められ、非現実的な表現も多くみられるため、一見では理解しづらいという特徴がある。PDI 質問紙にも「空にエイリアンが飛んでいる」(Figure 4-18-1)、「銀河鉄道のイメージ」(Figure 4-18-2)、および「現実の世界と理想の世界」(Figure 4-19-1) など独自の説明がなされている。すなわち、「該当 4 項目」と「該当 5 項目」の S-HTP は、自分が思いつくままに描いていき、全体を見て不調和を修正する客観化の段階を経ないと考えられ、描き手の内省が不十分であることが伺える。「過大な太陽」、「アニミズム」を包含する絵も多いことから幼児性も示唆される。従って、異質表現が多すぎる絵は抑うつ傾向を示すとは限らず、むしろ内省力の低下や未熟化を示すと考えられる。



Figure 4-17-1. 異質該当 3 項目①
「空間の偏り」, 「強迫的」,
「過剰な陰影」

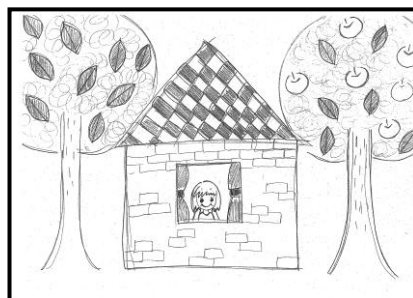


Figure 4-17-2. 異質該当 3 項目②
「強迫的」, 「過剰な陰影」,
「一部の突出(葉と実)」



Figure 4-18-1. 異質該当 4 項目①
「多視点」, 「強迫的」,
「過大な太陽」, 「アニミズム」



Figure 4-18-2. 異質該当 4 項目②
「多視点」, 「過剰な陰影」,
「雨・夜の風景(夜)」, 「アニミズム」



Figure 4-19-1. 異質該当 5 項目①
「多視点」, 「過剰な陰影」, 「雨・夜の風景
(夜)」, 「過大な太陽」, 「アニミズム」



Figure 4-19-2. 異質該当 5 項目②
「多視点」, 「人の簡略化」, 「強迫的」,
「過剰な陰影」, 「過大な太陽」

第V節 本研究の限界と今後の研究課題

本研究においては、異質表現カテゴリーの 5 項目を抑うつ指標とした。しかし、本研究は一般青年の抑うつ傾向を扱っており、異質表現カテゴリーがうつ病の臨床群に対して有効であるのかは明らかではない。従って、今後はうつ病、その他の臨床群においても S-HTP の実施を行い、それぞれの描画特徴について詳細に分析・検討を行うことが必要である。

また、本研究は異質表現カテゴリーの作成と、抑うつ指標としての可能性を検討することを目的とした基礎的研究であるため、対象者の男女差についての分析を行っていない。しかし、異質表現と抑うつ傾向の分析における対象者 225 名の内、男性は 25.3%、女性は 74.7%と偏りがあったため、今後は男女比を均等にした検討が必要である。

また、異質表現は青年期に限って出現する描画特徴ではなく、児童期や思春期、および成人にもみられると考えられる。本研究においては、その第一の段階として青年期を対象とした。今後は年代による描画特徴の分析も必要である。そのためには、一般群の対象を広げて小・中学生、高校生、成人期の社会人に至るまで S-HTP を実施して、異質表現カテゴリーを体系的にまとめ上げていくことが重要な研究課題である。

第 5 章

事例研究

本章においては、筆者が 200X～200X+4 年まで大学の学生相談室、および小学校のスクールカウンセリングにおいて個別に施行した S-HTP の事例を提示する。加えて「事例の概要」、「PDI」、「解釈」、および「異質表現カテゴリーの該当項目数」を述べ、S-HTP に表れた各事例の心理的・行動的問題、特に抑うつ傾向についての考察を行う。

本論文の第 2 章～第 4 章までの研究はすべて青年期の大学生・大学院生を対象者として行ったものである。本章において、青年期の事例とともに児童期の小学生事例を取り上げたのは、以下の理由によるものである。

近年、本邦における「子どものうつの増加」がマスメディアにおいても取り上げられるようになった。言うまでもなく、臨床心理学や精神医学といった専門領域においては、子どものうつの出現率や増加の推移、その心理・行動的特徴、増加要因としての文化・社会的背景、および援助的アプローチなど、複数の視点から多くの報告（傳田，2004，2005；本城・辻井，2000；泉本・下寺，2010；鍋田，2010；齊藤，2011；高岡，2010；田中，2005；辻井・堀，2002 他）がなされている。従って、本研究において、7 例という少数ではあるが、学校不適応や問題行動がみられた児童の S-HTP から抑うつ傾向を捉えることは、学校臨床における心理アセスメントの有用性を示す上で意義があると考えられる。

尚、各 S-HTP の提示については、学生相談事例においては対象者本人に、スクールカウンセリング事例においては対象者本人、または保護者に匿名性と個人情報厳守の倫理的配慮について説明し、提示の了解を得ている。

第 I 節 目的および対象者

I-1. 本章の目的

本章における研究目的は、以下の 2 点である。

①異質表現カテゴリーの中で、一般学生の抑うつ傾向を示す下位項目が、どの程度、事例学生の S-HTP に出現し、抑うつ指標としての妥当性を有するものであるかの検討を行う。

②児童期にあたる小学生における異質表現を評定し、出現がみられる場合には、青年期事例の病理指標と同一の意味を持つのかを分析し、異質表現カテゴリーの児童への有用性についての検討を行う。

I-2. 事例対象者

学生相談室における事例は大学生と大学院生であり、筆者が継続して心理面接を行った学生、および自らの希望により心理検査とフィードバックのみを行った学生 9 名である。いずれの学生も主訴は概ね抑うつ症状であり、BDI-II⁴に

⁴ 9 名の学生の中で、2 名には BDI-II を施行していない。

よるスクリーニング・テストでも中等症，または重症レベルに該当した。抑うつに加えてリストカットやオーバードーズなどの行動化を示したり，パニック発作などがみられる事例，および精神科や心療内科に通院・服薬している事例も含まれている。登校はしているものの，学生生活への不応や長期休学者もみられるので，本研究においては，学生相談事例を臨床群として検討を行うこととする。

また，小学校における事例も，筆者が継続して心理面接を行った学校不応，自傷行為などがみられる児童 7 名であるが，その背景に保護者のネグレクトを主とする養育環境の問題が存在する事例が多い。そして抑うつ症状や不安障害などがみられる事例も少なくない。

尚，各事例の S-HTP に出現した異質表現項目の中で，第 4 章において抑うつ指標とされた項目はイタリック体で表記する。また，本文中，学生相談事例で「Th」，スクールカウンセリング事例で「SC」と表記したものは筆者を示す。事例の父親は「Fa」，母親は「Mo」で表記する。

第Ⅱ節 学生相談事例

(事例 A ～ 事例 I)

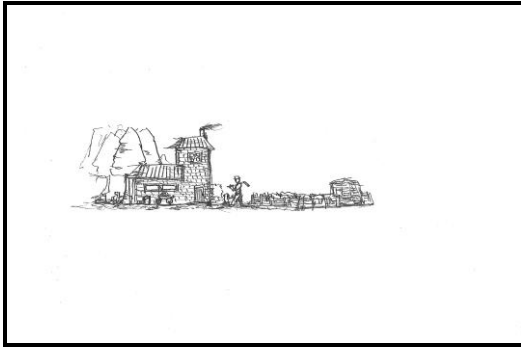


Figure 5-1. 事例 A

【概要】

19歳⁵・男性・大学1年生。200X年6月施行。その1週間前から継続の心理面接を開始した。

高校時代は美大志望だったが、恋人と他の男性とのセックスを目撃したショックから保健室登校となる。受験にも身が入らず美大は諦め、女性不信に陥る。他校の女子大生と付き合い始めるも、一方的に別れを告げられ、女性不信が強くなる。保健室の看護師に勧められて継続面接を開始した。少年期に Fa の家族への暴力やアルコール依存問題で両親が離婚。「よく考えると女性不信の前に人間不信がある」と語った。2回目の面接で S-HTP と BDI-II を施行。BDI-II は 23 点で中等症レベルであった。

【PDI】

人は牧場に一人で住んでいる 60 歳くらいの老人。牧場主。仕事を終えて家に帰っているところ。(右側の柵の中は)何かわからないけど家畜。(左側の木は)描いてないけど、ずっと森が広がっている。(木の下に描いたのはのは)切られた切りかぶで斧が刺さっている。ゴッホか何かの画家で、淡いタッチで働いてる人を描く人がいて、そういう感じ。日本ではなくヨーロッパ・・・フランスかな？田舎で自給自足をしている 1800 年代くらい。

【解釈】

美大志望ただただあってタッチは上手いが、寂しい印象を受ける。かなり小さく描きこんでいるのも不安感や緊張感の表れであり、煙突から昇る黒い煙も不安の象徴であろう。空間象徴的に過去を示す左寄りに全体が描かれており、描かれた年代も昔で、A が失恋だけでなく、幼少期の外傷体験にとらわれていることが伺える。牧場主は老人であり若々しい生命力やエネルギーが感じられない。(木の下、家の左横に小さく描かれている)斧が刺さったままの切りかぶは失恋の痛手を抱えたままの A の自己像と考えられる。

【異質表現カテゴリー該当項目】

空間の偏り／強迫的

⁵ 学生相談事例，スクールカウンセリング事例のいずれにおいても，継続して心理面接を行った各事例の年齢と学年は，面接開始時のものである。

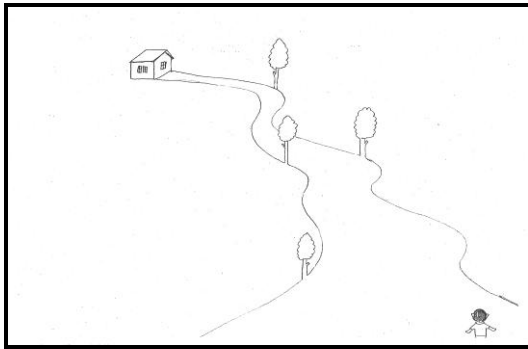


Figure 5-2. 事例 B

【概要】

23歳・女性・大学院生。200X年6月施行。BDI-IIを同時に施行。27点で中等症。心理検査のみを希望した。

うつ病で心療内科に通院しており、抗うつ剤、精神安定剤、および睡眠導入剤による投薬治療を行っていた。高校時代に2年間いじめられたことからリストカットを始めた。「大学院に入学してからは煙草で腕を焼いてしまった」と自傷行為についても語る。

【PDI】

<これは全体にどんな場面でしょうか？> 5歳くらいの男の子が迷子になっていて、家を見つけて、今から歩いて帰ろうとしている。本当はもっとワーツと(たくさん)木が茂っている。<他にはどうですか？家とかは？> 都会じゃなくて、何にもない感じのところ。家は本に出てくるような木の小さちゃい家。<時代とかは？> かなり大昔。グリム童話くらい。<それは外国っていうことでしょうか？> この世にある感じではない。<この男の子は家に帰ろうとしてるんですね？> 孤独。すごく。家が遠い感じ。<この子は家に着けそうでしょうか？> たどり着けたらいいなあ・・・と。<他には何か想像することはありますか？> 夜です。これ。10時(22時)は回ってる。<この子はどのようにして迷子になったと思います？> 1人で遊びたくて、遊んでたら迷子になった。

【解釈】

性別は逆であるが、迷子になった5歳の男の子は、おそらくB自身の投影であろう。この世にないような小さな家は、男の子からはたどり着けるかもわからないほど非常に遠いものである設定で、男の子の孤独は、B自身の幼少期の家族との関係を示唆すると考えられる。Bは心理的に受容された経験が乏しく、対象への適切な愛着を獲得できないまま成長したことが伺える。そのため、自己否定感が非常に強く、自傷行為を繰り返すのであろう。絵の中の右下隅の男の子は無防備で、果てしなく大きな何もない道に圧倒されている印象を受けるが、B自身、現実生活に圧倒されて、どのように対応すべきかを思考できる検討力が低下していると考えられる。また、この絵は見ただけでは陰影や塗りつぶしもなく、夜とはわからないが、PDIでBが夜であることを明言している。夜を設定してS-HTPを描く者は抑うつ症状がかなり重い状態であることが多い。

【異質表現カテゴリー該当項目】

空間の偏り/⑨夜・雨の風景/一部の突出(道)

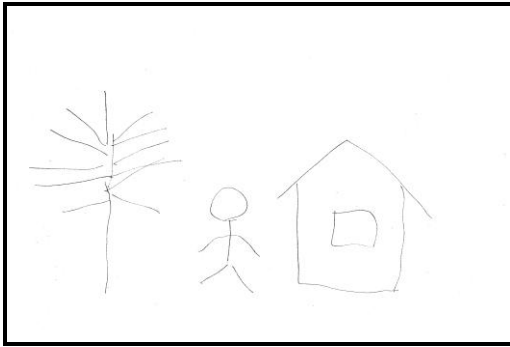


Figure 5-3. 事例 C

【概要】

25歳・男性・大学院生。200X年7月施行。BDI-IIを同時に施行。29点で重症レベル。200X-1年3月～200X年11月まで不定期の心理面接，200X年12月～200X+1年3月まで定期的な心理面接を行った。

200X-1年3月に予約なしで相談室を訪れ，人間関係が非常に希薄であることや研究の方向性が定まらないことを話す。表情や感情をまったく伴わない話し方がやや病的であったので，Thから継続面接を勧めたが，Cは「翌週や翌々週の予定がわからない」という理由で予約は拒否した。その後，相談室が空いている時に時折来室して面接を受けるようになるが，予約は拒否を続けた。これまでの生き方をすべて否定しており，家族とはほとんど連絡を取っておらず，希薄な関係であった。これは両親が新興宗教の信者であり，Cも幼少期から望まない信仰を強制させられたことに起因している。200X年12月にはじめて予約を入れて定期的に面接を行うようになり，Moへの感情を吐露する，泣くようになるなど，感情を少しずつ表出できるようになった。

【PDI】

<どんな場面ですか？>家と木と人と(教示で)言われたので描いただけで，特に意味はありません。何も考えずに言われたものを描いた。<家，木，人それぞれの特徴とかは何かありますか？>ないですね。<人の性別とか年齢とかはどうでしょう？>わかりませんね。ただの人。

【解釈】

Cとの不定期な面接の過程で，感情を表すことのないCの内面を理解できないものかとS-HTPを施行したのであるが，あらためて，Cの自己否定感の強さや，家族や他者，および社会との関わりを形成することの困難さを，Cの語り以上に顕著に示した結果となった。この時期のCは，まず自分自身や他者，環境への興味・関心がほとんどない状態であり，心的エネルギーの著しい低さが示されており，明らかに抑うつ症状が認められる。

【異質表現カテゴリー-該当項目】

全体の簡略化／不安定な描線

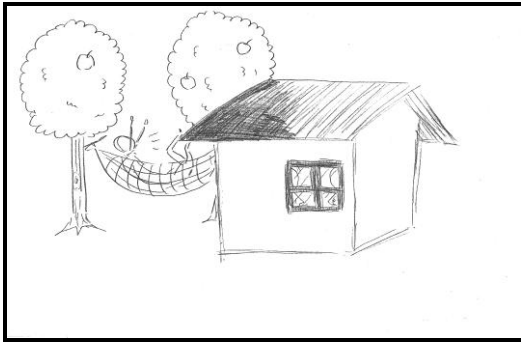


Figure 5-4. 事例 D

【概要】

19歳・女性・大学生。200X年12月施行。200X年11月～200X+1年3月まで定期的な心理面接を行った。

自分は悪い人間で、人の人生をダメにしてきたと語る。中学・高校時代に友人にいじめを行い、転校や保健室登校にしたので、自分が幸せになれるわけがないと言う。セックスが嫌いでキスや抱きしめられるだけがいい。プライベートに介入されるのが嫌で、親しい人でも自室には入れず、知り合いには当たり障りのない話しかしないなど防衛的である。

【PDI】

憧れのハンモック。〈この人の性別は？〉性別はなし。この家の人じゃなくて遠くから来た人。疲れててハンモックを見て寝てしまった。〈この家の人？〉いるけど、中にこもって出てこない。〈この人の年齢？〉おおらかなおじいさんで60くらい。〈家？〉本当は屋根を全部塗ろうと思った。小っちゃい家。人間の大きさから比べても小さい家。〈この家の人？〉こっちもおじいさんかな？妻に先立たれてかわいそうだから（老人同士で）友達になるといい。〈木？〉リンゴかな？3mくらい。この家の人、住み始めた時に植えた。〈この後は？〉もう遅いし「泊めて」って言いそう。（住人は）相当嫌がりそう。「妻の遺品に触るな」とか言う。〈窓の枠を何回も描いてけど？〉うちのトイレの窓と同じ。うちは全部、二重の窓だけど、トイレだけは「はめごろし」で、絶対に開かない。黒い枠で。

【解釈】

一見、のんびりしているようだが、よく見ていくと、Dの防衛の強さが表れている絵である。家にはドアがなく、人とのコミュニケーションへの拒否、不安や恐怖を示唆する。唯一の外界との接点である窓も、窓枠を何度も塗り重ね、「はめごろし」と表現している。Dの人間関係は相当に表面的なものであり、それも用心に用心をかさねて、怯えながら周囲と関わっていると考えられる。はじめは性別不明であり、途中から男性になったハンモックの人はのんきで少し図々しいイメージで、これはDにとっての他者、特に男性の象徴であろう。描かれてはいないが、その侵入を嫌がる住人の方に、D自身は投影されていると考えられる。木には実が描かれ、Dには、恋愛よりも幼い愛情を求める未熟さがあり、幹のうろからは、何らかの外傷体験を受けた可能性がある。

【異質表現カテゴリー該当項目】

人の簡略化／強迫的／過剰な陰影

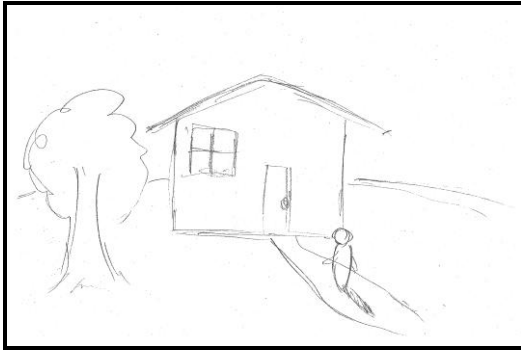


Figure 5-5. 事例 E

【概要】

24歳・男性・大学院生。200X+1年5月施行。同年4月にBDI-IIを施行。24点で中等症レベル。200X+1年4月～9月まで継続して心理面接を行った。

数年前から精神的なストレスが身体症状として出現。極度の緊張から体がつる、死の恐怖を伴う過呼吸などが起こった等。授業中に、自分がみている場面に現実感がなくなり、自分はおかしいという不安が急激に増加した(離人感あり)。パニック発作と広場恐怖も訴えた。元々、深刻に考えがちで人の態度がいつもと少し違うと嫌われたのではないかと考え、心療内科を受診し、抗うつ剤などを服用していた。

【PDI】

<どんな場面ですか？>人が家に帰るところ。<何を？>わからないけど、1日を終えて帰る時間は夕暮れくらい。<どんな人？>僕でもないし、僕の知らない人。<性別？>たぶん男。<年齢？>全然考えてなかった。<他には？>たくましい人。僕より年上なのは確か。<これ(人の足元)は？>影が付いている。<家？>木のお家。<大きさ？>ログハウスくらい。<中に人はいますか？>たぶんいない。<木？>植えてるわけじゃなくて、元々そこにある木。大きすぎも小さすぎもなく、でも葉っぱは緑色。<樹齢？>30年くらい。<この線は？>丘のイメージ。これは道。立地的には高いところ。<他には？>夕方くらい。中には誰もいないけど家には電気がついてる。<家の中は明るい？>そうですね。<この人の気分は？>わりと感情がない感じ。ただ黙々と。

【解釈】

全体的に一見して不安や抛りどころのなさが感じられる。描線が安定しておらず途切れがちである。家は平面的。窓とドアは一応描いてあるが、頼りない感じであり、ドアは下方が消えている。人との関わりを避けたい、あるいは苦手な気持ちが強いと考えられる。ドア、人、木すべて下方が消えているように欠けてしまっている特徴や人が引きずっている影は強い不安を象徴するものであり、非常に不安定で精神病理を有する状態である。

【異質表現カテゴリー該当項目】

透視画／人の簡略化／不安定な描線



Figure 5-6. 事例 F

【概要】

20歳・女性・大学生。200X+2年10月施行。心理検査のみを希望した。

授業課題や人間関係に疲れており、自分の気持ちがよくわからないので、心理検査を受けようと思ったと語る。後述するが、S-HTP から子どもの頃の外傷体験が伺えたので、フィードバック時に「子どもの頃に何か傷ついた経験はありますか？」と尋ねると、泣きながら、F が中学生の時に、高校生の兄に何度も暴力をふるわれたこと、兄に気を遣った両親からはかばってもらえなかったことを語った。

【PDI】

＜どんな場面？＞青空がきれいな日で、遊んで帰ってきたところ。2人で手をつないで帰ってきてる。＜人はどんな人？＞家に関係のある人。20代後半の女性で優しい人。笑顔がかわいい人。幸せそうな感じ。＜手だけ描きある人は？＞この女性とすぐく仲のいい人。性別は特になし。もしくは自分（この女性）の子ども。2人で出かけて風船をもらって帰ってきた。＜木は？＞家より大きい。特に種類はないけど、青くてきれいな葉っぱが出てくる。根っこがゴツゴツ出てきて、座れて、おうちの人がそこでご飯を食べられるような。＜この家は誰の家？中には誰がいる？＞2人の人物どっちかの家。2人ともよく来てる家。中に人はいないけど、後々、帰ってくる。＜他には？＞幸せそうな感じにしたかった。

【解釈】

絵が上手いので、一見は、ごく自然に見えるが、よく見ると家・木・人それぞれに一か所ずつ気になる点がある。木については、左下の大きめのうろから子どもの頃に強い外傷体験があると考えられる。家は大ききのバランスを考えると、左側に続いている方が自然であるが、木で遮断されたように見える。また木・人に比べると描き方に丁寧さがなく、F が家族をあまり好意的にとらえておらず、自分にとって重要なものとして位置づけていない可能性が考えられる。次に、人と人の手のつなぎ方が不自然である。PDI においても、F は手をつないだ相手に関しては曖昧な発言をしている。現実生活では誰かと安心し、信頼できる深い人間関係を求めていることが伺われるが、手のつなぎ方に示されるように、他者との交流が苦手であったり、臆病な面があり、満たされる関係を築くことが難しいと考えられる。描写力のある者が描かない、あるいは描けない部分には着目すべきである。

【異質表現カテゴリー-該当項目】

強迫的／過剰な陰影

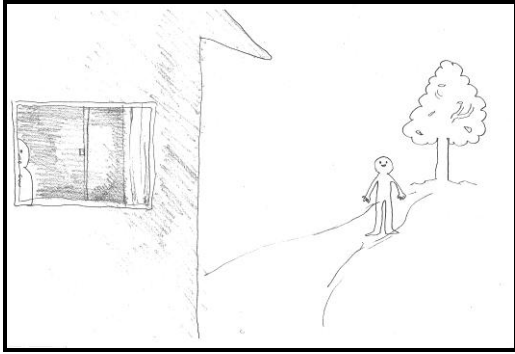


Figure 5-7. 事例 G

【概要】

29歳・女性・大学院生。200X+3年4月施行。BDI-IIを同時に施行。34点で重症レベル。翌週から継続面接を開始。4回目までは熱心に毎週来室したが、以降、予約と無断キャンセルの繰り返しが続き中断となった。両親との関係が悪く、大学進学以来、一人暮らしで「親とは関りたくない」と語る。今後、社会で生きていけるのか不安。幼少期から恐怖心が非常に強く、特に人と関わるのがとても苦手であった。

【PDI】

<どんな場面？> (立っている)人がただ空を見て「いい天気だ」と思っている。家の方、私の視点からは遠くの木を見ている。本当は大きな木を描きたかったけど、小さくしか描けなかった。家の中は暗くて、半開きのカーテンから外を見ている。本当は外に出たいのに、そこまで行けない。後に描いた(家の中の)人の方が自分の今の状況。外に出たいし、出ている人が羨ましい。家は大きくて安心。イメージとしては木の方から光が当たってるので、家はほとんどシルエットだと思う。けっこう暗い所にいる。<立ってる人は？>元気な時の私かな？弱い光なら元気な時は浴びられる。この木は実がならない。思い切り枝を広げて実のなる木を描きたいけど、やっぱり小さい木。いつも(葉が)覆い茂っているか密集している。面白味がない。彩りがない。みんなに認識してもらえないような葉なら茂ってはいるけど、周りから素通りされるような木。「これが」と選ばれるようなものじゃない。

【解釈】

両方とも自己像だと言う立った人、家の中の人いずれも簡略化して性別や衣服などG自身の個性を示すものは何も描いていない。抑うつによる自尊感情の低下に加え、自分を主張できるアイデンティティの獲得に失敗したことが伺える。陰影が強い家は「暗い所」でもあり、「安心」でもある。両親を拒否しているが、育て直しを希求する気持ちも垣間見える。最も言及が多い木は、Gの意識下の自己像をよく表している。「覆い茂る葉」は、G自身の抑圧や、周囲からの圧力と考えられ、枝を広げて実を成すという心理的成熟に至らず、いつまでも脆弱な「小さい木」のままなのであろう。「素通りされる木」という表現に強い自己否定感が示されている。Gの絵に特徴的なのは“光と影”の対極な表現である。こうした描き方をする者には、現状(暗い部分)への不適応感が非常に強く、理想の世界(明るい部分)への逃避や固執がみられることが多い。

【異質表現カテゴリー該当項目】

人の簡略化／過剰な陰影／一部の突出(家)

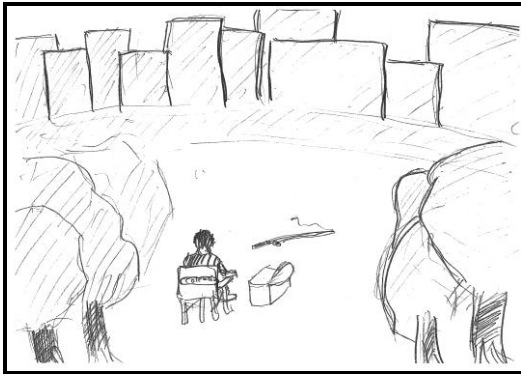


Figure 5-8. 事例 H

【概要】

27歳・男性・大学院生。200X+4年5月施行。BDH-IIを同時に施行。20点で中等症レベル。

入学から1か月を経て、学校生活に慣れて落ち着いた部分と、研究や将来について不安な部分がある。心理検査には以前から興味を持っていたので、この機会に受けてみたいと自分から受検を希望した。

【PDI】

<全体的にどんな場面ですか？>山にある川で釣りをしているところ。川の向こう岸はビルや団地などが建ち並んでいる。<時間とか天気とかは想像できますか？>日曜の昼か、平日の夜の設定。<どちらかといえば、どちらでしょうか？>うーん・・・日曜の昼ですね。<この人の性別や年齢とか、特徴は？>自分自身で27歳。学生。釣りをしている。<ビルや団地について、もう少し説明してもらえますか？>大きいビル。大きい団地。九龍城跡みたいな。(そこに)人はたくさんいる。夜は飛行機よけの赤いランプがたくさん点いている。<木はどんな木でしょうか？大きさとか、種類、特徴とか？>山なので木はたくさんある。針葉樹じゃなくて、ふっくら系。サイズ(大きさ)は普通。<他には？>夏ですね。川釣りはしたことがないので、はじめて行った設定で描いた。

【解釈】

「釣りをしている」設定としているが、絵を見る限りでは人も釣り道具も川からは離れており、人は後ろ向きで座っており、抑うつ感や孤独感を示す。家は一軒家ではなく、団地とビルを描いているが、それぞれの特徴を示す付加物や窓などは何も描かれていない。団地もビルも「大きい」と言っており、前面に描かれた木とともにHを圧迫している印象も、反対にHを防衛している印象も受ける。いずれにしても、Hの現状は能動的に活動し、積極的に他者とのコミュニケーションを求めることは困難であろう。自分に自信がなく、現実逃避を望んでいたり、周囲に関わりたいたいと思っても気後れするような気持ちが強いと考えられる。「夜」についての言及が多い点も抑うつ傾向の高さを示唆する。

【異質表現カテゴリー該当項目】

強迫的／過剰な陰影



Figure 5-9. 事例 I

【概要】

27歳・男性・大学生。200X+2年7月施行。IDI-IIを同時に施行。52点で重症レベル。200X+1年5月～200X+3年3月まで継続の心理面接を行った。高校時代から精神科に通院。「うつ病」と診断され投薬治療を継続。卒業後ニートとして過ごしていたが、200X+1年4月に大学入学。同級生より年長でリーダー的に活動することに疲労困憊して面接を希望。3年間の面接期間中、生きていることへの罪悪感と希死念慮が常に存在。頻繁なオーバードーズがみられた。休学と精神科への入院も経験している。

【PDI】

<この絵は全体的にどんな場面ですか？>3人の人が木の下で雨宿りをしているけど、横殴りの激しい雨で意味がない。<人はどのような人でしょうか？性別や年齢とか？>設定とかまったく考えずに(教示で)出てきたものを描いたんで、今見てもイメージはわからない。<木はどうですか？種類とか大きさとか？>かなり大きい木(左)と、それなりに小さい木(右)。でも(右の木も)家よりは大きい。針葉樹ではなく広葉樹。葉っぱの広い木。描かなかったけど、実がなってる。リンゴか何かを描こうと思った。<描かなかったのはどうして？>「描いてもリンゴに見えなさそうだった。<家は誰の家？中に人はいます？>この人たちの家ではなくて、雨が降ってても入れてもらえないような状態。三角と四角で描けるような直線的な家を真っ先に想像した。<他には？>「(左の木の下の)この2人と、(右の木の下の)この人は知ってるけど、近づけない。2人は仲のいい友達か恋人。」

【解釈】

雨は精神病理の指標であるとともに、外的な脅威を表している。Iの生活においては学校、人間関係、うつ病であることなどIを追いつめる現実が重くのしかかっており、Iはそれに対抗する術をもたず、自分を非常に無力で無価値な存在であると捉えていることが伺える。そのため、家・木・人すべての簡略化は、Iの周囲からできる限り距離を取ることで内面に侵襲されることを防衛する姿勢を示すと考えられる。反対に、雨は非常に細かく描いており、物事への無関心と固執の差が大きいいため、人間関係や社会生活への適応は困難である。

【異質表現カテゴリー該当項目】

人の簡略化／強迫的／夜・雨の風景／一部の突出（木）

第Ⅲ節 スクールカウンセリング事例
(事例 J ～ 事例 P)

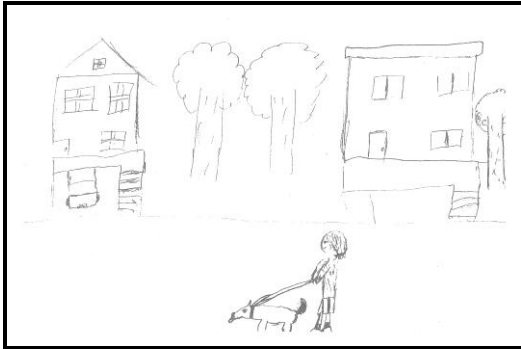


Figure 5-10. 事例 J

【概要】

5年生・男子。200X年6月施行。200X年6月～7月まで心理面接を行った。

怠惰による不登校。気が向くと登校し、また欠席する。両親は離婚。MoとMo方祖父にネグレクト傾向があり、粗暴な行動や万引き等の問題がみられたため心理面接を開始。Jは人懐っこい態度で「イライラすると物を壊したり、壁に穴を開ける」など悪気なく話した。しかし、無断キャンセルが続き中断となる。

【PDI】

<この絵はどんな場面か説明してくれる？>これ(人)は俺。飼ってる犬を散歩させてる。
 <この家は2つ描いてあるけど？>これ(左)は隣の家で、こっち(右)がうち。ここ(間)に木があるのは、本当は後ろが森だけど、森は描けないから木にした。<この、(紙面右端の)ちょっと小さい木は？>本当は(実際には)ないんだけど、俺が保育園の時に誕生日のプレゼントに(苗を)もらったのを植えて、(家の)2階くらいまで育ったけど、隣の人から“邪魔”って言われて切られちゃった。<えー、残念だったね。木も可哀想>うん。<寂しかった？>うん。俺が学校に行ってる間におじいちゃんが“切っていい”って言って、帰ったらもうなかった。<それはお別れもできなくて、よけい寂しかったね>うん。

【解釈】

家は2軒とも土台が不安定で地面にしっかりと建っていない。3本描いた木も非常に不安定で、いずれも紙面の途中に浮いて描かれ、幹には傷がいくつもあつる。Jの置かれている環境は家庭も学校も安定できる居場所ではなく、気持ちの不安定さが示されている。特に、自分の意思とは無関係に祖父によって切られてしまった右端の小さな木は傷が多く、Jの幼少期からの傷つき体験の多さが伺える。この木はJの意識下にある自己像であり、無力感や不安定さとともに、Jが祖父や母には抗えない弱い存在であり、家族からの十分な愛情や保護を得られない抛り所のなさが顕著に示されている。一方、愛犬を散歩させるJ自身は穏やかな表情で描いている。普段は人を茶化したような態度や荒れた行動が多く、問題児と捉えられているJであるが、動物や切られた木に愛着を示す側面や、そこから長じて自分自身が愛されたいという欲求を示している。

【異質表現カテゴリー-該当項目】

多視点／不安定な描線

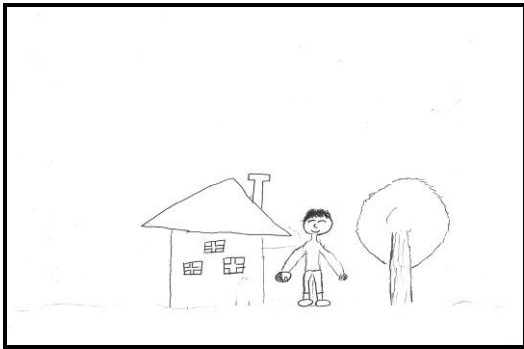


Figure 5-11. 事例 K

【概要】

5年生・男子。200X+1年9月施行。200X年9月～200X+1年12月まで心理面接を行った。

同学年の男子生徒からの暴力・暴言のいじめに悩んでいた。継続面接を行うとともに、いじめについて教育相談主任に援助を依頼した。6年生に進級後はいじめも少なくなり、友達が増えたと明るくなる。しかし、2学期に両親の離婚が決まり、3学期からは他校に転校したため面接は終了となった。

【PDI】

<どんな場面？>何もしない人。ニコニコしてる人。日光浴している。太陽描くの忘れてたけど。<性別は？>男。<何歳くらい？>うーん。わかんない。だって家よりでかいもん。家は秘密基地って感じでいんじゃないくらい。<もう少し詳しく？>自分(K)の家。もしくは秘密基地。どっちもどっち。<中に人はいる？>家族がいる。<木は？>まりもみたいな木。巨大まりもに枯れたの(幹)が刺さったような感じ。5mくらい。1000年の木が枯れて、まりもに刺さって、まりもの栄養をもらいながら成長している。最終的には木が枯れて普通のまりもに戻る。<人の上着は？裸？>(笑)描くの忘れた。ま、長袖ってことで。

【解釈】

人を特定してはいないが、隣の家を「自分の家」と言い、中には「家族がいる」と言っているので、K自身と考えてよいであろう。家を「秘密基地」と言うのはギャング・エイジの時期ゆえとも考えられるが、“戦い”のイメージがあり、ちょうど両親の離婚話が進んでいる時期だったことが関連し、家庭に緊張感や不安を抱いていたと捉えられる。人は上着を描き忘れてたり、年齢をはじめ具体的でなく、投げやりな説明をしており、Kが自分自身を大切に思えず、自己否定感や無力感が強い受動的な状態であることが伺える。木は無意識レベルのKをよく表しており、心理的に非常に枯渇した状態ではあるが、なんとか回復しようとしている。しかし、いくつも描かれた幹の傷が表す傷つき(外傷)体験や、「最終的に木が枯れる」という発言から、回復は簡単ではなく、時間を要することが予測される。

【異質表現カテゴリー該当項目】

空間の偏り/不安定な描線

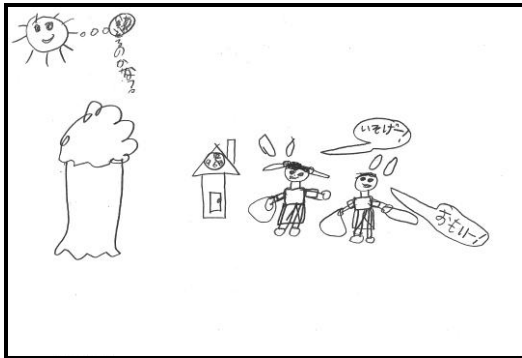


Figure 12. 事例 L⁶

【概要】

3年生・男子。200X+1年6月施行。教育相談主任から心理検査を依頼された。

中核問題は抜毛症。加えて、両親の生活態度にややだらしがない傾向があり、Lに対してネグレクト傾向があるのではないかと学校側の懸念があった。検査時、Lに緊張はなく「絵を描くことは大好き」と楽しんで描いた。最初に家を描き始め「ここに、こうやってドアがあって・・・」と1つずつ言葉で説明しながら描いていくので、PDIは行わず、SCが聞きたい点は、その都度、会話として質問した。Lは会話が好きで懸命に説明するが、語彙力が低く理解しづらい表現も多かった。家の次に「お母さんと僕とお父さんと・・・」と言って人を描き始める。しかし、「やっぱりお父さんは・・・(“ここにいない”というような意味を)」と言って、結局、LとMoが買い物をして家に帰ろうとしている絵になる

【解釈・学校への結果報告】

LのS-HTPは家が非常に小さく、見るからに不安定なことが特徴的であった。人よりも小さな家は家庭的に何らかの問題を抱えていたり、Bにとって安心できる居場所ではないことを示している。また、Faを描こうとして描かなかった(描けなかった)こと、空間図式においては母性を象徴する紙面左側に無意識の自己を表す木を描いていることから、BとMoの密接な関係と、反対にFaとの距離の隔たりが伺える。

SCは教育相談主任・担任教諭に、両親のBとの関わり方のバランスが良くないこと、これは夫婦間の関係性から生じることもあり、Bの抜毛癖は家庭において基本的な安定を得られていない不安や欲求不満から生じている可能性が考えられることを報告した。後日、学校は校長も出席してLの両親とのケース会議を行い、LのS-HTPを見せて、その心理状態の説明を行った。両親はLの絵を見て問題の大きさを実感した様子で、学校側の提案する家庭と連携したLへの援助にも積極的に応じて、養育環境が好転した。

【異質表現カテゴリー該当項目】

透視画／空間の偏り／アニミズム

⁶ 本事例のみ、他の事例の論述と形式が異なるが、スクールカウンセリングにおいて、心理検査による結果報告が効果を示した一例として上記の論述形式とした。

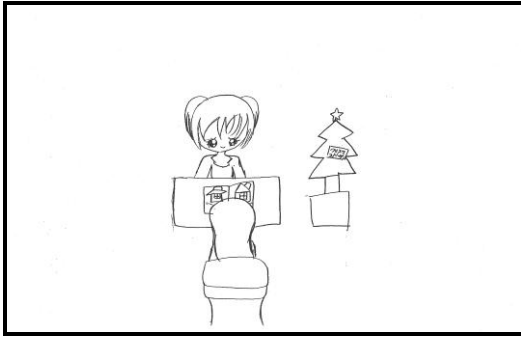


Figure 5-13. 事例 M

【概要】

5年生・女子。200X年11月施行。200X年11月～200X+2年3月まで心理面接を行った。3年時に両親が離婚し、Mo、Mo方祖母と暮らす。学校生活には問題のない生徒であった。しかし、大好きなキャラクター商品を買いたいために祖母の財布から5,000円を盗み、心理的な問題があるのではないかと教育相談主任から心理面接を依頼された。Mは穏やかな生徒で非行に至るような様子はみられなかったが、初回の面接内容と2回目に施行したS-HTPから、家庭における満たされない気持ちと孤独感が理解できた。Mの希望もあり、SCから学校に継続面接の必要性を伝えて了解を得た。

【PDI】

<どんな場面かな？>この人(正面向きの女性)は25歳くらいで不動産屋さんの人。家の物件を、この後ろ姿の人に紹介している。<後ろ向きの人は？>女の人。30歳くらいで、まあ子連れ。<これ(テーブルの上の物)は何？>家の紹介表みたいな。<カタログ？>そう。<この木は？>クリスマス・ツリー。クリスマス・ツリーはバーゲンで買ったんで、ちょこっと安い。<クリスマスの季節？>うん。冬。<お客さんは、どんな家を探してる？>子どもと遊べる庭付きの大きな家。<他には？>このお母さんは離婚してる。このくらい。

【解釈】

家を建物として描かず、印刷物として描いた対象者は、筆者の経験ではMだけである。印刷物としてのサイズも非常に小さく、Mの中で家、すなわち家庭・家族の存在がいかに希薄であるか、守られていない孤独や寂しさが強く伝わってくる表現である。家を探している女性は明らかにMがMoを投影したと考えられるが、探しているのが「子どもと遊べる庭付きの大きな家」であるのは、M自身の強い愛情希求の表れであろう。Mの自己像は、セール品のクリスマス・ツリーとして表現されていると考えられる。ツリーのサイズも小さく、華やかな飾りもなく、BOXに入れられたツリーは、非力で自由がない存在であるMの状況をよく表している。また、季節物ということもあり、Mがいずれ見捨てられるような不安を抱いていることも考えられる。不動産というテーマと、祖母から5,000円を盗んだ行為は、心理的に満たされていないために物理的な代償を求めるMの問題と関連すると考えられる。

【異質表現カテゴリー】

多視点／空間の偏り

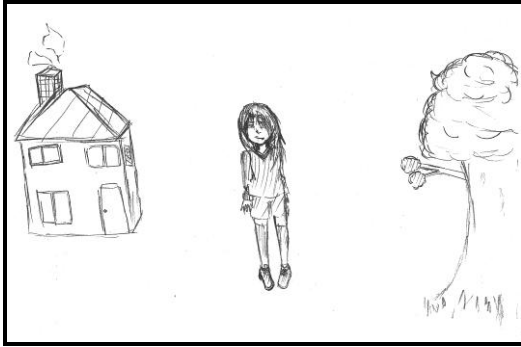


Figure 5-14. 事例 N

【概要】

6年生・女子。200X年12月施行。母子家庭でMoの恋人が家に入出入りすることが嫌で悩んでいるため、教育相談主任から心理面接を依頼され、200X年11月～200X+1年2月まで継続する。

NがMoに「(現在の彼と)結婚はしてほしくない」と伝えると、「知らない」と言われた。Moは4年生頃から、「忙しい」と食事を十分に作ってくれなくなり、今はインスタント食品を食べることが多い。ストレスは親友に話したり、絵を描くことで解消している。指先をカッターで傷つけるなどの自傷行為がみられた。

【PDI】

<全体的にはどんな場面？>この女の子は自分と同じ年でゲームをするために(家に)帰ってる。家は木造建築の一軒家で、窓が多くて階段が横から見える。屋根裏部屋がついてる。<これは煙突？>そう。サンタさんが来れるように。木はでっかくて夏みたいな木。冬っぽいのに、夏みたいに葉っぱがある。<この枝は？>木のイメージが(枝が)いるところから生えてるから描いたんだけど、ひとつだけなのは空しい。冬のイメージ。昼と朝の境目。ここら辺(紙面下部)が林というか、いっぱい葉が落ちてたりするところ、ここら辺(紙面上部)にいっぱい家がある。この家の隣にも家がある。

【解釈】

PDIでは、泣きそうな表情の少女のことはN自身とは言っていないが、描画中に「自分(人)が描けない」、「(自分を描こうと思うが)自分のイメージがない」と発言しているので、N自身と捉えるのが妥当であろう。普段の印象とはかなり違いがあり、それだけ内面の傷つきや葛藤を抑圧して、周囲には明るく接しているといえる。家は比較的、強固に描いており、安定した家庭に守られたい願望が表れている。しかし、「家へ帰ってる」と言うが、家と少女をまったく関連なく描いており、家庭、すなわちMoと関わりたくても関われない状況が示されている。木には夏のイメージと冬のイメージが混在している。ここにも表面的には夏のように明るくしているNと、内面は冬のように暖かみのない環境に置かれたNの両面が投影されている。意識レベルでも、無意識レベルでも自己像が不安定で二極化しているので、今後、解離症状の出現にも注意が必要である。

【異質表現カテゴリー該当項目】

空間の偏り/強迫的/過剰な陰影



Figure 5-15. 事例 O

【概要】

5年生・男子。200X+1年2月施行。2月～3月まで心理面接を行い、次年度も継続の予定だったが、SCの勤務校異動のため終了。

200X年12月にMoとの面接を行った。担任教諭から落ち着きのなさ、私語の多さから発達障害傾向を指摘され、医療機関の受診を考えていた。5年生になって友達との関係が良かったり悪かったりと不安定なので、O自身の心理面接を行うことになる。O自身は、「授業中のお喋りをどうしたらやめられるかわからない」、「他の子も喋っていても、先生からは僕だけが叱られることが多い。1人だけ怒られると、先生を信用できない」と自己コントロールできない困り感や、周囲から理解されず、否定される辛さを語った。

【PDI】

これ(紙面上部の黒いところ)はちょっと不気味だけど、外から人間が森の中に小さな穴を見つけて、穴の中に小さな木たちの世界が広がっている。木がみんな笑っている。この世界では木が人間みたいで、木が住む家(紙面右)も笑っている。これは木の世界の太陽(紙面左上)。みんな笑っている。不幸が起きない。みんな、この世界では、この中では世界中のみんなが仲良く笑って過ごしている。〈この丸いのは何?〉風船。〈なんで風船があるのかな?〉風船は自分でもよくわからないけど、風船飛んでると楽しそうな感じがする。自分で(こんなのが)あってほしいなと思う世界。自分だけの工場とかの絵も、自分で家で描いてたりする。空想して絵を描く時はすごく集中できる。

【解釈】

人間は紙面上部の黒い穴からのぞき込む目だけで描かれている。その目つきは鋭く、黒い穴とともにOが思い描く自由な世界を抑圧している印象を受ける。Oにとっては、この黒い穴と目は自分に制約を強いる現実世界、すなわち学校の象徴のように思え、毎日の学校生活はかなり窮屈で我慢の多いものであることが伺える。空想世界も単に自由なだけではなく、不安定に漂う風船や、煙突から出ている煙にOの不安の強さが表れているようである。黒い穴の塗りつぶしや、樹冠の質感の表現などに発達障害児に多い細部へのこだわりがみられる。また、Oの内的世界は独自の発想や空想に満ちていることが伺え、現実生活に適應することは非常に困難であり、苦痛を伴うことも理解できる。

【異質表現カテゴリー該当項目】

多視点／強迫的／過剰な陰影／アニミズム



Figure 5-16. 事例 P

【概要】

4年生・男子。200X+4年11月施行。同年9月に、クラスでいじめられていたことをMo, および担任教諭・教育相談主任に打ち明け、「バカ」、「死ね」という暴言と暴力を訴えた。診断は受けていないが、発達障害傾向を指摘されている。いじめについても話が一贯しないため、教育相談主任からSCに「少し関わって、意見をいただきたい」と依頼があり、同年10月に1度面接を行った。Pは泣きながらいじめについて延々と語るのだが、言葉と感情が一致しない印象を受け、SCも今ひとつPの気持ちを受け止めきれなかった。そのため、Pの心理状態を捉えるためにS-HTPを施行した。

【PDI】

<どんな場面？>遊びに行こうと思って、Xさんと一緒に家の前でZくんを待ってるけど、Z君が来ない。<この家はPくんの家？>うん。<もう少し説明してもらえる？>階段を上行くと門があつて、これは蔵(1階の中央)で、その横に柵があつて犬を飼ってる。<木は？>これ(紙面右端。犬の斜め上)。<大きさは？>小さい木。<上の方にいっぱいあるのは？>窓。<これは閉まっているのかな？>うん。全部カーテンを閉めてある。

【解釈】

Pの絵に顕著な点は細部(家の表札・玄関ベル・郵便受け等)に至るまでの描写、たまたま真っ黒だという愛犬をはじめ、強い筆圧で塗りつぶされたアイテムと、柵や玄関の門、カーテンなど「守り」を意味するアイテムが多いことである。また、家が大きな位置を占めており、家族に守られ、辛い外界を遮断してほしい気持ちが表れている。しかし、肝心のP自身は家の外にいて無防備な状態である。サイズも小さく、まさに守られていない不安の強さや、自信のなさが明確に示されている。また、木は非常に弱々しく、存在感なく描かれており、無意識レベルでの自己否定感の強さや無力感を示す。Pの発言には曖昧な部分もあり、周囲からは理解しづらい訴えも多いが、Pの心の中は、自分の存在価値を感じられず、攻撃的なものから防衛されたいのに叶わないという苦痛で大きく占められている。また、視点の混在や、細部へのこだわりの強い描写は、発達障害児に多くみられるので、やはり医師による診断が必要である。周囲への不適応から二次的障害として抑うつ傾向も認められる。

【異質表現カテゴリー該当項目】

多視点／空間の偏り／強迫的／過剰な陰影

学生相談事例の大学生・大学院生 9 名，スクールカウンセリング事例の小学生 7 名の S-HTP を提示し，各事例の概要を述べた。以下に，青年期（大学生・大学院）と児童期（小学生）における，異質表現項目の出現数を提示し，抑うつ傾向との関連を中心に，現代の青年期・児童期の心理的問題についての考察を行う。

第IV節 考 察

各事例にみられた異質表現項目と，大学生・大学院生では BDI-II 得点を Table. 5-1 に示す。

Table 5-1. 各事例における異質表現項目の出現数

事 例	異質表現カテゴリー該当項目				BDI 得点
学生相談 (大学・大学院)	A	空間の偏り†	強迫的†		23(中等症)
	B	空間の偏り†	夜・雨の風景***	一部の突出	27(中等症)
	C	全体の簡略化***	不安定な描線		29(重症)
	D	人の簡略化	強迫的†	過剰な陰影**	
	E	透視画	人の簡略化	不安定な描線	24(中等症)
	F	強迫的†	過剰な陰影**		
	G	人の簡略化	過剰な陰影**	一部の突出	34(重症)
	H	強迫的†	過剰な陰影**		20(中等症)
	I	全体の簡略化***	強迫的†	夜・雨の風景***	一部の突出
スクールカウンセリング (小学校)	J	多視点	不安定な描線		
	K	空間の偏り†	不安定な描線		
	L	透視画	空間の偏り†	アニミズム	
	M	多視点	空間の偏り†		
	N	空間の偏り†	強迫的†	過剰な陰影**	
	O	多視点	強迫的†	過剰な陰影**	アニミズム
	P	多視点	空間の偏り†	強迫的†	過剰な陰影**

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

IV-1. 異質表現項目の抑うつ指標としての妥当性

第4章において、抑うつ指標とされた項目は「空間の偏り」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、および「夜・雨の風景」である。学生相談事例においては、9名全員のS-HTPに異質表現項目がみられた。また、抑うつ指標としての項目は8名にみられた。事例DとFを除く7名について抑うつ傾向の重症度の測定はBDI-IIにより行った。その結果、事例A、B、E、Hの4名が中等症レベルに、事例C、G、Iの3名が重症レベルに該当した。

この7名の中で、うつ症状のため精神科、または心療内科へ通院・服薬をしていたのは、B、E、Iである。事例BのS-HTPに出現した抑うつ指標は、「空間の偏り」と「夜・雨の風景」である。事例Iでは、「全体の簡略化」、「強迫的」、「夜・雨の風景」の3項目が出現した。BもIも高校時代からうつ症状に加えて行動化もみられ、医学的にも治療困難なケースであった。IはBDI-II得点でも極めて高値を示している。

事例EのS-HTPには、抑うつ指標の出現はないが、「透視画」と「人の簡略化」がみられる。第4章・第IV節で述べたように、従来、棒人間やシルエット像、および透視画はいずれも病理指標とされており、個人の臨床的な解釈を行う際には病理との関連を考慮する必要がある。Eの描写は、一見して強い不安や不適応感を示唆するものである。また、「全体の簡略化」までは至らないものの、家や木を詳細に描いているわけではない。従って、Eにおける透視画と「人の簡略化」は、病理指標としての側面が大きいと考えられる。

BDI得点で重症レベルであるCのS-HTPには「全体の簡略化」、GのS-HTPには「過剰な陰影」という抑うつ指標が出現した。他の事例のS-HTPにも何らかの抑うつ指標がみられ、本研究での臨床群においては抑うつ指標の妥当性が示されたといえる。

IV-2. 児童における抑うつ指標の検討

スクールカウンセリング事例においても、7名全員のS-HTPに異質表現が出現した。抑うつ指標も事例Jを除く6名にみられた。事例N、O、Pの3名では、複数の抑うつ指標が出現している。

現代において、子どもの抑うつが増加している要因としては、主としていじめ（傳田，2005；高岡，2010）、両親の不和や離婚の増加（辻井・堀，2002）、家庭内での虐待（高岡，2010）、および発達障害（松本，2005；高岡，2010）などが挙げられている。これらの諸要因が複合的に関連し、不適応状態を呈して抑うつ状態に至ると考えられる。

抑うつ指標がみられた6名の児童には、上記の抑うつ諸要因のいずれかが該当する。事例Kはいじめと両親の離婚を経験している。Lの両親にはネグレクト傾向があった。MとNは両親が離婚して母子家庭であった。OとPは発達障害傾向である。

筆者は、いずれの児童ともSCとしてカウンセリングを中心に関わっていたので、抑うつ症状の外的基準となるスクリーニング・テストは施行していない。

しかし、カウンセリングにおける児童全員の語りは、背景に抑うつ諸要因がみられる内容であった。特に、複数の抑うつ指標が出現し、強い抑うつ傾向を示す「過剰な陰影」がみられた事例 N, O, P は本人の自己否定感や無力感が強い児童であった。

N は自傷がやめられない事例で、幼少期から母子家庭で育ち、両親に十分に愛された経験が少なく、学校でのいじめも受けて非常に不安定な状態にいた。O と P は医療機関において発達障害の可能性を指摘された事例である。高岡

(2010) が「発達障害とうつ病に共通する生物学的基盤があるのではないかと考えられがちであるが、その多くは学校や家庭におけるまなざしが発達障害児を追いつめることによって生じている」と指摘するように、O も P も教師や友達からの理解を得られずに孤立しがちであった。しかし、発達障害児は、元々、特異な絵や強迫的な絵を描くことが多いので、今回、O と P にみられた抑うつ指標が、抑うつによるものであるか発達障害によるものであるかの判断を安易に行うことはできない。

本研究では、児童期の事例にも異質表現がみられ、抑うつ指標としての妥当性はある程度示唆された。今後、子どもの抑うつ傾向はさらなる増加が予測されるので、学校臨床における S-HTP の施行と分析は継続していきたい課題である。

第 6 章

総括的討論

第 I 節 第 1 章～5 章の総括

第 1 章で述べた S-HTP の研究史からは、S-HTP における研究テーマの変遷が明らかになった。1970 年代後半～1980 年代後半までは、精神医療臨床において統合失調症者の描画特徴や病理指標を定める研究が続き、1990 年に入って、非行少年のパーソナリティ、家族との関係などを捉えることを目的として、司法臨床での研究が行われるようになった。2000 年代前半には、発達レベルの理解、社会問題が子どもに及ぼす影響の理解などを目的として、教育臨床における S-HTP 研究が始まり、2000 年代後半には、地域間や国際間における S-HTP の相違を検討する比較研究が始まって、S-HTP の研究テーマは、より多様化している。

筆者のこれまでの研究における現代青年(大学生・大学院生)の S-HTP には、従来の描画研究で病理指標とされてきた描画特徴に加えて、病理を示すとは限らないが、違和感がみられ、何らかの問題を示唆すると考えられる描画特徴が多数出現した。これらの描画特徴は既存の S-HTP 評定項目(三上, 1995; 三沢, 2002)では捉えきれないものである。従って、本論文においては、現代青年の心理的特徴や病理傾向を捉え得る、独自の評定項目を作成すること目的とした。

第 2 章, 第 3 章では、現代青年の描画特徴を捉えるために、三沢(2008)が述べた、S-HTP における「統合性」の低下は現代青年の心理発達の未熟化に起因しており、未熟化は周囲の人々との直接的コミュニケーションが乏しいまま成長した結果であるという仮説を参考に、現代青年の対人経験と S-HTP の描画特徴との関連性についての研究を行った。

第 2 章では「両親の養育態度」を取り上げた。PBI の日本語版を用いて、80 名の対象者の認知する、成長過程での父親・母親それぞれの養育態度を、「愛情と自立承認」、「愛情と過保護」、「冷淡と干渉」、「無関心」の 4 群に分類した。S-HTP の評定には、三上(1995)、三沢(2002)に基づく 111 項目を用いた。4 群の差を χ^2 検定により検討した結果、111 項目の中で有意差、または有意傾向がみられたのは 17 項目と少なく、S-HTP の描画特徴と養育態度との関連を明確に示すまでには至らなかった。

第 3 章では「友人との交流態度」を取り上げた。103 名の対象者の経験に基づく交流態度を捉えるために、「友人とどのようにつきあっているか」、「友人にどんな気持ちを抱いているか」という質問への自由記述を求めた。分類基準を「信頼し、内面を見せられる友人がいるか」として「社交群」、「信頼群」、「距離群」、「希薄群」の 4 群に分類した。S-HTP の評定には、三上(1995)、三沢(2002)に基づく 110 項目を用いた。4 群の差を χ^2 検定により検討した結果、110 項目の中で有意差、または有意傾向がみられたのは 11 項目であり、第 2 章と同様に少なく、S-HTP の描画特徴と交流態度との関連を明確に示すまでには至らなかった。

この第 2 章, 第 3 章の結果から、現代青年の描画特徴を捉えるためには、既存項目に限界があることが示され、新たな項目を作成する必要性が示唆された。

第4章では、現代青年の描画に多数出現する「全体、または一部にみられる、1枚の絵としての調和を欠き、違和感を感じる描画特徴」を『異質表現』として定義し、それらを下位項目としてまとめ、S-HTPの新たなカテゴリを作成するための基礎的研究を行うことを第一の目的とした。異質表現には、抑うつを示す特徴もみられたため、抑うつ傾向を弁別する指標として、異質表現カテゴリの可能性を検討することを第二の目的とした。筆者と2名の臨床心理学者の協議により、これまでに収集した412名のS-HTPから異質表現と認められる描画特徴を抽出し、12下位項目（「多視点」、「透視画」、「空間の偏り」、「人の簡略化」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、「夜・雨の風景」、「過大な太陽」、「一部の突出」、「アニミズム」、「不安定な描線」）を設定した。内、225名の対象者には、BDI-IIを施行し、12下位項目がそれぞれ、どの程度、抑うつ傾向を反映するのかを統計的に検討し、一般青年の抑うつ指標となる5項目（「空間の偏り」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、「夜・雨の風景」）を見出した。

第5章では、抑うつ症状を呈する大学学生相談室の事例を臨床群として、第4章で抑うつ指標とされた異質表現項目が、どの程度、臨床群にみられるかにより、抑うつ指標としての有用性を検討した。学生相談事例では、9名全員に抑うつ指標の項目がみられた。精神科へ通院、服薬している事例においては顕著な抑うつ傾向が示された。また、小学校のスクールカウンセリング事例も提示し、児童期における抑うつ傾向にも言及した。異質表現は7名の児童全員にみられた。抑うつ指標は、自傷と母親のネグレクト傾向がみられる児童と、2名の発達障害児童に認められた。これは、子どもの抑うつ傾向の一要因として辻井・堀（2002）が問題のある家庭環境を、高岡（2010）が発達障害を述べていることに合致しており、抑うつ指標の妥当性を示すものであるといえる。

第Ⅱ節 総合考察

Ⅱ-1. S-HTPにおける現代青年の描画特徴

Ⅱ-1-1. 未熟化と抑うつ傾向

本論文においては、大学生・大学院生の S-HTP に顕著な描画特徴が二点認められた。第一に、年齢不相応に幼稚な描写である。これは三沢（2008）、三沢・河津（2012）による現代青年の心理的な未熟化についての指摘を支持するものである。しかし、三上（1995）、三沢（2002, 2008）が最も重視する評定項目「統合性」をはじめ、「遠近感」、「付加物」の豊かさなど、成熟したパーソナリティの指標とされる評定項目においては、両親の養育態度、友人との交流態度の差異によって青年の描画特徴に明確な違いはみられなかった。すなわち、絵に表れる心理的な未熟化は一部の現代青年にみられるものではなく、全般的な傾向であるといえる。

現代青年に顕著な描画特徴の第二は、強い不安や内的エネルギーの低下、および社交性の乏しさなどを伴う抑うつ傾向を示唆する描写であり、近年において、抑うつ症状を示す大学生の増加を指摘した平木（1993）、苔米地（2006）、上田（2002）の報告に一致するものである。

これらを踏まえて、本論文においては、S-HTP 全体の描画特徴から現代青年の心性をとらえようと試みた。その結果として、異質表現カテゴリーの「多視点」、「透視画」、「過大な太陽」、「アニミズム」には、子どものように自分が思うままに描いていき、部分描写と全体描写の調和を考慮する客観性に欠けるため、結果として年齢不相応に幼稚な絵となるという特徴が認められた。「透視画」と「過大な太陽」は、抑うつ傾向とは負の関係であり、内省力の乏しさも伺える。一方、抑うつ傾向を示す項目は、「空間の偏り」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、および「夜・雨の風景」である。いずれの項目も、抑うつ状態でみられる空虚感・思考の硬さ・攻撃性などを示す表現といえるであろう。

Ⅱ-1-2. 簡略した人と詳細な動物の組み合わせ

現代青年の S-HTP には付加物として「動物」が多く出現する。現代人にとって動物は飼育するというより、ともに生活する家族の一員であり、以前に比べてより身近な愛着対象となっていると考えられる。青年の S-HTP に動物が多くみられることは、そうした時代背景を反映しているのであろう。

本論文においては、興味深い描写として、“人を簡略化するが、動物は詳細に描く”という表現がみられた。こうした描写がみられる対象者は家や木、他の付加物も、ある程度詳細に描いており、人のみが簡略化されている。従って、病理傾向とは考えにくく、適応力は一応保たれているものの、人のみ自然に描けないことから共感性の乏しさや人間不信など社交性の低さを示すと考えられる。また、動物の自然な描写からは、動物に依存や同一化している幼児性が伺える。こうした特徴からは、主体性に乏しく、対人場面や現実社会に年齢相応に適応することが難しい青年像が浮かび上がってくる。

II-1-3. 全体的陰影の出現

本論文においては、夜や暗闇を表現するため、あるいは特定の意味はなく全体に陰影を施した絵がみられた。陰影づけが顕著であること、また、該当する絵に描かれた人間は顔の省略、棒人間、および後ろ向きであることから、防衛の強さ・不安・抑うつ感などを示すと考えられる。先行研究（三上，1995；三沢，2002）には言及がない描画特徴であることから、現代青年を特徴づける描写と考えられ、異質表現カテゴリーの「過剰な陰影」、「夜・雨の風景」につながるものである。

II-1-4. 陰影表現と内省力の関連性

異質表現カテゴリーの12項目の中で、「過剰な陰影」は、33.2%という顕著な出現率を示している。陰影表現は、従来の研究（Bolander, 1977; Buck, 1966; Koch, 1957; 高橋, 2011 他）では、強い不安や抑うつ感を示すと述べられている。この仮説は描画研究においては一般的であるが、その妥当性を明確に示す研究が行われていないため、否定的な意見も多い。本論文では、異質表現項目の「過剰な陰影」が、抑うつ傾向を弁別する指標として妥当であることを示した。

Buck (1966), Bolander, (1977) はバウム・テストにおける陰影表現について、「描画における陰影の技法の使用は、描写の仕方によって健常サインにも病理サインにもなる」として、「陰影が立体効果を達成している時や、熟練した画家が現実的な描画技法として、木に対する光の働きを陰影で示す試みに似ている時は、陰影は「健常」とみなされる。これに反して陰影が過度に黒すぎたり、強調されたり、正しい場所に用いられない場合、病理サインとなる」と述べている。病理サインとなる陰影の特徴は、異質表現項目の「過剰な陰影」の特徴とほぼ同一であると考えられる。

立体を表現するためには、二次元の画用紙に三次元の場面を見る必要がある。実際にはないものを表現するためには、日常で目にする風景や物を正確にインプットする能力と、インプットした情報を適切にアウトプットする能力が必要である。子どもは、自分の絵を客観的に捉えられないので、自分の思うままに描き、一部と全体が調和しない絵となることがよくみられる。しかし、発達に伴って、自分の絵を客観的に捉えられるようになり、他者にどのように見られるかを考慮できるようになる。こうした心理的な成熟は内省力と関連すると考えられる。「過剰な陰影」に分類された絵は、家、木、人の大きさのバランスや、立体的な表現は概ね適切である。この点に客観性や内省力といった年齢相応の成熟が示される。しかし、強い不安や抑うつ感によって過度な陰影を施すことで異質表現となるのである。

II-2. 新たな描画指標の構築

本論文においては、先行研究で蓄積された指標や仮説に留意した上で、現代の描画特徴を反映する、時代に適した S-HTP の評定項目や描画指標を作成し、異質表現カテゴリーとした。

三沢（2002）の 149 評定項目は、1970 年代後半から 1980 年代前半までの一般青年・成人の描画特徴に基づいて設定されたものである。この時代には、全体のまとまりや遠近感を考慮した、立体感のある統合的な絵が大学生の約 70% にみられ、小学生でも高学年になると統合的な絵が多くを占めていたので、「統合性」の 5 項目によってパーソナリティの特徴や知的水準などを捉えることが可能であった。しかし、現代においては、一般青年に遠近感や立体感のある絵がみられることが減少し、平面的な絵が増加している。

三沢・河津（2012）が示した 1979 年と 2004 年の大学生の S-HTP における「統合性」の出現率に、筆者が施行した 2009 年～2012 年の大学生・大学院生の出現率を加えた「統合性」の推移を Table 6-1 に示す。ここでの統合性の出現率は、1979 年より 2004 年の「統合的」がやや低いものの、全体の 70% 近くを占めている。しかし、2009 年～2012 年においては、「統合的」な絵は全体の 30% 近くに減少し、反対に「やや統合的」の出現率が 70% 近くを占める逆転現象がみられる。大学生に S-HTP を施行しても、その大半が「やや統合的」に分類されてしまうため、「統合性」から対象者の特徴を捉えることは困難になっている。

三沢・河津（2012）は、この推移を発達の視点から捉え、現代青年の未熟化を指摘している。これは現代青年の一側面を表すものではある。しかし、現代青年の S-HTP においては、全体のバランスやまとまりについては「統合的」と評定される絵にも病理的な描画特徴がみられる。特に、抑うつ傾向を示唆する様々な表現が出現している。従って、S-HTP を心理臨床に応用していくためには、描画が示す精神病理を捉えることも非常に重要である。また、本論文の第 4 章において、従来の描画研究では病理指標とされる「人の簡略化」が描かれた群と描かれない群の間に、BDI-II 得点における有意差はみられなかった。さらに、「人の簡略化」は、319 名の対象者の約 30% に出現しており、現代においては、ある程度一般的な描画表現であることが明らかになった。やはり病理指標とされる「透視画」でも抑うつ傾向との関連を示す統計的結果は示されなかった。すなわち、現代青年においては「人の簡略化」、「透視画」という表現が一般化しており、病理指標としてのみ捉えることは適切ではないと考えられる。従って、こうした現代青年の特徴を踏まえた新たな指標を臨床に使用していくことは有用である。

Table 6-1. 各年代における大学生の「統合性」の推移

調査実施年	三上 (1979)	三沢 (2004)	瀬瀬 (2009～2012)
大学	A 大学	B 大学	C～G 大学
<i>N</i>	89	46	308
「統合性」5 項目	%	%	%
統合的	76.4	69.6	27.0
やや統合的	18.0	26.1	65.3
媒介による統合	0.0	0.0	3.2
やや羅列的	4.5	2.2	2.9
羅列的	1.1	2.2	1.6
全体	100.0	100.0	100.0

第Ⅲ節 今後の研究課題

Ⅲ-1. 異質表現カテゴリーの体系化

本論文における異質表現カテゴリーの12下位項目は、これまでの描画研究において述べられてきた指標や仮説を踏まえつつ、大学生・大学院生412名のS-HTPから現代青年に多くみられる描画特徴を抽出し、分類して作成した。臨床実践にも使用できると考えられる。しかし、本論文における研究は基礎的なものであるため、今後、更なる検討を行い、異質表現カテゴリーの体系化を行うことが必要である。

本論文では、異質表現カテゴリーの5項目（「空間の偏り」、「全体の簡略化」、「強迫的」、「過剰な陰影」、「夜・雨の風景」）を抑うつ指標とした。臨床レベルの抑うつ症状がみられた学生相談事例全員に複数の抑うつ指標が出現し、その妥当性が示された。従って、抑うつ指標は一般青年の抑うつ傾向を示す弁別力を有するものであると考えられる。しかし、抑うつ指標がうつ病の臨床群に対して有効であるのかは明らかではない。そのため、今後の研究では、うつ病の臨床群における抑うつ指標の妥当性を検討することが必要である。

異質表現項目の中で、30%前後の出現率を示した「多視点」、「人の簡略化」、および「過剰な陰影」は、現代青年の心性を特徴づけるものである。第4章において、これら3項目についての考察を行った。しかし、これら3項目に限らず、異質表現12項目それぞれが示唆し、意味するものを明確にするための分析・検討を重ねていく必要がある。

Ⅲ-2. 学校臨床におけるS-HTPの展開

Ⅲ-2-1. アセスメントツールとしての有用性

臨床場面で実際に使用されている心理検査を整理した名島（2010）は、学校臨床において、SCはカウンセリングやコンサルテーションの仕事が多く、心理検査のための時間が十分に取りにくく、バウム・テスト、DAP、KSD（Kinetic School Drawing：動的学校画）など施行が簡便な描画テストを用いることが多いと報告しており、伊藤（2006）は、「学校側から何らかの見立てを期待されて子どもと面接するときは何の絵であっても、描いてくれる内容がこの子の困難、そしてまた一方ではひそかな可能性を示唆している」と述べている。

これらの指摘を踏まえれば、学校臨床で描画テストを用いる利点は、特別な検査用具を必要とせず施行が簡便であること、子どもにとって絵を描くことは日常的な行為であり侵襲される意識が低いことであるといえる。さらに、学校臨床においては、教員や保護者に、子どもへの理解と適切な援助を求める上で、子どもの絵を提示して心理状態を説明することが有効である場合が多い。

S-HTPは、子どもの自己イメージや家族イメージに加えて、環境や社会への関り方、適応状態までを絵の印象から視覚的に捉えることができるため、描画テストの専門家以外にも理解を促すことが可能である。そのため、学校におけるアセスメントツールとして有用であるといえる。

有光（2004）は、学校臨床における問題点の一つとして、SCによる心理検査の実施が少ないことを指摘し、「検査結果に応じて、カウンセリング、心理療法の種類を決定し、必要であれば医療機関などにリファーする」という「処置、処遇の方向づけ」の重要性を述べている。今後、家庭での虐待がみられたり、精神障害を有する子どもの増加などによって、医療に限らず学外の専門機関と連携する必要性は更に高まると考えられる。従って、学校臨床においてS-HTPを施行し、その有用性を広めていくことが重要である。

Ⅲ-2-2. 抑うつ指標の子どもへの適用

近年、本邦における子どもの抑うつについて、多くの研究・報告が発表されており（傳田，2004，2005；本城・辻井，2000；泉本・下寺，2010；鍋田，2010；齊藤，2011；高岡，2010；田中，2005；辻井・堀，2002他），その症状・発症要因・予防等についての理解と援助を進めることは心理臨床，精神医療において急務である。

傳田（2004，2005），田中（2005）は小・中学生の抑うつ傾向の実態についての調査を行った。傳田（2004，2005）は、抑うつ傾向の高い児童生徒は全体で13.0%（小学生・7.8%，中学生・22.8%）で欧米に比べて非常に高い値であると述べており，田中（2005）は、抑うつ傾向の高い児童生徒は小学校においては20%弱，中学校において30%を超えると報告しており，本邦において抑うつ傾向の子どもが増加していることは明らかである。

本城・辻井（2002）は、「教育現場では，（中略）元気がなく，自己表現のできない子どもに対しては，注目されることが少ないように思われる。（中略）問題が顕在化する前のこころの状態に目を向けることは大切である」と，抑うつ状態という新たな視点から子どもの様子を見つめ直す必要性を指摘している。

筆者が，これまでSCとして関わってきた抑うつ傾向の子どもたちの訴えを概括すれば，“何をするにも不安が伴い，自らの気持ちを説明し難く，重荷を背負ったような生きづらさを感じる，自分でもどうすることもできない状態”である。しかし，子どもたちは，こうした状態が抑うつという病理に起因していることを知らないため，“こんなことになったのは自分が悪い”という思いにとらわれ，周囲の子どもたちに比べて劣等意識や自己否定感を高めて，より症状が強まるという負の悪循環に陥っている。このような子どもたちへの援助の一つとして，SCがアセスメントを行い，必要に応じて医療機関との連携を計ること，保護者，教師，および子ども本人に対して，抑うつについての正確な知識や対応を助言することが必要である。

本論文で作成した異質表現カテゴリーの抑うつ指標（「空間の偏り」，「全体の簡略化」，「強迫的」，「過剰な陰影」，「夜・雨の風景」）は，スクールカウンセリング事例の小学生にも出現がみられ，子どもの抑うつ指標としても妥当性があることが示唆された。今後の研究と臨床実践において，抑うつ指標を子どものS-HTPに適用していくことは，抑うつ傾向の早期発見，適切な介入・援助に寄与すると考えられる重要な課題である。

本論文を俯瞰すれば、先行研究で論じられている現代青年の心理的未熟化、抑うつ傾向の増加は S-HTP の描画特徴としても顕著に反映されている。しかし、現代青年の特徴を否定的に捉えるのではなく、その個性を理解し、コミュニケーション、自己開示などの能力を高められるような教育や援助の体制を模索していく努力こそ重要であると考えられる。そして、S-HTP を現代青年に限らず、描き手の心性を捉えるためのツールとして活用するためには、先行研究における指標や解釈を咀嚼しつつ、常に時代や社会の影響を考慮し、新たな描画指標を構築する努力が必要である。

文 献

A

- Andrews, J., & Janzen, H. (1988). A Global approach for The Interpretation of The Kinetic School Drawing (KSD) : A Quick scoring sheet, Reference guide, and Rating scale. *Psychology in the Schools*, **25**, 217-238.
- 青山桂子・市川珠理 (2006). 青年期におけるアイデンティティの感覚と統合的 HTP の描画特徴. *心理臨床学研究*, **24(2)**, 232-237.
- 荒川正吉 (2000). 小学校スクール・カウンセリングと『枠づけ・S-HTP 法』の試み. *臨床描画研究*, **15**, 170-187.
- 荒井百合・屋内麻里・相澤優・高橋哲 (2007). 非行少年の S-HTP の特徴に関する分析 (2). *犯罪心理学研究*, **45(特別号)**, 8-9.
- 有光興記 (2004). スクールカウンセリングにおける心理アセスメント — 使用可能な心理検査について —. *神戸親和女子大学研究論叢*, **37**, 1-20.
- Atwater, E. (1992). *Adolescence* (3rd ed.) New York : Citadel Press.

B

- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, **4**, 1-102.
- Beck, A. T., Steer, R. A. & Brown, G. K. (1996). BDI Depression Inventory-Second Edition. 小嶋雅代・古川壽亮(訳)(2003). 日本語版 BDI-II — ベック抑うつ質問票 — 手引. 日本文化科学社.
- Blllak, L. (1970). *The Porcupine Dilemma: Reflections on the human condition*. New York: Citadal Press. 小此木啓吾(訳)(1974). 山アラシのジレンマ. ダイヤモンド社.
- Bolander, K. (1977). *Assessing Personality through tree drawing*. New York: Basic Books. 高橋依子(訳)(1999). 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss*. Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1997). 母子関係の理論: I 愛着行動[三訂版]. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss*. Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1977). 母子関係の理論: II 分離不安. 岩崎学術出版社.
- Buck, J. N. (1948). *The H-T-P Technique : A qualitative and quantitative*

scoring manual.. *Journal of Clinical Psychology*, **4**, 317-396. 加藤孝正・荻野恒一（訳）.（1982）. HTP 診断法. 新曜社.

Buck, J. N. (1966). *The House-Tree-Person technique : Revised manual*. LA : Western Psychological Services.

D

Diamond, S. (1954). The House and Tree in Verbal Phantasy: I. Age and Sex Differences in Themes and Content. *Journal of Projective Techniques*, **(18)**, 316-325.

傳田健三(2004). 子どものうつ 心の叫び. 講談社.

傳田健三(2005). 子どものうつ病と現代社会. 松本真理子(編). うつの時代と子どもたち. 至文堂. pp.150-161.

E

遠藤公久(1997). 交友関係. 加藤隆勝・高木秀明(編). 青年心理学概論. 誠信書房. pp.10-123.

遠藤由美(2000). 青年心理 一ゆれ動く時代を生きる一. サイエンス社.

F

藤井恭子(2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析. 教育心理学研究, **49**, 146-155.

藤田裕司(1993). へび象徴技法に関する臨床的研究(2) 一他技法との比較一. 大阪教育大学紀要(第IV部門), **42(1)**, 137-146.

藤原愛美・小坂茂・斎藤通明・黒口高吉(2007). S-HTP にみられる適応指標についての一研究. 日本描画テスト・描画療法学会第17回大会抄録集, 51.

福西勇夫・三上直子・菊池道子(1997). リエゾン精神医学の小児身体表現性障害患者に対する統合型 HTP(家・木・人)法の有用性. 精神医学, **9(2)**, 143-147.

福西勇夫・菊池道子(2000). 心身症の事例(描画テストを用いた事例 一統合型 HTP). 福西勇夫・菊池道子(編). 現代のエスプリ, **390**, 113-120.

福西勇夫・菊池道子・溝口順二(2000a). 定量化への可能性(統合型 HTP 法をめぐる話題). 福西勇夫・菊池道子(編). 現代のエスプリ(心の病の治療と描画法), **390**, 179-183.

福西勇夫・菊池道子・溝口順二(2000b). 医学領域での試用とその可能性(統合型 HTP 法をめぐる話題). 福西勇夫・菊池道子(編). 現代のエスプリ(心の病の治療と描画法), **390**, 184-198.

福田佳織.(2009). 青年の自立 一家族との関係一. 松島公望・橋本広信(編). ようこそ! 青年心理学一若者たちは何処から来て何処へ行くのか. ナカニシヤ出版.

福田真一・井原成男・渡部洋(2000). 震災を体験した児童が3年後に描いた統

合型 HTP. 日本教育心理学会総会発表論文集, **42**, 620.

G

- George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1985). Adult attachment interview (2nd ed.) Unpublished manuscript, University of California at Berkley.
- Goodenough, F. L. (1926) *Measurement of intelligence by drawings*. New York: World Book.
- Gotlib, I. H., Lewinsohn, P. M., & Seeley, J. R. (1995). Symptoms versus diagnosis of depression: Differences in psychological functioning. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **63**, 90-100.

H

- 橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. 教育心理学研究, **48**, 94-102.
- Hess, E. (1999). The adult attachment interview: Historical and current perspectives. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds). *Handbook of attachment theory, research and clinical applications*. New York: Guilford Press. pp. 125-150.
- 平川義親 (1993). シンナー吸引少年の特徴について —統合型 HTP テストに示される棒人間 (stick figure) を通して見た一考察—. 臨床描画研究, **8**, 213-223.
- 平川義親・尾崎敏子・芹澤政子・坂野剛崇 (1997). 統合型 HTP を通しての非行少年の理解 —少年事件調査実務への「統合型 HTP 法」導入の試み—. 調研紀要, **67**, 69-107.
- 平川義親 (1999). 心理テストを通じてみた最近の非行少年と家族. ケース研究, **261(3)**, 137-145.
- 平川義親 (2000). 非行少年の理解と援助の手がかり (描画テストを用いた事例—統合型 HTP). 福西勇夫・菊池道子 (編). 現代のエスプリ, **390**, 81-90.
- 平木典子 (1993). カウンセリング・ルームからみた学生たち. IDE 現代の高等教育, **344**, 23-28.
- 細木照敬・中井久夫・大森淑子・高橋尚美 (1971). 多面的 HTP 法の試み. 芸術療法, **3**, 61-67.
- 本城秀次・辻井正次 (2000). 子どもの抑うつ. 風祭元 (編). 現代の子どもの抑うつ. 日本評論社. pp.83-96.

I

- 井原成男 (2004). Anorexia Nervosa 症例に施行した連続 S-HTP. 小児の精神と神経, **44(2)**, 139-147.
- 稲田圭子 (2003). S-HTP を用いた学童期・思春期の心像世界への接近 —樹木・

- 動物の描画変化との関連から一島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要, **1**, 63-72.
- 井上健治 (1992). 仲間と発達. 東洋・繫多進・田島信元 (編). 発達心理学ハンドブック. 福村出版. pp.1048-1065.
- 井上正作 (2005). 感性の論理とその実践・美術の歴史・美術教育の歴史. 大学教育出版.
- 入江詩子・有門恵・菅原良子 (2009). 子どもの育ちと地域社会の在り方に関する一考察 —タイ北部・東北部における描画テストからみえてきたもの—. 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要, **7-1**, 47-72.
- 入吉美貴・山本多江・山本瑞 (2007). 認め合い支え合う集団を目指して —Q-U と S-HTP の有効的なコラボによる生徒支援を探る. 研究集録, **42**, 29-36.
- 石川元 (1997). マンガ的表現としての棒人間 (stick man). 臨床描画研究, **12**, 61-71.
- 磯部美良・刀坂純子・井ノ上のぞみ (2012). 南九州大学人間発達研究, **2**, 3-13.
- 市川珠理 (1988). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画構造 —多変量解析による分析—. 臨床精神医学, **17-8**, 1221-1233.
- 市川珠理 (2004). 描画テストバッテリーにおける順序効果 —統合型 HTP 法 (S-HTP) とバウムテスト—. 明治学院大学・心理学部紀要, (**14**), 47-56.
- 市川珠理 (2011). 統合型 HTP 法 (S-HTP). 日本描画テスト・描画療法学会第 21 会大会抄録集, 27.
- 一丸藤太郎・倉永恭子・森田裕司・鈴木健一 (2001). 通り魔殺人が児童に及ぼした影響 —継続実施した S-HTP から—. 心理臨床学研究, **19(4)**, 329-341.
- 伊藤菜穂子・酒井健・篠竹利和 (2009). 統合型 HTP 法における小学生の描画特徴. 日本大学文理学部心理臨床センター紀要, **6-1**, 33-48.
- 伊藤由紀子 (2006). 子ども臨床における描画と言語交流の関係 —描画を通して受けとめること, 言語を介して受けとめること—. 日本描画テスト・描画療法学会第 16 会大会抄録集, 44.
- 泉本雄司・下寺信次 (2010). 子どもの「うつ」の臨床尺度と調査研究. 児童心理, **64(8)**, 25-30.



- 海塚愛華 (2003). ある抑うつ神経症者に適用した描画物語相互吟味法. 山口大学心理臨床研究, **3**, 31-38.
- 菊池道子 (2000). 精神科領域の事例 (描画テストを用いた事例 —統合型 HTP). 福西勇夫・菊池道子 (編). 現代のエスプリ, **390**, 103-112.
- 桐山雅子 (2010). 大学生を理解する視点. 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編). 学生相談ハンドブック, 学苑社. 30-47.
- 栗原彬 (1989). やさしさの存在証明 —若者と制度のインターフェイス. 新曜社.
- 桑原尚佐・森永利英・濱野公子・山崎明郎・千葉美樹・萱間友道 (1998). 家事

- 事件における描画テストの効果的活用方法について —統合型 HTP を中心に一. 調研紀要, **68**, 25-57.
- 桑原尚佐・森永利英 (2000). 夫婦関係の事例 —問題解決に役立てられている描画テスト— (描画テストを用いた事例 —統合型 HTP). 福西勇夫・菊池道子 (編). 現代のエスプリ, **390**, 91-102.
- 小林三千緒・橋本秀美 (2010). 青年期の描画特徴にみられる抑うつ感についての考察 —調査研究を通しての一考察—. 日本描画テスト・描画療法学会第20 会大会抄録集, 38.
- 小林真理子・村山典子 (2000). 児童精神科の事例 (描画テストを用いた事例 —統合型 HTP). 福西勇夫・菊池道子 (編). 現代のエスプリ, **390**, 69-80.
- Koch, K. (1949). *Der BaumTest : Der Baumzeichenversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel*. Bern:Hans Huber. 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970). *バウム・テスト —樹木画による人格診断法—*. 日本文化科学社.
- 古賀美由紀・三沢直子 (2011). S-HTP 法. 児童心理, **65(18)**, 102-106.
- 越川房子 (1990). 統合型 HTP テスト法における精神分裂病者と鬱病者の描画分析. 早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊 (哲学・史学編), **16**, 39-49.
- 近藤孝司 (2006). 描画法における対象関係のアセスメントの検討 —変法 S-HTP を用いての統計的検討—. 日本描画テスト・描画療法学会第 16 会大会抄録集, 48.
- 近藤孝司 (2008). S-HTPP (Synthetic House Tree Person test) の基礎的研究. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **8(1)**, 31-39.
- 近藤孝司 (2009a) 描画法による対象関係のアセスメント —S-HTPP 法における, 描かれた人物像の相互作用の検討—臨床描画研究, **24**, 146-162.
- 近藤孝司 (2009b) S-HTPP 法における自己愛の諸相 —人物像の描画表記についての自己心理学からの理解—. 心理臨床学研究, **27(3)**, 333-343.
- 近藤孝司 (2010). S-HTPP 法における第 2 の分離個体化の様相. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **10(1)**, 21-35.
- 近藤孝司 (2011) 描画法による対象関係のアセスメント —S-HTPP 法における, 描かれた人物像の相互作用の検討—臨床描画研究, **24**, 146-162.
- 近藤孝司 (2012) 描き手が自身の描画を振り返ることの心理臨床的意義 —約 2 年, 4 枚の S-HTPP 法を用いた二つの事例研究—心理臨床学研究, **30(3)**, 309-320.



LaFreniere, P. J., & Sroufe, L. A. (1985). Profiles of peer competence in the preschool : Interrelations between measures, influence of social ecology and relation to attachment history. *Child Development*, **64**, 231-245.

- Maccoby, E. & Martin, J. (1983). Socialization in the context of the family : Parent-child interaction. In E. Hetherington (Ed). *Handbook of child psychology*. New York : Wiley.
- Main, M. & George, C. (1985). Responses of abused and disadvantaged toddlers to distress in agemates : A study in the day care setting. *Development Psychology*, **21**, 407-412.
- Machover, K. (1949). *Personality Projection in The drawing of Human Figure*. Springfield II : Charles C Thamas. 深田尚彦 (訳) (1974). 人物画への性格投影. 黎明書房.
- 前川あさ美 (1996). 統合型 HTP を通じた描画体験過程の分析 —絵を描く者と描画分析の交わるところ—. 研究助成論文集(安田生命事業団), **32**, 80-91.
- 丸野廣・徳田良仁・徳田秀子 (1975). 破瓜的心性へのイメージ絵画精神療法的接近. 芸術療法, **6**, 23-38.
- 松本真理子 (2005). うつの時代に生きる子どもたち —一人とかかわることをめぐる問題—. 松本真理子(編). うつの時代と子どもたち. 至文堂. pp.37-51.
- 松永真由美・岩元澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究. 久留米大学心理学研究, **7**, 77-86.
- 三上直子 (1979a). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画分析—一般成人との統計的比較. 臨床精神医学, **8**, 79-90.
- 三上直子 (1979b). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画分析 —病態に応じた継時的変化—. 臨床精神医学, **8**, 1479-1487.
- 三上直子・岩崎和江. (1981). 統合的 HTP 法における幼稚園児から大学生までの描画発達 —分裂病者との描画特徴との関連において—. 臨床精神医学, **10**, 1331-1339.
- 三上直子 (1992). 母子関係の悪化に対する予防的アプローチ —離婚家庭 13 組の母子にエゴグラムと統合型 HTP 法を実施して—. 心理臨床学研究, **10(1)**, 76-83.
- 三上直子 (1995). S-HTP 法 —統合型 HTP 法の臨床的・発達のアプローチ—. 誠信書房.
- 三沢直子 (1998). 殺意をえがく子どもたち —大人への警告. 学陽書房.
- 三上直子・平川義親・尾崎敏子・芹澤政子・坂野剛崇 (1998). 統合型 HTP に関する発達のアプローチ. 臨床描画研究, **13**, 196-217.
- 三沢直子 (2002). 描画テストに表れた子どもの心の危機 —S-HTP における 1981 年と 1997~99 年の比較—. 誠信書房.
- 三沢直子 (2008). 描画テスト (S-HTP) に表れた子どもの発達の問題. 臨床描画研究, **23**, 64-81.
- 三沢直子 (2009). 統合型 HTP 法を子どもの心理検査として有効利用するための基礎研究. 明治大学人文科学研究紀要, **65**, 293-33

- 三沢直子・河津英彦 (2012). NP プログラム「完璧な親なんていない！」10年の歩み. 東京都福祉保健財団.
- 三根芳明 (1990) 摂食障害者の絵画表現について —神経性無食欲症と神経性大食症との比較. 日本芸術療法学会誌, **21(1)**, 135-146.
- 森恭子・後藤和史 (2011). 教員免許等の資格取得を目指す学生のアイデンティティと特徴. 瀬木学園紀要, **5**, 4-12.
- 森田裕司 (1989). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画特徴 —全体的評定による因子分析—心理臨床学研究, **6(2)**, 29-39.
- 諸橋優子・高橋邦明・細木俊宏・小林真理・染矢俊幸 (2003). 逆説性うつ病を呈した臓器移植ドナーの 2 例. 新潟医学会雑誌, **117(7)**, 378.
- 武藤翔太 (2011). 統合型 HTP 法における無彩色・彩色バッテリーに関する探索的研究 —描画の変化とロールシャッハテストとの関連から—. 明治大学社会心理学研究, **6**, 89-100.
- 武藤翔太 (2013). 統合型 HTP 法における無彩色・彩色バッテリー法の検討 —バッテリー施行による描画内容の変化に着目して—. 日本心理臨床学会第 32 回大会論文集, 331.

N

- 鍋田恭孝 (2010). 楽しめない・身動きできない子どもたち —こどもの「うつ」を中心に. 児童心理, **64(8)**, 1-11.
- 中井久夫 (1971). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用. 芸術療法, **2**, 77-89.
- 名島潤慈 (2010). 臨床場面において用いられている心理テストの現況. 山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, **30**, 101-111.
- 中園尚武・野島和彦 (2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究 —友人関係に関する「無関心」に注目して—. 九州大学心理学研究, **4**, 325-334.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2012). 健常な大学生から抽出された Beck Depression Inventory Second Edition (BDI-II) 評価による抑うつの特徴について. 精神医学, **(54)7**, 699-708.
- 難波久美子 (2004). 日本における青年期後期の友人関係研究について. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 107-116.
- 根本句子 (1998). 統合型 HTP 法における 3 アイテム間の位置関係とロールシャッハ・テストの体験型との関連. ロールシャッハ研究, **2**, 33-43.
- 西平直喜 (1973). 青年心理学. 塚田毅 (編). 現代心理学叢書 7. 共立出版.
- 野添新一・鷺山健一郎・長井信篤・筒井順子・瀧井正人・武井美智子・成尾鉄朗 (2005). 若年化, 遷延化する摂食障害患者の問題と支援. 心身医学, **45(3)**, 217-223.

O

- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. *精神科治療学*, **(6)**, 1193-1201.
- 大平健 (1995). やさしさの精神病理. 岩波書店.
- 及川裕子 (2005) 親性の発達に関する研究 —乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討—. *埼玉大学紀要*, **(7)**, 1-7.
- 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察. *青年心理学研究*, **5**, 43-55.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. *教育心理学研究*, **43**, 354-363.
- 小山内實・玉田尚子 (2006). 描画にみる変貌する子どもたち —「家・木・人」描画 (S-HTP 法) の徹底分析に向けて—. *三重大学教育実践総合センター紀要*, **26**, 13-18.
- 小山内實・玉田尚子・川口恭子 (2007). 中学生描画の物語性 —HTP アイテム選択法を実施してみた—. *三重大学教育学部附属実践総合センター紀要*, **27**, 35-40.

P

- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Parris, C., Jacobson, L., Londstroem, von Knorring & Parris, H. (1980). Development of a new inventory for assessing memories of parental nearing behavior. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **61**, 265-274.

R

- 李曉茹・下山晴彦 (2008). 中国人学生における強迫傾向と親の養育態度. *パーソナリティ研究*, **16(3)**, 335-346.

S

- 齊藤万比古 (2011). 子どものうつ. 平木典子・岩壁茂・福島哲夫 (編). *新世紀うつ病治療論・支援論 —うつに対する統合的アプローチ—*. 金剛出版. pp.201-221.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 攻撃性概念の細分化と形成過程. *美作大学短期大学部紀要*, **40**, 1-7.
- 佐野友泰・浦田暁菜 (2008). バウムテスト・S-HTP 法の地域差に関する検討 —北海道・沖縄県学生の相違と居住年数による影響について—. *日本芸術療法学会誌*, **39(2)**, 72-82.
- 佐藤公代 (2001). 親の養育態度と子どもの性格形成に関する研究. *愛媛大学教育学部紀要*, **47 (2)**, 25-29.
- Schopenhauer, A. (1851). *Perergera und Paralipomena: kleine philosphische.*

- Zweiter Band. 秋山英夫 (訳). (1973). 比喩, たとえ話, 寓話. 白水社.
- 千石保 (1991). 「まじめ」の崩壊 —平成日本の若者たち—. サイマル出版会.
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2007). 統合型 HTP 法に関する研究の展望 —「統合性」・「遠近感」・「人と家・木との関係付け」に着目して—広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **6**, 52-66.
- 染谷俊幸・高橋三郎・門脇真帆・Reist, C.・Tang, S. W. (1996). EMBU 尺度 (養育体験認知に関する自己記入式調査票) の日本語版作成と信頼性検討. 精神医学, **38(10)**, 1065-1072.
- 須賀良一 (1985). 慢性分裂病における統合力の検討 —分裂病者の描画の数量化 3 類による分析—. 臨床精神医学, **14-5**, 801-809.
- 須賀良一 (1987). 分裂病者の絵画の描画形式と臨床像の相関について —その 1. 分裂病者の絵画の描画形式と形式分析における多次元尺度解析法の応用—. 精神医学, **29-10**, 1057-1065.
- 鈴木常元・安齋順子 (1999). 抑うつ者の外面的および内面的攻撃性. 心理臨床学研究, **16(6)**, 573-581.
- 鈴木祐子・刀根洋子・木村恭子・及川裕子 (2002). 男女別による子ども虐待の認識と世代間伝達の関連 —ビネット調査と PBI 測定から—. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, **(15)**, 25-30.

T

- 田畑光司 (2006). 描画テストに関する基礎的研究. —大学生の S-HTP 法—. 埼玉学園大学紀要・人間学部篇, **6**, 111-119.
- 田畑光司 (2010) 描画テストに関する基礎的研究 4 —S-HTP 法と枠づけ効果—. 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), **10**, 191-197.
- 田畑光司 (2011). 統合型 HTP 法に関する基礎的研究 —描画順について—. 臨床描画研究 **25**, 231-239.
- 高田知恵子・近藤智恵子 (1990). 外来分裂病者と入院病者の統合型 HTP における描画特徴について —統合力の検討—. 日本教育心理学会議会発表論文集, **32**, 491.
- 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門 —HTP テスト. 文教書院.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト. 文教書院.
- 高橋雅春・高橋依子 (2010). 人物画テスト. 北大路書房.
- 高橋哲・相澤優・屋内麻里・荒井百合 (2007). 非行少年の S-HTP の特徴に関する分析 (1). 犯罪心理学研究, **45(特別号)**, 6-7.
- 高橋依子 (2011). 描画テスト. 北大路書房.
- 高岡健 (2010). 子どもの「うつ」とその背景. 児童心理, **64(8)**, 49-52.
- 高良聖・大森健一 (1994). 精神分裂病者における統合型 HTP 描画変化と予後との関連. 臨床精神医学, **23**, 485-497.
- 高崎蘭 (2011). 統合型 HTP と自我の統合機能. 臨床心理学研究, **9**, 67-81.
- 竹山典子・今田雄三 (2010). コミュニティ心理学的アプローチによるニューカ

- マー児童の支援 —S-HTP 法を用いた実践—. 兵庫教育大学教育実践学論集, **11**, 15-26.
- 田中真理 (2005). 学校現場における子どもの抑うつ. 松本真理子(編). うつの時代と子どもたち. 至文堂. pp.113-126.
- 田中ネリ・阿部裕・井上孝代・岩木エリーザ (2007). S-HTP でみる在日外国人児童のこころ —ボリビア人児童との比較—. 明治学院大学心理学部附属研究所紀要, **5**, 15-31.
- 東京都生活文化局 (1985). 大都市青少年の人間関係に関する調査 —対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析—. 東京都生活文化局.
- 苫米地憲昭 (2006). 大学生:学生相談から見た最近の事情. 臨床心理学, **6(2)**, 168-172.
- 辻井正次・堀篤実 (2002). 現代の子どもたちと抑うつ. 教育と医学, **50(5)**, 27-33.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 EICA の作成. 関西大学社会学部紀要, **7(2)**, 1-14.

U

- 上田裕美 (2002). 抑うつ感を訴える大学生. 教育と医学, **50(5)**, 44-49.
- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨 (2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性との関連 —攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて—. パーソナリティ研究, **18(1)**, 71-73.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離. 教育心理学研究, **42**, 21-28.

Y

- 山形俊・日高三喜夫 (2008). 大学生の摂食障害傾向における強迫性と両親の養育態度の関連. 久留米大学心理学研究, **7**, 69-76.
- 山口淑子 (2006). 母親における養育態度と自身が受けた養育態度との関連について. 竜谷大学大学院文学研究科紀要, **28**, 16-35.
- 山田知加・葛西真記子 (2013). 小中移行期の学校適応に関する研究 —S-HTP 法と Q-U による分析を用いて—. 日本心理臨床学会第 32 回大会論文集, 320.
- 大和美希子・吉岡和子 (2011). きょうだいに関する劣等感と養育態度の認知との関連. 福岡県立人間社会学部紀要, **20(1)**, 61-69.
- 横山知行 (2012). 「お約束」を超えて. 精神療法, **38(2)**, 84-85.

初出一覧

本論文における各研究は、下記の内容に大幅な加筆修正を行ったものである。

第 1 章

Kohketsu, C. (2011). *Attempt of new interpretation hypothesis about drawing features S-HTP in contemporary adolescents*. The Abstract Book of XX International Congress of Rorschach and Projective Methods, 146-148.

瀬瀬千晶 (2012b). S-HTP 研究の文献検討 —研究テーマの多様化を中心に—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **59**, 101-109.

第 2 章

瀬瀬千晶・森田美弥子 (2010). 大学生における両親の養育態度と S-HTP の描画特徴の関連 —精神的成熟度からの検討—. 臨床描画研究, **25**, 128-145.

第 3 章

瀬瀬千晶・森田美弥子 (2011). 現代青年の友人への交流態度からみた S-HTP の描画特徴. 心理臨床学研究, **29(5)**, 634-639.

第 4 章

瀬瀬千晶 (2012a). S-HTP における新たなカテゴリー作成の試み —『異質表現』による分類—. 日本心理臨床学会第 31 回大会論文集, 417.

瀬瀬千晶 (2014). S-HTP における『異質表現カテゴリー』作成の基礎的研究 —抑うつ傾向との関連から—. 心理臨床学研究, **31(6)**. (印刷中)

資 料

資料 1 表紙（第 2 章～第 4 章の調査で使用）

資料 2 Face Sheet（第 2 章～第 4 章の調査で使用）

資料 3 描画後質問用紙（第 2 章～第 4 章の調査で使用）

資料 4-1 PBI・Father's Version（第 2 章・第 3 章の調査で使用）

資料 4-2 PBI・Mother's Version（第 2 章・第 3 章の調査で使用）

資料 5 他者との交流に関するアンケート（第 3 章・第 4 章の調査で使用）

資料 6 BDI-II（第 4 章の調査で使用）

描画研究に関連する質問紙調査

- 本調査用紙は、描画研究に関連する質問に御回答いただくものです。匿名式で個人が特定されないことを厳守し、結果処理を行います。御回答いただきました内容は研究以外の目的には一切使用いたしませんので、調査への御協力をお願い申し上げます。
- 調査用紙は結果処理の後、責任をもって破棄いたしますので、率直に御回答ください。
- 調査への回答の有無により皆さんに不利益が生じることは一切ございません。
- できる限り御協力をいただきたいと思いますが、どうしても回答したくない方は未記入で結構です。回答の途中でとりやめたいと思ったら中断していただいても構いません。
- なお、本調査用紙への回答をもって、調査協力の同意と見なさせていただきますことを御了承ください。

名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
心理発達科学専攻 精神発達臨床科学講座
博士後期課程 瀨瀬千晶

指導教授 森田美弥子

以下の質問に回答してください。

【生年】 19 年

【年齢】 歳

【性別】 男 女

【学年】 大学 ・ 大学院 (年生)

【家族構成】

--

【家族構成】について、もし、両親が離別、死別されている場合はそのように記入してください。

.....

<お願い>

私たちは、今回の調査を基盤として、一定の期間を置いたのち、フォローアップ調査を行う予定です。引き続き調査に御協力いただける意思のある方は、以下に氏名と連絡先(メールアドレス・携帯電話番号など)を記入してください。

本研究の性質上、個人情報に関しましては、徹底した秘密厳守をお約束いたします。いただきました個人情報はフォローアップ調査の連絡以外には用いません。以上を御理解いただいた上で、フォローアップ調査に御協力いただけますようお願い申し上げます。

【氏名】

【連絡先】

.....

【調査者の連絡先】 瀬織千晶	※調査時はメールアドレスを記入
森田美弥子	※調査時はメールアドレスを記入

描画およびアンケート、質問紙についての疑問・質問についても何かありましたら上記にご連絡ください。

描画後の質問

絵を描いていただき、ありがとうございました。お疲れ様です。
つづいて、今、あなたが描いた絵について、いくつか質問をします。
それぞれの質問に対して、想像できる範囲で構いませんので、記述をお願いいたします。

I. まず、この絵はどんな場面や状況を描いたものなのかを教えてください。

II. この絵に描かれた人の性別、年齢、どのような人物で、何をしているところかを教えてください。

III. この絵に描かれた家はどんな家ですか？誰の家、住人の有無、大きさや特徴などを教えてください。

IV. この絵に描かれた木はどんな木ですか？種類や樹齢、大きさや特徴などを教えてください。

V. 最後に、この絵について上記以外で付け加えることがありましたら自由に書いてください。

『PBI』は、幼児期から現在までのあなたに対する父親および母親それぞれの養育態度について尋ねるものです。各質問項目に対して『まったくそう思う』、『どちらかというそうだ』、『どちらかという違う』、『まったく違う』いずれかあなたにあてはまる欄に○をつけてください。
このページでは父親の養育態度に、次ページでは母親の養育態度について答えてください。
離別や死別などで一方の親、または両親がいない方も記憶の範囲で答えてください。

PBI (Father's Version)

質問項目	まったく そう思う	どちらか というそうだ	どちらか という違う	まったく違う
1 父はいつも暖かく親しみのある声で話しかけてくれた				
2 父は私が望んでいるのに十分助けてくれなかった				
3 父は私のしたい、たいていのことはやらせてくれた				
4 父は私には気持の上で冷たかった				
5 父は私の抱えている問題や悩みを理解してくれただと思う				
6 父は私に優しく、情愛があった				
7 父はものごとを、私が自分自身で決めるのを望んでいた				
8 父は私に大人になってほしくないようだった				
9 父は私のすることは何でもコントロールしたがった				
10 父は私のプライバシーを無視していた				
11 父は私とあれこれ話し合うのを楽しみにしていた				
12 父は私に絶えず微笑みかけてくれた				
13 父は私を子ども扱いしがちだった				
14 父は私が必要としたり、望んでいることを理解しているとは思えなかった				
15 父は私自身に決定を下させた				
16 父に自分は求められていない存在だと思い知らされた				
17 父は気分的に混乱したようなときは、気持ちを落ちつかせてくれた				
18 父は私と話し合うということはなかった				
19 父は私を、つとめて親に依存させようとしていた				
20 父は私のことを親がいなければ自分のことも処理できないと思っていた				
21 父は私の望みのままに、自由にさせてくれた				
22 父は私が望めば、いつも外出させてくれた				
23 父は私には過保護だった				
24 父は私をほめてくれたことがなかった				
25 父はどんな服装をしようと私の好きなようにさせてくれた				

PBI (Mother's Version)

質問項目	まったく そう思う	どちらかと いうとそうだ	どちらかと いうと違う	まったく違う
1 母はいつも暖かく親しみのある声で話しかけてくれた				
2 母は私が望んでいるのに十分助けてくれなかった				
3 母は私のしたい、たいていのことはやらせてくれた				
4 母は私には気持の上で冷たかった				
5 母は私の抱えている問題や悩みを理解してくれていたと思う				
6 母は私に優しく、情愛があった				
7 母はものごとを、私が自分自身で決めるのを望んでいた				
8 母は私に大人になってほしくないようだった				
9 母は私のすることは何でもコントロールしたがった				
10 母は私のプライバシーを無視していた				
11 母は私とあれこれ話し合うのを楽しみにしていた				
12 母は私に絶えず微笑みかけていてくれた				
13 母は私を子ども扱いしがちだった				
14 母は私が必要としたり、望んでいることを理解しているとは思えなかった				
15 母は私自身に決定を下させた				
16 母に自分は求められていない存在だと思い知らされた				
17 母は気分的に混乱したようなときは、気持ちを落ち着かせてくれた				
18 母は私と話し合うということはなかった				
19 母は私を、つとめて親に依存させようとしていた				
20 母は私のことを親がいなければ自分のことも処理できないと思っていた				
21 母は私の望みのままに、自由にさせてくれた				
22 母は私が望めば、いつも外出させてくれた				
23 母は私には過保護だった				
24 母は私をほめてくれたことがなかった				
25 母はどんな服装をしようと私の好きなようにさせてくれた				

以下の質問は、あなたが子どもの頃、および現在、他者とのように交流をしていたか／しているかについて尋ねるものです。

①②の質問には、幼少期から小学6年までを思い出して回答してください。

- ① あなたは学校や地域で、友達や周囲の人たち(大人も含む)とどのような『つきあい』をしていましたか(何をして遊んでいたか、どんな接し方をしていたかなど)?
下記の欄にできる範囲で、具体的に記述してください。

- ② その『つきあい』をしていた友達や周囲の人たちに対して、どのような『気持ち』を抱いていましたか(安心できる・親しく思えないなど)?
下記の欄にできる範囲で、具体的に記述してください。

③④の質問には、現在のあなたについて回答してください。

- ③ あなたは学校や地域で、友達や周囲の人たち(目上も含む)とどのような『つきあい』をしていますか(どんな遊びや話をするか、どんな接し方をするかなど)?
下記の欄にできる範囲で、具体的に記述してください。

- ④ その『つきあい』をしている友達や周囲の人たちに対して、どのような『気持ち』を抱いていますか(安心できる・親しく思えないなど)?
下記の欄にできる範囲で、具体的に記述してください。

日本版 BDI-II

No. _____

氏名 _____

生年月日 年 月 日

年齢 歳 性別 男・女

回答日 年 月 日

個人情報厳守のため
このページへの記入は
一切不要です

日本語版 © Anne T. Beck, Robert A. Steer, Gregory K. Brown © 著作権 © 心理検査 訳者
Beck Depression Inventory (BDI-II), Copyright © 1996, 1997 by Anne T. Beck. All rights reserved.
日本語版 © 1997, 1999 by Anne T. Beck. All rights reserved. 訳者 © 1997, 1999 by Anne T. Beck.
日本語版 © 1997, 1999 by Anne T. Beck. All rights reserved. 訳者 © 1997, 1999 by Anne T. Beck.

本問紙の内容は、日本語版で心理検査の著作権法に準拠して印刷されています。

株式会社 日本文化科学社 © The Psychological Corporation

この問紙には21の項目があります。
それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ仔細よく読み、それぞれの項目で、今日を過ごした2週間
のあなたの気持ちに最も近い文章をひとつ選び、選んだ文章の番号を○で囲んでください。
もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、番号の大きい方を○で囲んでください。
No.18 (睡眠習慣の変化)やNo.19 (食欲の変化)も同様、それぞれの項目で必ずひとつだけ高んでください。

- 0 わたしは気が滅入っていない
1 しばしば気が滅入る
2 いつも気が滅入っている
3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい
- 0 自分が弱を受けているようには感じない
1 自分は弱を受けながらも思っている
2 自分は弱を受けながらも思っている
3 自分は今弱されていると感じる
- 0 将来について悲観していない
1 以前より将来について悲観的に感じる
2 物事に自分についてうまくいとは思えない
3 将来は絶望的で悲しくなるばかりだと思う
- 0 自分を落胆者だとは思わない
1 普通の人より失敗が多かったと思う
2 人生を楽々と進めたいと思いつく
3 自分は人間として完全な落胆者だと思つ
- 0 自分が楽しいことは以前と同じくらい喜びを感じる
1 以前ほど物事を楽しめない
2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
3 以前は楽しめたことにもまったく喜びを感じなくなった
- 0 自分に罪の意識はない
1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪
意識を感じる
2 はとんどいつも罪意識を感じている
3 絶えず罪意識を感じている
- 0 自分が弱を受けているようには感じない
1 自分は弱を受けながらも思っている
2 自分は弱を受けながらも思っている
3 自分は今弱されていると感じる
- 0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
1 以前より自分に對して自責を覚えた
2 あらゆる自分の欠点に気がなり自分を含めて
いる
3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだ
と思う
- 0 以前よりも自分に批判的だとは思わない
1 以前より自分に批判的だ
2 あらゆる自分の欠点に気がなり自分を含めて
いる
3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだ
と思う
- 0 自責したいと思うことはまったくくない
1 自責したいと思うことはあるが、本気にしよ
うとは思わない
2 自責したいと思う
3 機会があれば自責するだろう
- 0 以前よりも罪を感ぜない
1 自分より罪を感ぜる
2 となさうなにもにも罪を感ぜる
3 罪を感ぜることに罪を感ぜる

日本版 BDI-II

0 普段以上に落ちつきがなかったり緊張しやす
くはない
1 普段より落ちつきがなかったり緊張しやす
い
2 気持ちが落ちつきがなくなっているのが嫌しい
3 気持ちが落ちつきがなくなるといふ感じがして
いないと気が済まない

0 他人や活動に対する関心を失っていない
1 以前より他人や物事に対する関心が減った
2 他人や物事への関心がほとんどなくなった
3 何事にも興味をもつことが難しい

0 以前と同じように物事を決断できる
1 以前より決断するのが難しくなった
2 以前より決断するのがずっと難しくなった
3 どんなことを決めるにもひどく苦悩する

0 自分が価値がないとは思わない
1 以前は自分が価値があり人の役に立てる人間
だと思えない
2 他人に比べて自分は価値がないと思う
3 自分はまったく価値がないと思う

0 以前と同じように活力がある
1 以前と比べて活力が減った
2 活力が足りなくて十分働けない
3 活力が全く何もしない

0 睡眠習慣に変りはない
1a 以前より少し睡眠時間が長い
1b 以前より少し睡眠時間が短い
2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
2b 以前よりかなり睡眠時間が短い
3a はとんど1日中寝ている
3b 以前より2時間早目が覚めて、再び眠れない

0 食欲は以前と変わらない
1a 以前より少し食欲が落ちた
1b 以前より少し食欲が増えた
2a 以前よりかなり食欲が落ちた
2b 以前よりかなり食欲が増えた
3a まったく食欲がなくなった
3b いつも何か食べたくなかった

0 以前と同じように集中できる
1 以前ほど集中できない
2 何事にも集中しにくい
3 何事にも集中できない

0 以前と比べて疲れやすわけではない
1 以前より疲れやすい
2 以前ならできた多くのことが疲れしてしまっ
てできない
3 以前ならできたほとんどのことが疲れしてしま
ってできない

0 性根は以前と変わらない
1 以前ほど性根がない
2 最近めっきり性根が弱くなった
3 まったく性根がなくなった

計

Copyright © 1997, 1999 by Anne T. Beck.
All rights reserved. 訳者 © 1997, 1999 by Anne T. Beck.
Copyright © 1997, 1999 by Anne T. Beck. All rights reserved. 訳者 © 1997, 1999 by Anne T. Beck.

株式会社 日本文化科学社 http://www.nihonku.co.jp

電話 03-5751-5255
FAX 03-5751-5256

付 記

本論文における調査に御理解と御協力をいただきました各大学の先生方、学生の皆様と、事例発表への御了解をくださったクライアントの皆様にご心より御礼申し上げます。

名古屋大学・森田美弥子先生は、博士課程後期課程進学を目指して、はじめて研究室に伺った際、一面識もなかった私の S-HTP 研究の構想を丁寧に聞いてくださり、共同研究を行ってくださいました。そして、入学後はいつも穏やかな笑顔で細やかな御指導をいただきました。森田先生の御助力があってこそ研究発表を継続することが叶いました。

佛教大学・松瀬喜治先生には、10年以上にわたりスーパーヴァイザーとしての御指導と、描画研究の大先輩としての多大なる御助言をいただいております。「あせらない、あきらめない」の言葉とともに博士課程進学への背中を押してくださいました。

お二人は私のパーソナリティも十分に理解していただき、精神面でも常に支えていただいております。森田先生、松瀬先生に深く深く感謝申し上げます。

博士課程在学中は大学・職場において、たくさんの方々に支えていただいていると実感する日々でした。森田研究室院生の皆さんには指導会で刺激的な御意見をいただき、皆さんの研究や発表から多くの知識を得ることができました。ふだんの何気ないおしゃべりもとても楽しかったです。

東京大学・日本学術振興会の安永和央先生には、博士課程の先輩として学会発表から博士論文執筆まで貴重なアドバイスをいただき感謝しております。

御協力いただいた一人一人のお名前をあげることはできませんが、本当にありがとうございます。

私は幼い頃から絵を描くこと、見るのが大好きでした。絵を描くことを仕事にすると決めており、中学までは美大を志望していました。しかし、高校時代に様々な人と出会い、あまり得意ではなかった人間関係が複雑であっても楽しくなり、人の心の動きに強く惹かれて臨床心理学の道に進むことになりました。今、心理臨床において再び絵と関わっていることを感慨深く思います。

最後に、私の帰りを待ちわびてくれ、毎日毎日、愛らしい表情とお茶目な仕草で励ましてくれた愛犬ロシナとキュートに「ありがとう」を贈ります。

2014年2月
瀬瀬千晶